椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

—6—

福岡県京都郡豊津町所在遺跡群の調査

神　手　遺　跡

1992

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

—6—

福岡県京都郡豊津町所在遺跡群の調査

神手（こうで）遺跡

完成した国道10号線椎田バイパスと神手遺跡

1）神手遺跡全景（南から）

2）神手遺跡８・９号土壙墓近景（北から）

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、一般国道10号線椎田バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和61年以降実施して来ました。そして、平成元年度までに全ての調査が終了し、平成３年３月15日には、京都郡豊津町徳永～築上郡椎田町上の河内間10.3kmの一般供用が開始される運びとなりました。このことは、福岡県東部地域の活性化にとりましても、誠に慶賀の念に堪えないものであります。

本書は、昭和62年度に調査を実施した豊津町所在の神手遺跡の調査結果を「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第６集として取りまとめたものです。

発掘調査の報告として、満足いくものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する県民の正しい認識と理解、文化財愛護思想の普及、さらには生涯学習時代を迎えての地域史研究の一助になれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々のご協力を頂いた日本道路公団福岡建設局、同椎田工事事務所、豊津町教育委員会をはじめ地元関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成４年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　御手洗　康

例　言

1．福岡県教育委員会は、昭和61年度より平成元年度に至るまで、日本道路公団から委託を受けて、一般国道10号線椎田バイパス建設で破壊される埋蔵文化財を発掘調査した。

2．本書は、昭和62年度に実施した福岡県京都郡豊津町所在の神手（KOUDE）遺跡の発掘調査報告書であり、「一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財報告」の第６集目にあたる。

3．遺構の実測図は、調査担当者の柳田康雄、緒方泉の他、西村健司、田村悟、犬塚カヲル、荒巻朋子の各氏が、遺物の整理、図面の整理・作成には、担当者の緒方の他に、岩瀬正信、豊福弥生、平田春美、関和江、小崎みゆき、棚町陽子、友永澄子、中川真理子、原カヨ子、水野美奈、岡由美子、黒木美幸の各氏が従事した。

4．掲載写真のうち、遺構を担当者の柳田、緒方が撮影したが、遺物の撮影は岡紀久夫、水ノ江和同の各氏にお願いした。

5．本書の執筆は、第２章第３節３を水ノ江が、その他を緒方が担当し、とりまとめは緒方が行った。

本 文 目 次

第1章　はじめに

第1節　調査経過と調査組織 …… 1

1．昭和62年度の調査経過と調査組織 …… 1

2．平成3年度の報告書作成の経過と関係組織 …… 7

第2節　遺跡の位置と環境 …… 8

1．遺跡の位置 …… 8

2．周辺の遺跡 …… 9

第2章　神手遺跡の調査

第1節　はじめに …… 17

第2節　遺構 …… 17

1．竪穴住居跡 …… 17

2．貯蔵穴 …… 26

3．古墳 …… 33

4．集石墓 …… 34

5．石棺墓 …… 35

6．石蓋土壙墓 …… 35

7．土壙墓 …… 36

8．土坑 …… 43

9．おとし穴状遺構 …… 52

10．溝状遺構 …… 55

第3節　遺物 …… 59

1．土器 …… 59

2．土製品 …… 82

3．石器 …… 83

第3章　おわりに …… 89

図 版 目 次

巻頭図版1　1）神手遺跡全景（南から）
　　2）神手遺跡8・9号土壙墓近景（北から）
巻頭図版2　完成した国道10号線椎田バイパスと神手遺跡
図版1　1）神手遺跡遠景（皆見遺跡から周防灘をみる）
　　2）神手遺跡全景（南から）
図版2　1）神手遺跡近景（南から）
　　2）神手遺跡近景（北から）
図版3　1）神手遺跡近景（北西から）
　　2）神手遺跡近景（南西から）
図版4　1）神手遺跡近景（北東から）
　　2）神手遺跡近景（北西から）
図版5　1）1号竪穴住居跡（北西から）
　　2）2号竪穴住居跡（北西から）
図版6　1）3号、11号竪穴住居跡遠景（南から、完掘前）
　　2）3号、11号竪穴住居跡（南から、完掘前）
図版7　1）3号、11号竪穴住居跡（南から、完掘後）
　　2）3号竪穴住居跡炉出土土器検出状況
図版8　1）4号竪穴住居跡（北東から）
　　2）4号竪穴住居跡（南から）
図版9　1）5号竪穴住居跡（南東から）
　　2）5号竪穴住居跡（真上から）
図版10　1）6号竪穴住居跡遠景（北東から）
　　2）6号竪穴住居跡（南から）
図版11　1）7号～10号竪穴住居跡遠景（北から）
　　2）7号～10号竪穴住居跡（真上から）
図版12　1）7号竪穴住居跡周溝（南から）
　　2）7号～10号竪穴住居跡近景（南から）
図版13　1）1号貯蔵穴
　　2）2号貯蔵穴
図版14　1）3号貯蔵穴（土器取り上げ前）

図版14　2）3号貯蔵穴（土器取り上げ後）
図版15　1）4号貯蔵穴
2）6号貯蔵穴
図版16　1）5号貯蔵穴（土器取り上げ前）
2）5号貯蔵穴（土器取り上げ後）
図版17　1）10号貯蔵穴
2）12号貯蔵穴
図版18　1）1号墳遠景（南東から）
2）1号墳（北西から）
図版19　1）1号集石墓（西から）
2）1号集石墓（東から）
図版20　1）1号石棺墓（北から、完掘前）
2）1号石棺墓（北から、完掘後）
図版21　1）1号石棺墓（東から）
2）1号石棺墓鉄器出土状況
図版22　1）1号石蓋土壙墓（西から、石蓋除去前）
2）1号石蓋土壙墓（西から、石蓋除去後）
図版23　1）2号土壙墓
2）3号土壙墓
図版24　1）4号土壙墓
2）5号土壙墓
図版25　1）6号土壙墓
2）7号土壙墓
図版26　1）8号～9号土壙墓遠景（南から、完掘後）
2）8号～9号土壙墓（南から、完掘後）
図版27　1）8号～9号土壙墓（南から、完掘前）
2）8号～9号土壙墓（北から、完掘後）
図版28　1）8号土壙墓（南から、完掘前）
2）8号土壙墓（北から、完掘後）
図版29　1）8号土壙墓鉄器出土状況（南から）
2）8号土壙墓鉄器出土状況
図版30　1）9号土壙墓（南から、完掘前）
2）9号土壙墓（北から、完掘後）

図版31　1）9号土壙墓南側粘土帯検出状況（北西から）
2）9号土壙墓北側粘土帯検出状況（東から）
図版32　1）8号土壙墓土層断面検出状況（南から）
2）9号土壙墓土層断面検出状況（南から）
図版33　1）2号土坑
2）5号土坑
図版34　1）3号土坑
2）4号土坑
図版35　1）12号土坑
2）26号土坑
図版36　1）16号土坑
2）28号土坑
図版37　1）29号土坑
2）21号～25号土坑群
図版38　1）4号おとし穴状遺構
2）3号おとし穴状遺構
図版39　1）2号溝状遺構（西から、土器取り上げ前）
2）2号溝状遺構（西から、土器取り上げ後）
図版40　1）4号溝状遺構（西から）
2）6号溝状遺構（西から）
図版41　神手遺跡出土土器①
図版42　神手遺跡出土土器②
図版43　神手遺跡出土土器③
図版44　神手遺跡出土石器①
図版45　神手遺跡出土石器②
図版46　1）神手遺跡出土石器③
2）神手遺跡出土土製品

付　図　目　次

付図1　神手遺跡発掘区地形図（1／2,000）
付図2　神手遺跡遺構配置図　（1／300）

挿 図 目 次

第1図　国道10号線椎田バイパス路線図（1/200,000）……2
第2図　神手遺跡作業風景……4
第3図　神手遺跡作業風景……4
第4図　神手遺跡作業風景……5
第5図　神手遺跡作業風景……5
第6図　神手遺跡作業風景……9
第7図　神手遺跡と周辺の遺跡分布図（1/50,000）……12
第8図　神手遺跡作業風景……14
第9図　1号竪穴住居跡実測図（1／60）……18
第10図　2号竪穴住居跡実測図（1／60）……18
第11図　3号、11号竪穴住居跡実測図（1／60）……19
第12図　4号竪穴住居跡実測図（1／60）……20
第13図　5号竪穴住居跡実測図（1／60）……22
第14図　6号竪穴住居跡実測図（1／60）……23
第15図　7～10号竪穴住居跡実測図（1／60）……25
第16図　1～6号貯蔵穴実測図（1／40）……28
第17図　7～11号貯蔵穴実測図（1／40）……29
第18図　12～14、18～19号貯蔵穴実測図（1／40）……31
第19図　1号墳実測図（1／60）……33
第20図　1号集石墓実測図（1／30）……34
第21図　1号石蓋土壙墓実測図（1／30）……35
第22図　1号石棺墓跡実測図（1／30）……36
第23図　2～4号土壙墓実測図（1／30）……37
第24図　5～7号土壙墓実測図（1／30）……39
第25図　8～9号土壙墓実測図（1／30）……41
第26図　8～9号土壙墓作業風景……42
第27図　10～11号土壙墓実測図（1／30）……43
第28図　2～5、8、10～11号土壙実測図（1／40）……44
第29図　12～17号土壙実測図（1／40）……47
第30図　18～24号土壙実測図（1／40）……48

第31図　25～26、28～30号土壙実測図（1／40）……50
第32図　1～5号おとし穴状遺構実測図（1／40）……53
第33図　2－4号溝状遺構土層断面図（1／40）……56
第34図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……59
第35図　4号～7号竪穴住居跡出土土器実測図（1／4）……60
第36図　2号貯蔵穴出土土器実測図（1／4）……62
第37図　3号、5号～6号貯蔵穴出土土器実測図（1／4）……64
第38図　7号貯蔵穴出土土器実測図（1／4）……65
第39図　8号～9号、11号、18号貯蔵穴出土土器実測図（1／4）……67
第40図　10号貯蔵穴出土土器実測図（1／4）……68
第41図　12号貯蔵穴出土土器実測図（1／4）……69
第42図　14号貯蔵穴出土土器実測図（1／4）……71
第43図　19号貯蔵穴出土土器実測図（1／4）……72
第44図　2号～3号、5号、8号、15号、19号、22号土壙出土土器実測図（1／4）……74
第45図　11号、16号、24号、28号～30号土壙出土土器実測図（1／4）……75
第46図　13号土壙出土土器実測図（1／4）……77
第47図　おとし穴状遺構出土土器実測図（1／4）……79
第48図　溝状遺構出土土器実測図（1／4）……80
第49図　ピット等出土土器実測図（1／4）……82
第50図　神手遺跡出土土製品実測図（1／2）……83
第51図　神手遺跡出土石器実測図①（2／3）……84
第52図　神手遺跡出土石器実測図②（2／3）……85
第53図　神手遺跡出土石器実測図③（2／3）……86

表目次

第1表　一般国道10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表……3
第2表　周辺の遺跡一覧表……13
第3表　石器観察表……87
第4表　石器観察表……88

第1章

はじめに

第1節　調査経過と調査組織
1．昭和62年度の調査経過と調査組織
2．平成3年度の報告書作成の経過と関係組織
第2節　遺跡の位置と環境
1．遺跡の位置
2．周辺の遺跡

第1章　はじめに

第1節　調査経過と調査組織

1．昭和62年度の調査経過と調査組織（第1図、第1表）

福岡県教育委員会は、一般国道10号線椎田バイパス（京都郡豊津町徳永～築上郡椎田町上の河内間、10.3km）に関係する埋蔵文化財調査を日本道路公団から委託され、昭和61年度よりその調査を開始した。これらの調査は、築上郡椎田町所在の石堂中後ヶ谷古墳群に始まり、平成元年度の築上郡築城町所在の安武・深田遺跡をもって終了している（第1図、第1表）。実施した発掘調査箇所は、24ヶ所に及び、その調査面積は175,862㎡になった。

昭和62年度には、京都郡豊津町に所在する第1・2地点の調査が実施された（第2地点の調査報告については、昭和63年3月31日刊行の「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査(1)」、平成3年3月31日刊行の「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査(3)」で行っている）。

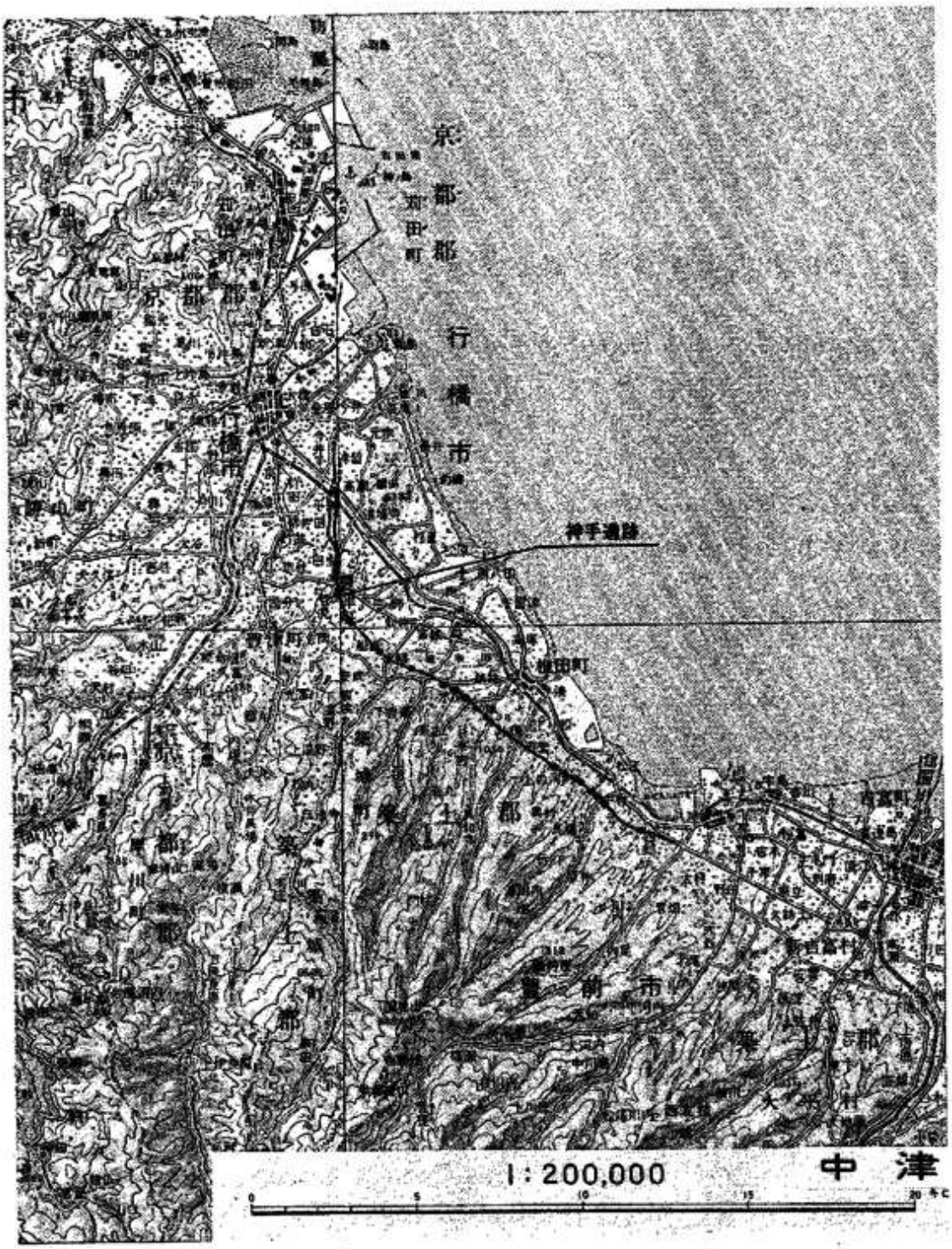
第1・2地点の調査に先立ち、福岡県教育委員会は、昭和61年3月3日から3月25日まで椎田バイパス全体にわたって分布調査及び試掘調査を実施し、第1地点の分布面積は、約1200㎡となった（STA.0～STA.1）。

第1地点の調査は、昭和63年2月5日に始まり、3月31日をもって終了した。

その結果、実際の調査面積は1,000㎡となり、検出した遺構には、竪穴住居跡、貯蔵穴、おとし穴状遺構、石蓋土壙墓、古墳、集石墓、土壙墓、土坑、ピットなどがあり、所属時期は弥生時代前期末から平安時代にかけての複合遺跡であることがわかった。

この第1地点の調査に先立ち、昭和62年8月8日から先述した、第2地点の調査も行なわれている。

第2地点は、道路や水路等により区分される6ヵ所（第2—A、B、C、D、E、F、地点）があり、その調査面積は28,900㎡であった。なお、この地点の調査にあたっては、昭和62年7月当時、福岡県教育委員会では、同じく日本道路公団から委託された九州横断自動車道関係の発掘調査に、文化課職員の主力がさかれており、椎田バイパスへの人員投入は困難な状態にあった。そこで、福岡県教育委員会は、調査地点の所在する豊津町に、文化財担当職員がいることから、町へ第2地点の何ヵ所かを福岡県から再委託する形で調査遂行可能かを打診した。豊津町は、この要請を快諾し、第2地点のうちB地点（調査面積11,000㎡、八ッ重遺跡）、C地点（調査面積3,300㎡、弓田遺跡）の調査に入ることとなった。調査期間は、昭和62年10月



第 1 図　国道10号線椎田バイパス路線図（1/200,000）

第1表　一般国道10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積(㎡)	調査地区と面積				備考	報告書
					61年度(㎡)	62	63	平1		
1	神手遺跡	豊津町徳永	弥生・古墳集落、墓地	1,200	試掘(1,200)	1,000			完了	6集
2-A	皆見遺跡	〃 皆見	弥生・古墳・奈良集落	9,600	試掘	9,600			完了	3集
2-B	八ツ重遺跡	〃 〃	〃	11,000	〃	11,000			豊津町委託完了	1集
2-C	弓田遺跡	〃 下原	〃	3,300	〃	3,300			〃 完了	1集
2-D	下原遺跡	〃 〃	〃	2,000	〃	2,000			完了	3集
2-E		〃 〃	〃		〃	2,000			遺構なし完了	—
2-F	カワラケ田遺跡	〃 皆見	〃	3,000	〃	2,900			完了	3集
3		築城町船迫	古墳溝	4,683				4,683	完了	5集
4		〃 〃			試掘(3,600)				遺構なし完了	—
5	双子池遺跡	〃 安武	弥生散布地	4,547	試掘		4,547		完了	—
6-A	安武・土井の内遺跡	〃 〃	弥生・古墳集落	5,300	〃		800	4,500	完了	5集
6-B	安武・深田遺跡	〃 〃	弥生・古墳集落・墓地	22,000	〃		11,000	11,000	完了	5集
7-A	塞ノ神遺跡	〃 赤幡	中世石積	450	〃			450	完了	8集
7-B	赤幡・森ヶ坪遺跡	〃 〃	古墳～平安集落	20,800	〃		2,000	18,800	完了	8集
7-C	赤幡・十双遺跡	〃 赤幡広末	弥生・古墳集落	9,500	〃		7,500	2,000	完了	8集
8	広末・安永遺跡	〃 広末	〃	5,900	〃		4,900	1,000	完了	4集
9	広幡城遺跡	〃	弥生・中・近世城跡	13,800	〃		13,800		完了	9集
10	山崎遺跡	椎田町水原	縄文・奈良集落	7,200	7,200				完了	7集
11	尾久保屋敷遺跡	〃 〃	古墳集落	160	160				完了	7集
13	寺尾遺跡	〃 日奈古	〃	5,800	5,800				完了	7集
16		〃 山本			試掘				遺構なし完了	—
18		〃 上り松			〃				遺構なし完了	—
21	石堂中後ヶ谷古墳群	〃 石堂	古墳墓地	19,500	19,500				完了	2集
22	菜切古墳群	〃 福岡	〃	11,000	11,500				完了	2集
23	頸無古墳群	〃 山添	〃	15,000	15,000				完了	2集
24		〃 石堂				422			遺構なし完了	—
			計	175,740	(4,800) 58,660	32,222	44,547	42,433		9冊

14日から昭和63年2月13日までであった。

さて、第2地点の残り部分を担当することになった福岡県教育委員会はA地点（調査面積9,000㎡、畦見遺跡、STA.4＋80～STA.7）（付図1）の調査を、昭和62年8月8日から実施した。祓川右岸の河岸段丘上（標高約30m）に立地する調査区内では竪穴住居跡6軒、掘立柱建物13棟、溝状遺構5条、井戸1基、土坑、ピット等を検出した。それらの所属時期は弥生時代から歴史時代に及んだ。調査は12月7日をもって終了した。

また、A地点とは、県道節丸・新田原停車場線をはさんで西側に立地するF地点（調査面積3,000㎡、カワラケ田遺跡、非常駐停車部分）の調査は、A地点の遺構検出が終了し、実測作業に入る段階の11月14日から開始し、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物2棟、貯蔵穴6基、落とし穴状遺構1基、土壙墓3基、溝状遺構8条、土坑、ピットなどを検出した。それらの所属時期は弥生時代から奈良時代に及んだ。調査は年を越した昭和63年1月25日に終了した。

第2図　畦見遺跡全景（畦見遺跡から徳永遺跡群をみる）破線内が神手遺跡

その間、E地点の調査も実施した。ここは、「福岡県遺跡等分布地図（行橋市・京都郡編）」に掲載される遺物散布地の「峰遺跡（遺跡番号920010）」であったので、試掘調査の際、家屋撤去が間に合わず、遺構の有無の確認が出来なかったにもかかわらず、E地点（分布面積650㎡）として、調査対象地に挙げていた。そこで、家屋撤去の完了した11月22日、バックフォーにより遺構検出を図ったが、旧築城町役場のコンクリート基礎が深く入りこみ、攪乱が甚大であり、遺構等の検出は全くなかった。

D地点（調査面積2000㎡、下原遺跡、STA.17＋40～STA.18）の調査は、F地点の調査が終了した昭和63年1月25日の翌日、26日から実施した。築城町との境界付近の低台地上に立地するF地点の調査では、西側の小谷方向へ走る時期不詳の小溝5

第3図　工事が急ピッチで進む椎田バイパス第2地点付近

条とピットを検出するに止まった。調査は2月4日で終了した。

以上が、昭和62年度実施した神手遺跡の調査の経過と同年度実施した周辺遺跡の調査の経過である。

昭和62年度の整理・報告書作成作業は、日本道路公団から、椎田バイパス早期一般供用開始を目指しての発掘調査最優先の要望が出されたことから、第2地点終了後、すぐに第1地点の調査に着手し、年度末までその調査が継続したために、報告書作成は、来年度以降へ見送りとすることにした。

第 4 図　防寒着をまとっての1号住居跡作業風景

第 5 図　平尾台からの吹き降ろしの寒風の中での作業風景

しかし、本年度、豊津町へ再委託された第2—B・C地点（八ッ重遺跡、弓田遺跡）の成果は、「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集として刊行された。

なお、発掘調査遂行にあたっては、日本道路椎田バイパス工事事務所、豊津町教育委員会、福岡県教育庁京築教育事務所から多大なご援助、ご協力を頂いた。さらに、調査作業員として参加いただいた地元関係各位のご協力により、事故もなく無事遂行できた。

ここに記して感謝の意を表したい。

昭和62年度の調査関係者は下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　長	杉田　美昭	
次　長	吉岡　康行	菱刈　庄二（前任）
総務部長	安元　富次	
管理課長	副島　紀昭	森　宏之（前任）
管理課長代理	三野　徳博	

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所長	山田　将博		
副所長（事務担当）	佐藤　健一郎	渕脇　志水（前任）	
副所長（技術担当）	坂牧　嵩三		
庶務課長	樫川　敏博	塩川　正基（前任）	
用地課長	二神　鉄男		
工務課長	佐々木　俊治		
築城工事区工事長	山口　宗雄		
椎田工事区工事長	黒田　義樹		

福岡県教育委員会

総括	教育長	竹井　宏	
	教育次長	大鶴　英雄	
	指導第二部長	大平　岩男	
	文化課課長	窪田　康徳	
	文化課課長補佐	平　聖峰	
	文化課課長技術補佐	宮小路　賀宏	
	文化課参事補佐	柳田　康雄	
庶務	文化課庶務係長	加藤　俊一	
	文化課事務主査	竹内　洋征	
調査	文化課調査班総括（兼）	柳田　康雄	
	同技師	緒方　泉（現京築教育事務所社会教育課主任技師）	

調査補助　西村健司（同志社大学・現〈財〉杖方市埋蔵文化財センター）、田村悟（同志社大学、現直方市教育委員会）、高橋二郎（福岡大学）。

発掘調査にあたっては、以下の方々の協力を得た。

加藤弘義、高見勵太、椎野鬼怒丸、杉野政一、井手綾子、三井恭子、小池冨久美、末松浅枝、松田美智江、末松エミ子、秋吉カネ子、石川たまよ、森元なつ子、樋口多美子、高橋由利子、松本多貴子、松尾チヅ代、谷口八重子、池永なみ、木村初子、奥村マツ子、野田加代子、竹本美由紀、仲律子、吉永奈緒美、荒巻朋子、西森ヒサ子、犬塚カヲル、田原フジ子、横山康子、馬場清子、山本幸一。

2．平成３年度の報告書作成の経過と関係組織

平成３年度の報告書作成は、県内各所における発掘調査最優先のため、職員の報告書作成準備に要する時間の確保が困難ではあったが、本年度をもって日本道路公団から委託を受けた椎田バイパス関係予算の終結という緊迫した事態をむかえ、平成元年度刊行の第２集「石堂中後ヶ谷古墳群・茶切古墳群・頭無古墳群」、平成２年度刊行の第３集「哲見遺跡・カワラケ田遺跡・下原遺跡」、第４集「広末・安永遺跡」、第５集「安武・土井の内遺跡、安武・深田遺跡」に引き続き、

第６集「神手（KOUDE）遺跡」

第７集「山崎（YAMASAKI）遺跡」

第８集「十双・森ヶ坪（JUSSOU・MORIGATUBO）遺跡」

第９集「広幡城（HIROHATAJYO）跡」

の計４冊を刊行することになった。

なお、椎田バイパスは、平成元年度の発掘調査終了後、その建設工事は急ピッチに進められ、平成３年３月15日には、豊津町徳永から椎田町上の河内間10.3㎞が有料区間として一般供用され、福岡県北九州市から大分県中津市を結ぶ国道10号線の新たな交通網として、その利用頻度は高いものである。

平成３年度の報告書作成にあたっての関係者は、下記のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局長	加藤　興史	中野　英治（前任）
次長	渡辺　国几	高野　武（前任）
総務部長	岡本　房徳	
管理課長	江良　信弘	
管理課長代理	塚本　文康	

日本道路公団福岡建設局椎田工事事務所

所長	大島　勲
副所長	国本　忠敬
庶務課長	樫川　敏博
工務課長	飯田　文夫

なお、椎田工事事務所は、平成３年６月30日をもって、組織廃止となっている。

福岡県教育委員会

総括	教育長	御手洗 康
	教育次長	光安 常喜
	指導第二部長	月森 清三郎
	文化課課長	森山 良一
	文化課課長補佐	国武 康友
	文化課課長技術補佐	石松 好雄
	文化課参事補佐	柳田 康雄
	〃	井上 裕弘
	〃	副島 邦弘
庶務	文化課管理係係長	岸本 実
	文化課管理係主任主事	安丸 重喜
整理	福岡県教育庁京築教育事務所社会教育課	
	主任技師	緒方 泉

整理補助　岩瀬正信、豊福弥生、平田春美、小崎みゆき、棚町陽子、友永澄子、
中川真理子、原カヨ子、関和江、水野美奈、岡由美子、黒木美幸

最後に、報告書作成にあたっては、本務地である京築教育事務所の飯田昭所長、大尾勝美副所長、また社会教育課の森重高岑課長、伊崎俊秋主任技師、浦本陽子社会教育主事、尾座本康子氏をはじめ社会教育課課員の方々には格別のご配慮をいただいた。

また、指導第二部文化課の水ノ江和同技師には、石器類の執筆を分担していただいた。

ここに記して感謝の意を表したい。

第2節　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（巻頭図版1～2、第1、7図）

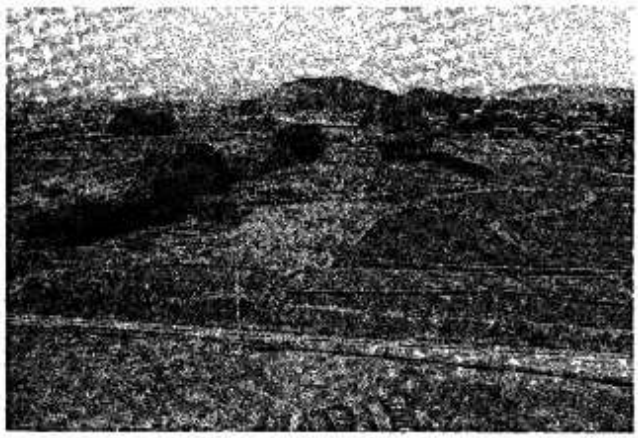
神手（こうで）遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字徳永字神手に所在する。これを、日本道路公団椎田バイパス中心杭番号等で表せば、STA.0～1となる。

この遺跡は、現在の海岸線から約3km入ったところにあり、京都平野南端、英彦山山系を源流とした周防灘に注ぐ祓川右岸の河岸段丘上に立地している。

豊津町は、人口10,000人弱で、福岡県東部、京都平野南端にあり、北東側に開口した平野部は周防灘に臨んでいる。町全域には広く洪積台地が分布し、その中央部には、祓川が流れる。神手遺跡の西側祓川左岸には、昭和55年より継続調査が進む豊前国府推定地がある。周囲には、

行橋市、京都郡犀川町、築上郡築城町が隣接する。

また、昭和63年、修理復工された県指定史跡豊前国分寺三重塔は、九州に現存する木造の仏塔三宇（福岡県清水寺天台三重塔、大分県龍源寺浄鎮三重塔）の1つで、町のシンボルとなっている。



第 6 図　神手遺跡からみた調査前の徳永遺跡群

2．周辺の遺跡（第7図、第2表）

神手遺跡は、祓川右岸の河岸段丘上（標高約32m）に立地する。ここからは、北側に広がる京都平野、さらには平尾台を含む山系、目を転じて西側には英彦山山系、東側には周防灘を臨むことができる。

豊津町は、肥沃な京都平野をかかえた自然環境に恵まれた場所に立地するため、古代より数多くの遺跡が残されている。中でも、古墳時代の彦徳甲塚、甲塚方墳などの数多くの古墳群、奈良～平安時代にかけての豊前国府推定地、豊前国分寺、上坂廃寺等の史跡は著名である。

この項では、周辺の遺跡について、既に「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集—弓田・八ツ重遺跡—」、「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第3集—苅見遺跡・カワラケ田遺跡・下原遺跡—」、「豊前国府」（豊津町文化財調査報告書第3～5集、第8～10集」に詳述されているため、近年椎田バイパス建設工事に伴い発掘調査が進められ、旧石器・縄文時代から中世にかけての様々な遺構・遺物が検出された「徳永川の上遺跡」（神手遺跡とは県道をはさんですぐ北側に位置する）を基軸にしながら、さらに近年発掘調査された周辺の遺跡の成果も合わせて、神手遺跡の位置付けを行っていきたい。

神手遺跡の周辺の遺跡として、まず取り上げられるのは、県道をはさんですぐ北側に位置する「徳永川の上遺跡」である。

徳永川の上遺跡は、神手遺跡と同じ祓川右岸の河岸段丘上に立地し、豊津町大字徳永に所在する。福岡県教育委員会では、一般国道10号線椎田バイパス建設に伴い、建設省北九州国道工事事務所より委託を受けて、その事前調査を1988年6月から1990年7月まで実施した。

その結果、縄文時代のおとし穴状遺構、井戸、土坑、弥生時代の竪穴住居跡、貯蔵穴、墳墓群、古墳時代の方墳、円墳、小石室、中世の土壙墓、木棺墓、地下穴横穴、土坑、溝などが検出された。

神手遺跡、徳永川の上遺跡、そして同じく祓川右岸の河岸段丘上に立地する鋤先遺跡、居屋

敷遺跡は、「徳永遺跡群」として約15haの複合遺跡ととらえられている。

以下、徳永川の上遺跡の各遺構を時代毎にみて、さらに当該期の周辺の遺跡の説明を加えていきたい。

旧石器時代では、当該期のものと推定されるナイフ形石器、細石刃の出土はあるが、遺構の検出はない。ところが、縄文時代に入ると、おとし穴状遺構41基、井戸15基が検出された。おとし穴状遺構からは打製石鏃、井戸からは縄文時代後期の土器片、そして包含層からは、押型文土器片、石斧、石匙、石鏃等が出土している。神手遺跡からも、縄文時代のおとし穴状遺構5基が検出されている。また平成3年度、行橋市教育委員会が調査した鬼熊遺跡からは、旧石器、・縄文時代の遺構の検出はなかったものの、ナイフ形石器や磨製石斧、打製石斧が出土した。

弥生時代の貯蔵穴は、袋状になるもので、円形のものが前期後半、長方形のものが前期末から中期初頭に属する。

神手遺跡では、前期末の円形貯蔵穴20基程が卵形状のV字形環濠で区画されている。このように、V字形溝で囲繞される貯蔵穴群の例としては、苅田町葛川遺跡にもみられる。祓川左岸の鬼熊遺跡では中期の貯蔵穴40基、カワラケ田遺跡では中期初頭の長方形貯蔵穴6基が検出された。

竪穴住居跡は、弥生時代中期と終末期のものがある。それぞれは、中期のものが南側に、終末期のものが北側に集中する傾向がある。中期のものは、円形と方形の2タイプがあり、多量の土器と炭化米が出土している。終末期のものは、方形でベッド状遺構を備えており、鉇、手鎌などの鉄製品や管玉が出土した。これら終末期の竪穴住居跡16基はすべて火災に遭い、柱などが焼け落ちた状態で検出されている。

神手遺跡では、後期から終末期にかけての7基のベッド状遺構を備えた竪穴住居跡が検出されており、同時期の徳永遺跡群においては、中央に中期までの竪穴住居跡群をはさみ、南北に後期から終末期にかけての2つの住居跡群が存在していたことがわかった。また、鬼熊遺跡では、中期の円形竪穴住居跡2基が検出された。

墳墓群は、先述した終末期の竪穴住居跡を埋め戻した後に、分布地域を重複させながら、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて造営されている。墳墓群のうち、墳丘と周溝が残っているのは4基で、周溝のみが残るものは6基あり、当時10基以上の墳丘墓が存在していたことは確実である。

墳丘墓の墳形は、円形、楕円形、隅丸長方形のものがあり、墳丘内部には石棺、石蓋土壙、土壙、甕棺、木棺等の各種墓制を5～12基内含している。1～4号墳丘墓のうち、最初に造られたのは3号墳丘墓で弥生時代後期に属する。最後期のものは、1号墳丘墓と割竹木棺墓で、古墳時代初期に属する。しかし、大半は弥生時代終末期のものである。

1号墳丘墓は、突出部、貼石を有する12×9ｍの長方形墳で、主体部は箱形木棺1基である。同時期の割竹木棺も同様だが、その副葬品は鉇、鉄斧等質量とも極めて貧弱なものである。ところが、弥生時代の墳墓は、副葬品が鏡、装身具類、鉄製品、供献土器等質的に豊富なもので、それぞれの墳墓に対する副葬品の保有率も高いのが特徴である。特に石棺墓の大半は盗掘・破壊されていたにもかかわらず、石蓋土壙墓や土壙墓から6面の鏡が出土した意義は大きい。また鉄製品では弥生時代最大級（長さ11.6cm）、最多（5本）の釣針が石蓋土壙墓の棺外から出土している。

副葬品の総数と内容は、以下の通りである。

○鏡　　龍虎鏡、連弧文鏡、方格規矩鏡片、画像鏡片、不明鏡片、小形仿製鏡片

○玉類　勾玉4、管玉49、丸玉1、小玉200以上（それぞれの材質は、ガラス、ヒスイ、メノウ、碧玉がある）

○鉄器　剣6、素環頭刀子3、鏃14、刀子17、鉇3、斧3、手鎌1、釣針5

○供献土器等

さて、神手遺跡からは、石棺墓1基、石蓋土壙墓1基、土壙墓11基、割竹木棺墓2基が検出された。徳永川の上遺跡と同様に、弥生時代終末期から古墳時代初頭のものと考えられるが、墳丘墓の様相はなく、さらに副葬品も極めて少量であった。

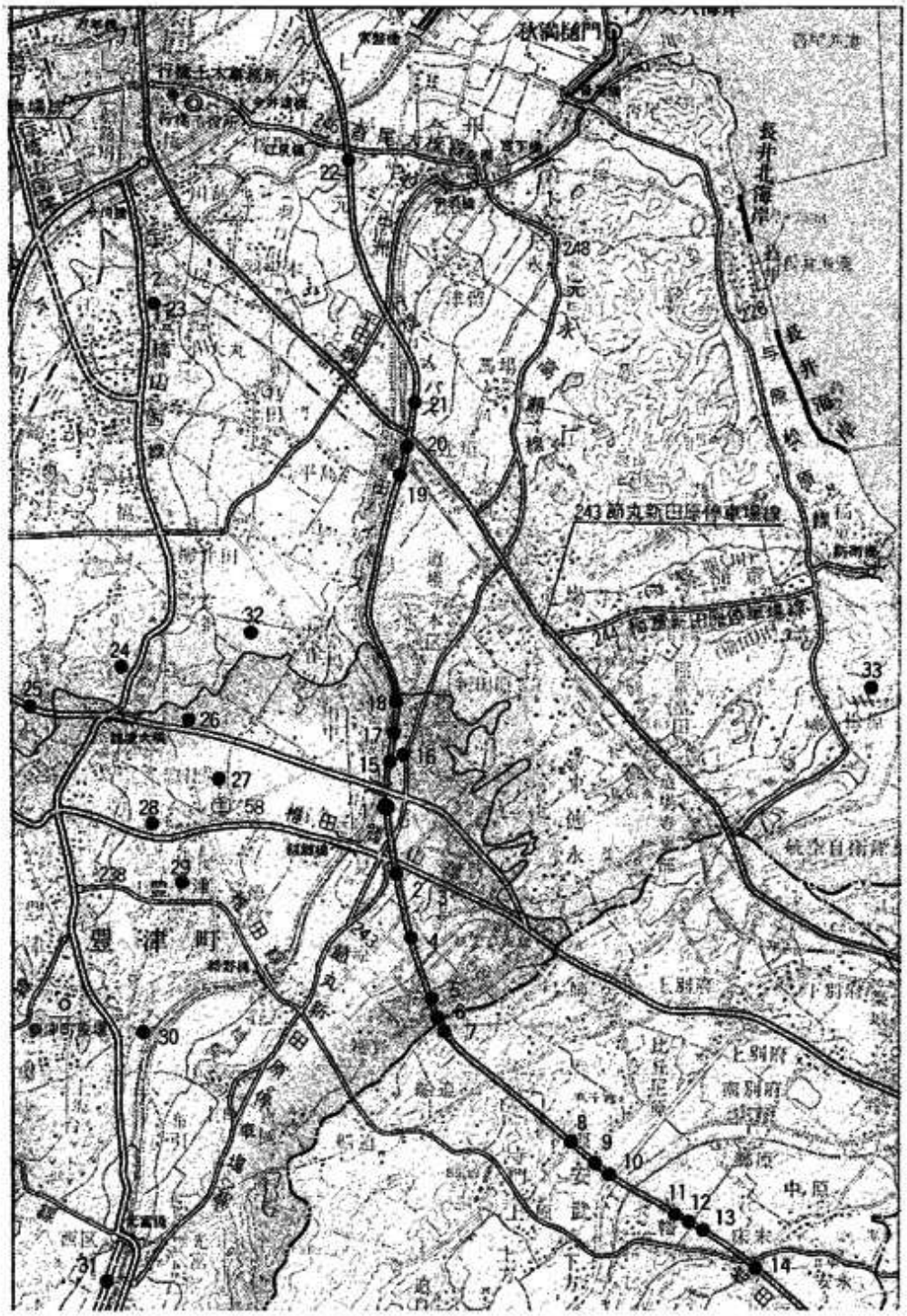
古墳時代では、4基の方墳と18基の円墳、そして4基の小石室が検出された。

4基の方墳のうち、3号墳は、主体部は破壊、消失しているものの、その周溝から仿製鏡1、勾玉4、小玉約450、鉄鋤先、鉄刀子、竪櫛6が出土し、5世紀初頭に位置づけられる。

5世紀代の遺構は、神手遺跡からは検出されていないが、同じ徳永遺跡群中の居屋敷遺跡からは、5世紀初頭の初期須恵器を生産した窯跡1基が調査された。この時期、祓川左岸の沖積平野には、5世紀前半の竪穴住居跡がみられる。それは、平成3年度に行橋市教育委員会が発掘調査した鬼熊遺跡である。12基の竪穴住居跡が検出されたが、それらはカマドを有しており、出土した須恵器には初期須恵器が含まれている。豊前地域におけるカマド保有の竪穴住居跡としては最古例で、居屋敷窯跡出土の初期須恵器との比較検討を行う中で、当時の需要と供給など生業関係が解明される端緒となろう。

18基の円墳は、後世の開墾等でほとんど破壊され、石室は腰石部のみを残すものが多数である。しかし、床面から出土する遺物はとても豊富で、金環、銀環、勾玉、切子玉、丸玉、小玉、鉄鏃、馬具、須恵器、土師器などがある。出土した土器から、6世紀後半から8世紀前半にかけて造墓活動が行なわれていることがわかった。

石室形態は、正方形、略正方形、縦長方形、T字形の4タイプ、羨道の形態は両袖、片袖、無袖の3タイプ、石室の開口方向は、西、南、南西、南東の4タイプがある。使用する石材は祓川の河原石である。



第 7 図　神手遺跡と周辺の遺跡分布図（S＝1/50,000）

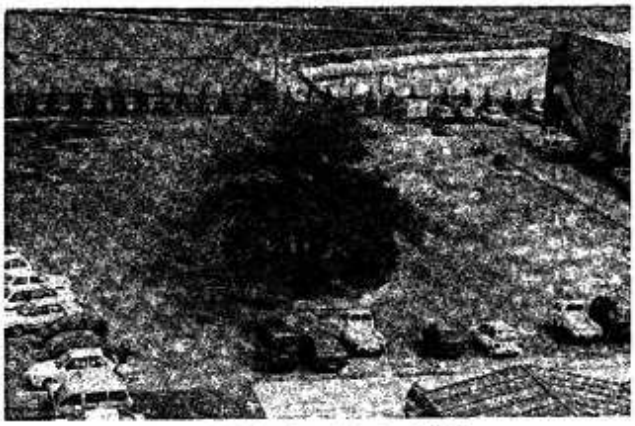
1、神手遺跡　2、3、皆見・カワラケ田遺跡　4、ハッ垂遺跡　5、弓田遺跡　6、下原遺跡　7、第3地点　8、第5地点　9、安武・土井の内遺跡　10、安武・深田遺跡　11、塞の神遺跡　12、十双遺跡　13、赤幡森ヶ坪遺跡　14、安永遺跡・広末　15、川の上遺跡　16、源左エ門遺跡　17、鍛先遺跡　18、居屋敷遺跡　19、辻垣ヲサマル遺跡　20、辻垣長通遺跡　21、津留遺跡　22、金屋遺跡（以上、国道10号線バイパス関係遺跡）　23、崎野遺跡　24、竹並遺跡　25、矢留遺跡　26、幸木遺跡　27、豊前国府推定地　28、北原遺跡　29、豊前国分寺　30、上坂廃寺　31、節丸西遺跡　32、鬼熊遺跡　33、渡築紫遺跡

第2表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	文献
1	神手遺跡	集落・墓地	京都郡豊津町大字徳永	弥生～古墳時代	昭和62年度調査
2	呰見遺跡	集落	京都郡豊津町大字呰見	弥生～中世	椎田バイパス第3集
3	カワラケ遺跡	〃	〃	〃	〃
4	八ツ重遺跡	〃	〃	〃	椎田バイパス第1集
5	弓田遺跡	〃	〃 大字下原	古墳～平安時代	〃
6	下原遺跡	〃	〃	—	椎田バイパス第3集
7	第3地点	集落(？)	築上郡築城町大字船迫	古墳時代	〃 第5集
8	第5地点	〃	〃 大字安武	時期不明	〃
9	安武・土井の内遺跡	集落	〃	縄文～中世	〃
10	安武深田遺跡	〃	〃	弥生～奈良時代	〃
11	塞の神遺跡	墓地(？)	〃 大字赤幡	中世	〃 第8集
12	十双遺跡	集落	〃	弥生～古墳	〃
13	赤幡森ケ坪遺跡	〃	〃	縄文～奈良時代	平成元年度調査
14	安永広末遺跡	墓地	〃 大字広末	縄文～弥生時代	椎田バイパス第4集
15	徳永川の上遺跡	集落・墓地	京都郡豊津町大字徳永	縄文～中世	昭和63年度～平成2年度調査
16	源左ェ門遺跡	集落	〃	弥生～中世	平成3年度調査
17	鍋先遺跡	集落・墓地	〃	縄文～近世	平成2年度調査
18	居屋敷遺跡	窯跡・墓地	〃	弥生～古墳時代	平成元年度調査
19	辻垣ヲサマル遺跡	集落	行橋市大字辻垣	〃	昭和62年度調査
20	辻垣長通遺跡	〃	〃	〃	昭和63年度調査
21	津留遺跡	〃	〃 大字津留	〃	行橋バイパス第1集
22	金屋遺跡	〃	行橋市金屋	弥生～近世	行橋バイパス第2集
23	崎野遺跡	〃	行橋市崎野	古墳～近世	平成2年度調査
24	竹並遺跡	集落・墓地	行橋市大字竹並	弥生～奈良時代	竹並遺跡調査会
25	矢留遺跡	集落	〃 大字矢留	弥生～古墳時代	県報 第85集
26	幸木遺跡	散布地	京都郡豊津町大字国作	奈良～平安時代	町報 第2集
27	豊前国府推定地	官衙	〃	〃	町報第3～5，8～9集
28	北原遺跡		〃 大字国分	弥生～近世	町報 第6集
29	豊前国分寺	寺院	〃	奈良～平安時代	町報 第1集
30	上坂廃寺	〃	〃 大字上坂	〃	豊津町誌
31	節丸西遺跡	集落	〃 大字節丸	縄文時代	町報 第9集
32	鬼熊遺跡	〃	行橋市鬼熊	弥生～古墳	平成3年度調査
33	渡築紫遺跡	墓地・集落	行橋市渡築紫	古墳～奈良時代	〃

その他いくつかの古墳では、羨道からの墓道が長く祓川に延びているものがあり、当時、祓川からの葬送儀礼が行われていたと推定される。

神手遺跡では、古墳1基を検出している。しかし、この古墳は後世の開墾等により、腰石さえも残しておらず、石材の抜き取り箇所でその存在を推測した。ところで、神手遺跡に隣接する現在の深江工作所内には、



第8図　吹ヶ上古墳群があった深江工作所

「福岡県文化財分布地図（行橋市、京都郡編）」によると、神手遺跡と同一古墳群を構成すると思われる吹ヶ上古墳群（1－4号墳、消滅、第8図）があった。さらに、徳永遺跡群中の居屋敷遺跡では、6世紀前半から7世紀前半にかけての横穴墓10基が検出された。この付近には、現在の字名にも、八十塚、四十塚などの地名の残っていることから、当時、相当数の群集墳が存在していたものと推定される。

さて、これらの古墳群の存在は、7世紀末から、豊前地域に建立される古代寺院（田川市天台廃寺、京都郡犀川町木山廃寺、同郡勝山町菩提廃寺、同郡豊津町上坂廃寺、行橋市椿市廃寺、行橋市椿市廃寺、築上郡新吉富村垂水廃寺）や豊津町の豊前国府、そして8世紀代の豊前国分寺の成立と何らかの関係をもつ集団がいたことを物語るのである。特に、豊前地域の古代寺院から出土する古瓦は、朝鮮半島三国時代の新羅、百済、高句麗系のものが集中する傾向にある。このことは、大宝二年（702）豊前国戸籍帳に所載する上三毛郡塔里（現在の築上郡大平村唐原付近）、上三毛郡加自久也里（現在の豊前市梶屋付近）、仲津郡丁里（現在の京都郡内）に「秦氏、勝姓」など渡来系氏姓の存在とも軌を一にしてくるものである。

ところで、こうした徳永川の上古墳群を墓域とすれば、当時の生活域、つまり集落の存在がどこであったのかが今後の検討課題として残った。そこで平成3年度、豊津町教育委員会では、祓川右岸、徳永川の上遺跡とは小さな谷をはさんで東へ200mのところにある源左エ門遺跡を農村基盤パイロット事業のために事前発掘調査を行い生活域がそのあたりであることの実証がなされることを期待した。

その結果、この遺跡は、弥生時代から中世に及ぶ複合遺跡であることがわかった。

各時代の遺構は、弥生時代では、竪穴住居跡1基、甕棺墓1基を検出した。

古墳時代では、竪穴住居跡17基を検出した。

平安時代では、掘立柱建物8基を検出した。

中世では、地下式横穴5基、土坑6基、溝6条を検出した。

このうち、古墳時代の竪穴住居跡は、出土土器から6世紀後半代のものであった。小さな谷をはさんで隣接する徳永川の上遺跡や神手遺跡の古墳群が6世紀後半から8世紀前半にかけて造営されていることから、祓川右岸での生活域と墓域の区分が、この小谷により成されていたことが推測され、当時の集落構成を探る上で貴重な資料を得ることができた。また、祓川右岸の砦見遺跡では6世紀後半から7世紀前半にかけての集落が検出された。

歴史時代では、鎌倉時代から古墳群が再利用されるようになる。それらは墓碑として五輪塔を有するものが多い。また、これと共存する溝、柱穴、円形土坑、長方形土坑、土壙墓、木棺墓が検出された。出土遺物には、青磁、白磁等の輸入陶磁器、土師器、鉄刀、鉄釘、石臼、五輪塔、鉄鐸等がある。

源左エ門遺跡では、平安時代の掘立柱建物8棟、中世の地下式横穴5基、土坑6基、溝6条が、鍛先遺跡では、地下式横穴、土壙墓、土坑、溝が検出された。また、カワラケ田遺跡では、12世紀後半の土壙墓4基が検出された。この他鬼熊遺跡では、土壙墓2基、溝1条が検出された。

このように、京都平野南端に貫流する祓川両岸の沖積平野及び洪積台地には、旧石器、縄文時代より連綿と、集落が展開されていることがわかった。こうした基盤をもとにして、奈良時代に豊前国の中心である国府が、この祓川左岸の沖積平野に置かれることも首肯できるというものである。

第２章

神手遺跡の調査

第１節　はじめに
第２節　遺　　構
1．竪穴住居跡
2．貯蔵穴
3．古　墳
4．集石墓
5．石棺墓
6．石蓋土壙墓
7．土壙墓
8．土　坑
9．おとし穴状遺構
10．溝状遺構
第３節　遺　　物
1．土　器
2．土製品
3．石　器

第２章　神手遺跡の調査

第１節　はじめに

神手遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字徳永字神手に所在する。

この遺跡は、京都平野南端を貫流する祓川右岸の河岸段丘上（標高32ｍ付近）に立地する。北側には、県道椎田・勝山線をはさんで、一般国道10号線椎田バイパス関係で発掘調査した徳永川の上遺跡（1988年～1990年まで、福岡県教育委員会が調査、現在整理中）、鋤先遺跡（1990年、福岡県教育委員会が調査、現在整理中）、居屋敷遺跡（1989年福岡県教育委員会が調査、現在整理中）さらに源左エ門遺跡（1991年、豊津町教育委員会が調査、現在整理中）があり、これらと合わせて約15haの「徳永遺跡群」を構成するものと推定される。

調査地点は、従来、水田及び畑として耕作されていた。

調査期間は、昭和63年２月５日から３月31日までの55日間で、調査面積は1200㎡であった。

調査の結果、検出された遺構には、竪穴住居跡11軒、貯蔵穴19基、古墳１基、集石墓１基、石棺墓１基、石蓋土壙墓１基、土壙墓10基、土坑23基、おとし穴状遺構５基、溝状遺構18条、ピット等があった。そして、それらより出土した土器等から、神手遺跡は旧石器・縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることがわかった。

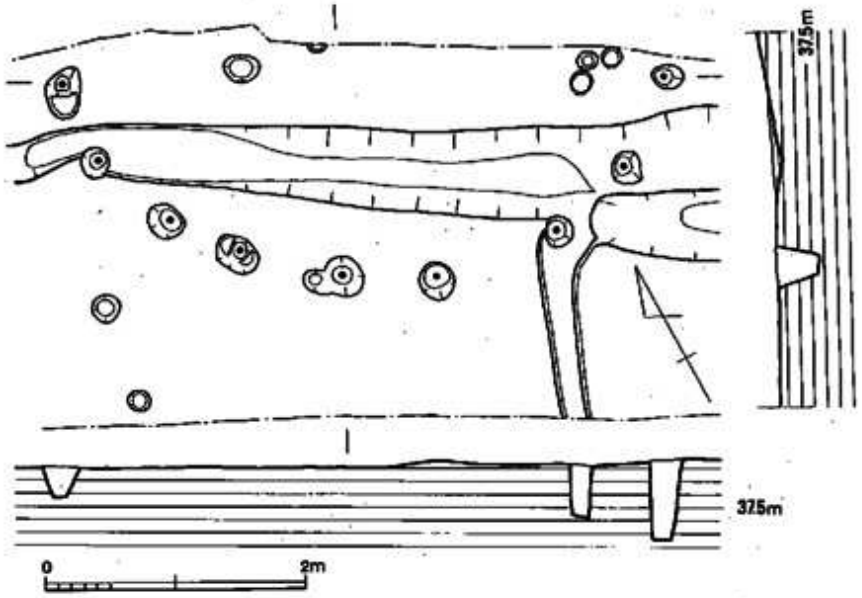
第２節　遺構

１）竪穴住居跡

調査区内からは、計11軒の竪穴住居跡を検出した。

１号竪穴住居跡（図版５、第９図）

１号竪穴住居跡は、調査区（本線部分）東北隅から工事用取り付け道路部分を東側に進んだ所に位置する。西側には２号竪穴住居跡があり、また、２号溝状遺構により切られる。この遺構は、後世の開墾等による削平のため、壁体等は全く残っておらず、円形に巡る柱穴群のみを検出し、その形状が円形プランになると確認できた。これらの円形に巡る柱穴群は、図状復元により、径５ｍの円周上に配置されることが推定される。



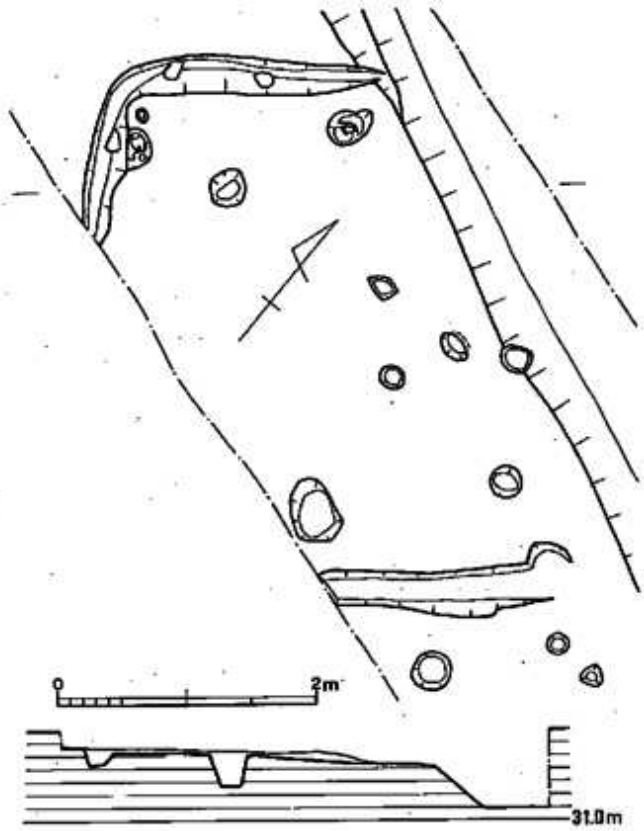
第 9 図　1号竪穴住居跡実測図（1/60）（●印は主柱穴を示す）

2号竪穴住居跡（図版5、第10図）

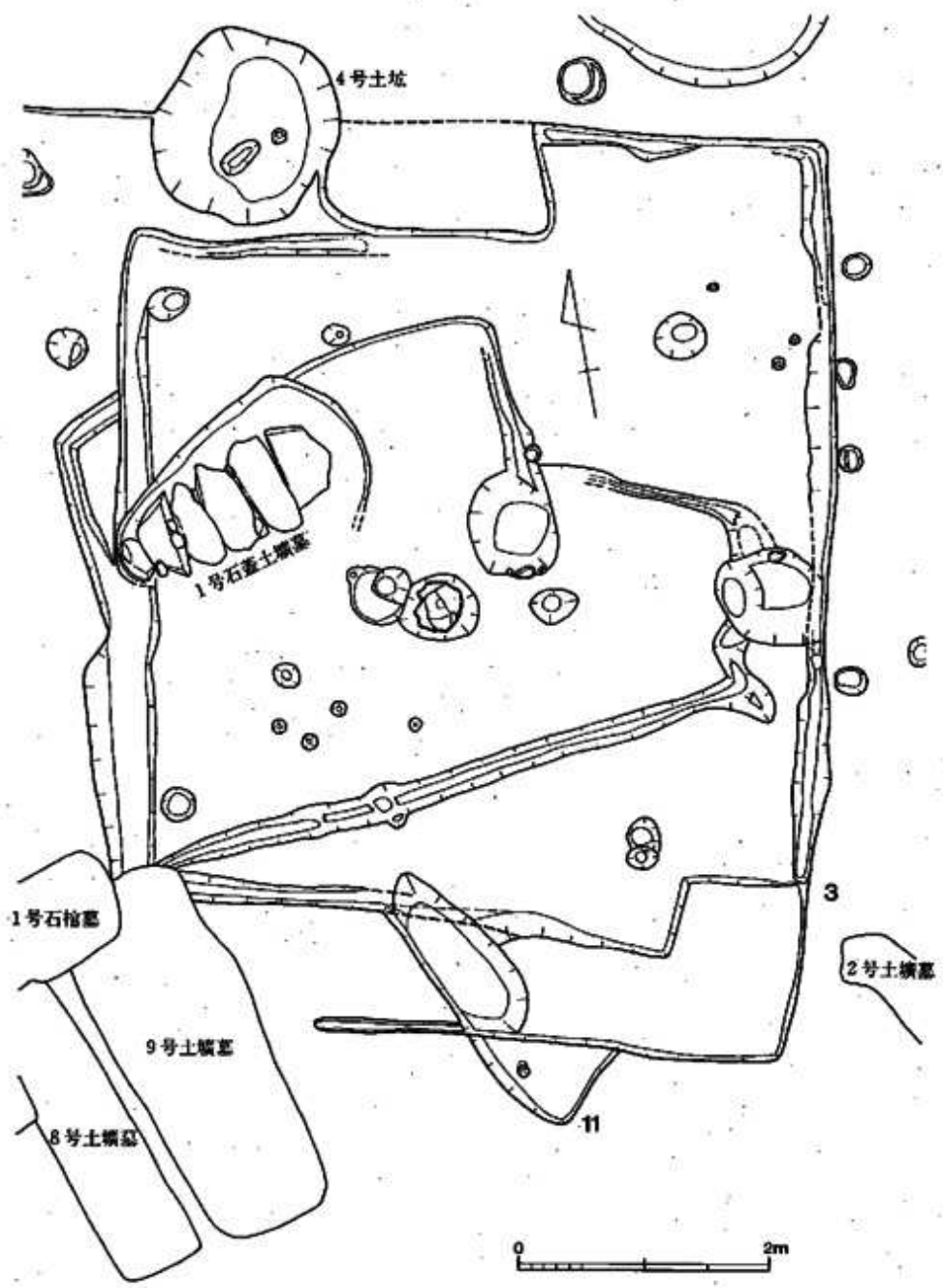
2号竪穴住居跡は、調査区（本線部分）北東隅から工事用取り付け道路部分を東側へ進んだ所に位置する。さらに東側には1号竪穴住居跡がある。南側部分は調査区域外へのび、北側は1号溝状遺構に切られる、そのため、西壁から南壁の隅角の「L」字部分と東壁の一部を残すのみである。

従って、この住居跡の大きさについては、正確な数値を把握し得ないが、一辺4m程の略方形プランになると推定される。

主柱穴は4本柱となることが推定されるが、現存するのは、P35とP41のみである。主柱穴は、住居跡平面プランに合わせた正方形配置になると予想でき、これにより、主柱穴



第 10 図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 11 図　3号・11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

間の長さは、ほぼ2.3m程になる。

壁体は後世の開墾等による削平が著しく、ほとんど残っていない。

壁体下には、幅24cm、深さ8cm程の小溝が確認できた。

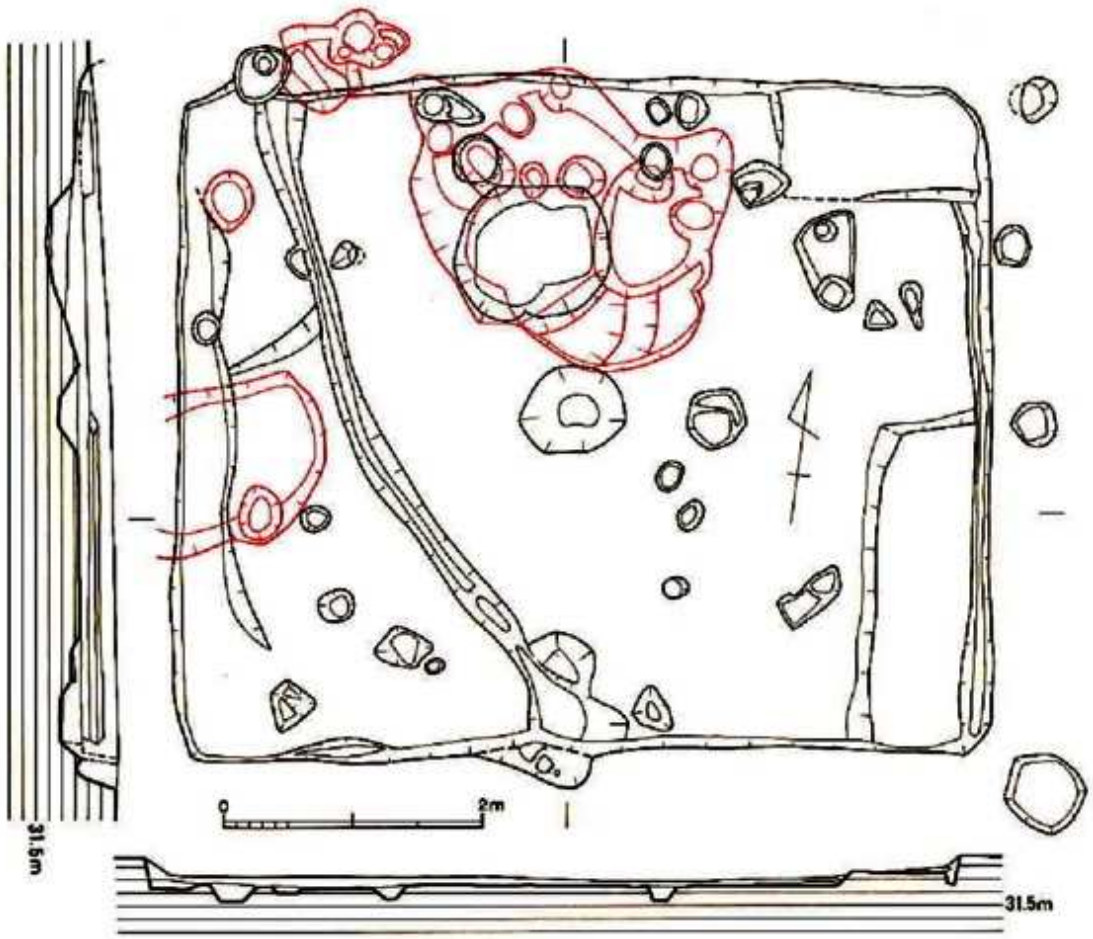
現存している部分においてのカマドの検出はなかった。

床面積は、16.7㎡程度になる。土器等の出土はない。

3号竪穴住居跡（図版6～7、第11図）

3号竪穴住居跡は、調査区中央よりやや南西側、3号溝状遺構と4号溝状遺構の間にある。

この竪穴住居跡は、4号土坑、1号石蓋土壙墓、1号石棺墓、9号土壙墓に切られ、11号竪穴住居跡を切って作られる。他の住居跡と同様に、上部の削平が著しく、僅か壁体を残すのみ



第12図　4号竪穴住居跡実測図（1/60）

である。

この竪穴住居跡の平面プランは、長方形になると推定されるが、北側、南側の両短辺では、4号土坑、1号石棺墓、9号土壙墓に切られている。その規模は、長辺7.3m、短辺5.6mと復元される。

ベッド状遺構は、南北短辺に付く。北側短辺では、4号土坑で削平されているものの西寄りに長さ3.3m、幅1m、残存高6cm程のものが、南側短辺では、東側長辺から「L」字形のベッド状遺構（幅1m、残存高4cm）が付いている。

屋内土坑は、東側長辺のほぼ中央にあり、そこから2本の小溝がのびている。1本は南西側、9号土壙墓の方向にのびる小溝（幅20cm、深さ5cm）で、他の1本は、住居跡ほぼ中央の炉址にのびる小溝（幅10cm、深さ2cm）である。

壁体下周溝は、ほぼ四辺を巡るようである。

炉址は、長卵形を呈し、住居址中央よりやや屋内土坑に寄っている。その大きさは長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.14mを測る。また、この炉址のすぐ南西側には、胴部に突帯を貼りつける壺形土器を埋置する土坑がある。土器は、横位に置かれるが、そのほとんどを残していない。土器を除去するとその下には、スミ層が10m程あり、その下層には焼土がたまる。この土坑の大きさは、長軸70cm、短軸54cm、深さ16cmを測る。

床面積は、35.2㎡である。土器等が出土している。

4号竪穴住居跡（図版8、第12図）

4号竪穴住居跡は、調査区中央より北西側、6号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡周溝との間に位置する。13号、23号土坑を切って作られる。

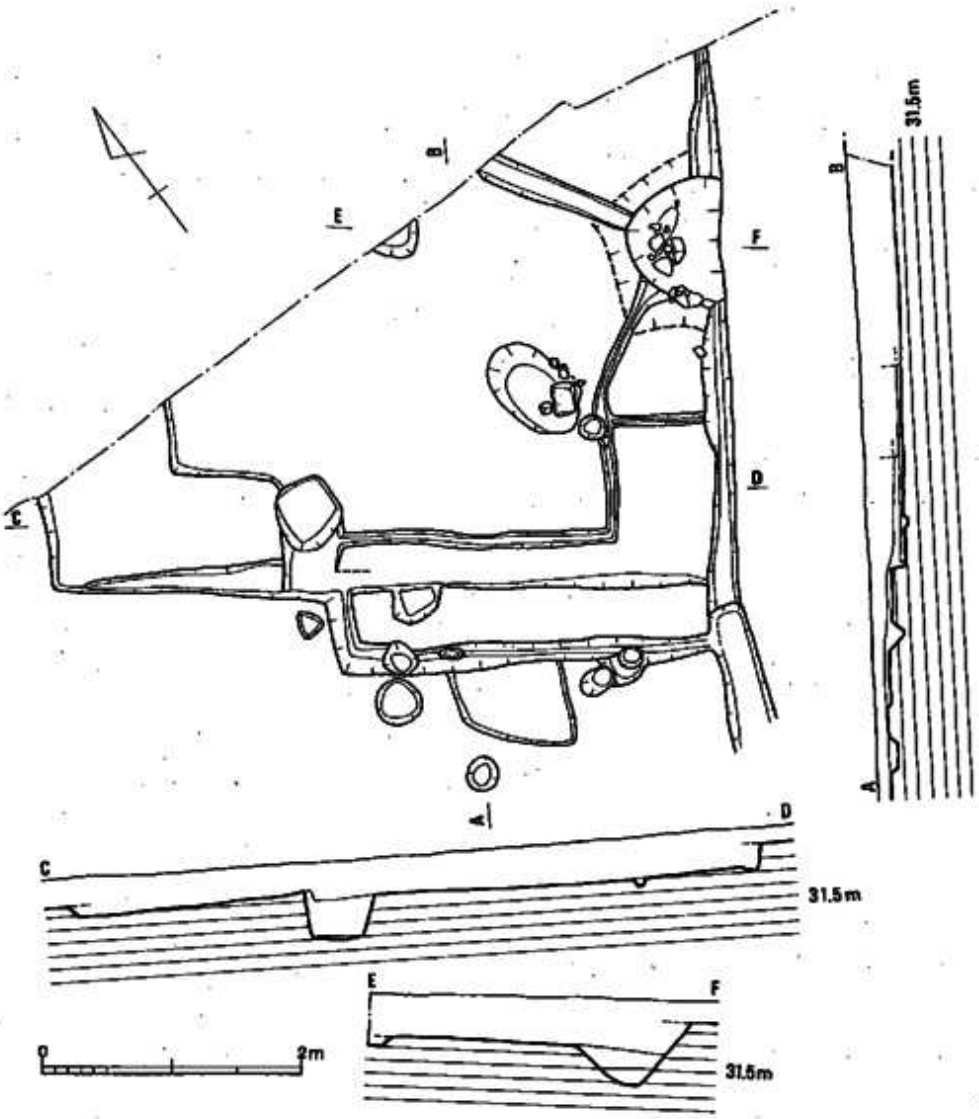
この竪穴住居跡の平面プランは長方形で、長辺6.1m、短辺5.1m、東側長辺にベッド状遺構を付設する。南側のベッド状遺構は、長さ2.5m、幅80cm、高さ5～8cm、また北側のベッド状遺構は長さ1.5m、幅1m、高さ10cm程を測る。南側ベッド状遺構隅角から住居跡壁体に沿って小溝（幅20cm、深さ5cm）が北側ベッド状遺構南端まで走る。

住居跡中央には、焼土を残す径70cm程の炉跡があり、その東西側に主柱穴を配置すると推定されるが、東側主柱穴（径40cm、深さ25cm）を検出するにとどまった。

屋内土坑は、南側長辺中央に付く。そこから北西側斜め上方にむけ、北側の調査区域外まで住居跡北西隅角を抜けて、小溝がのびている。残存長11.8m、幅20～30cm、深さ10～20cm程を測る。

床面積は、30.2㎡程である。

土器等が出土している。



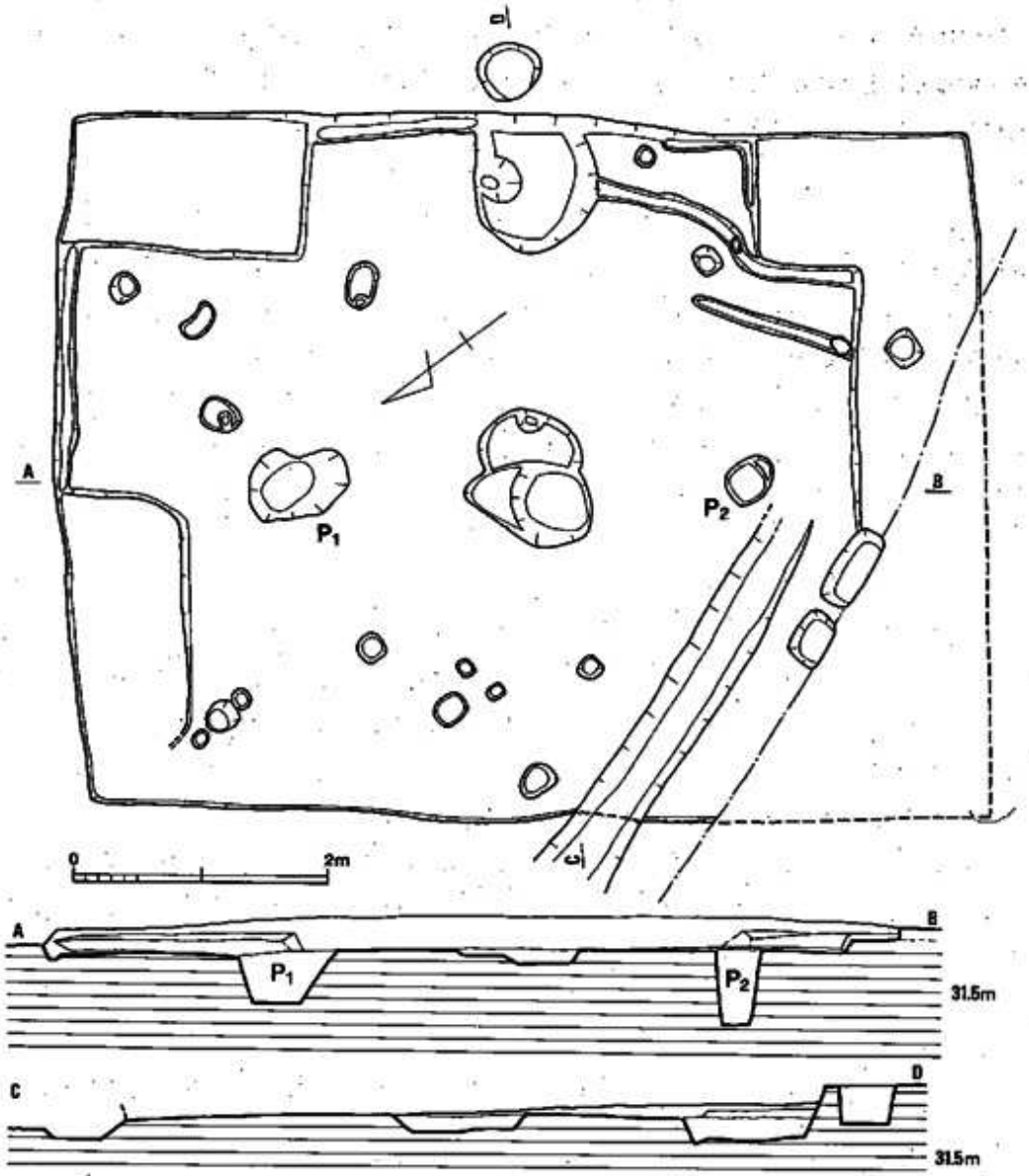
第 13 図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）

5号竪穴住居跡（図版9、第13図）

5号竪穴住居跡は、調査区北端側、4号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡の間に位置し、北東部は調査区域外にのびる。また、南側隅角は、南側からのびる小溝に切られ、南東側壁では、22号土坑を切って作られる。全体的に上部での削平が著しい。

この遺構の平面プランは、直線的な壁体やほぼ直角の隅角の状況から、四角形を呈すると思われる。残りの良い南西側壁体は、長さ5.26m、深さ10cm程である。南東側壁体から南西側壁体には「L」字形のベッド状遺構（しかし、これは小溝により、区画されているにすぎず、ベ

ッド状遺構としての高まりはみられない）があり、南西側壁体では途中で切れて、30cm程の間隔をおいて、さらに、北西側壁体にベッド状遺構（高さ5cm）が続く。この他南西側壁体では、北側隅角から長さ3.1m、幅90cm、高さ8cm程の高まりを持つ貼出し部があり、この貼出し部壁体下には小溝（幅20cm、深さ10cm）が巡る。この貼出し部両端側には遺構検出時、多量の粘土がみられた。



第14図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）

南東側壁体には、屋内土壙があり、そこから２本の小溝が、北側調査区域外（幅20cm、深さ15cm）と南西側ベッド状遺構を区画する小溝（幅15cm、深さ10cm）へ向け走る。南東側壁体下には、幅20cm、深さ10cm程の小溝がある。土器等が出土している。

６号竪穴住居跡（図版10、第14図）

６号竪穴住居跡は、調査区北東隅、遺構の一部は区域外にのびている。

竪穴住居の平面プランは、西側短壁と北側長壁の隅角部分は区域外にのびるが、隅丸長方形を呈すると推定される。また、北側長壁は16号溝状遺構により切られる。この遺構の大きさは、長壁７ｍ、短壁5.4ｍ程を測るが、壁体はほとんど削平されているため、10cm程を測るにすぎない。

この住居跡には、ベッド状遺構が付設されている。ベッド状遺構は、南側短壁には「L」字状のものが付き、その高さは10cm程を測る。また、北側短壁側には長さ2.4ｍ、幅0.94cm、高さ10cm程のベッド状遺構が、さらに東側長壁側にも長さ1.8ｍ、幅1.08ｍ、高さ10cm程のベッド状遺構がある。このベッド状遺構の間には幅10cm、深さ５cm程の小溝がある。

東側長壁中央付近に屋内土坑を掘り込む。長軸１ｍ、短軸１ｍ、深さ20cmを測る。そこから北側長壁に付設されるベッド状遺構に向かって小溝がのびる。住居跡床面中央には炉址がある。主柱穴は、Ｐ１、Ｐ２と推定される。

床面積は約38㎡である。土器等が出土している。

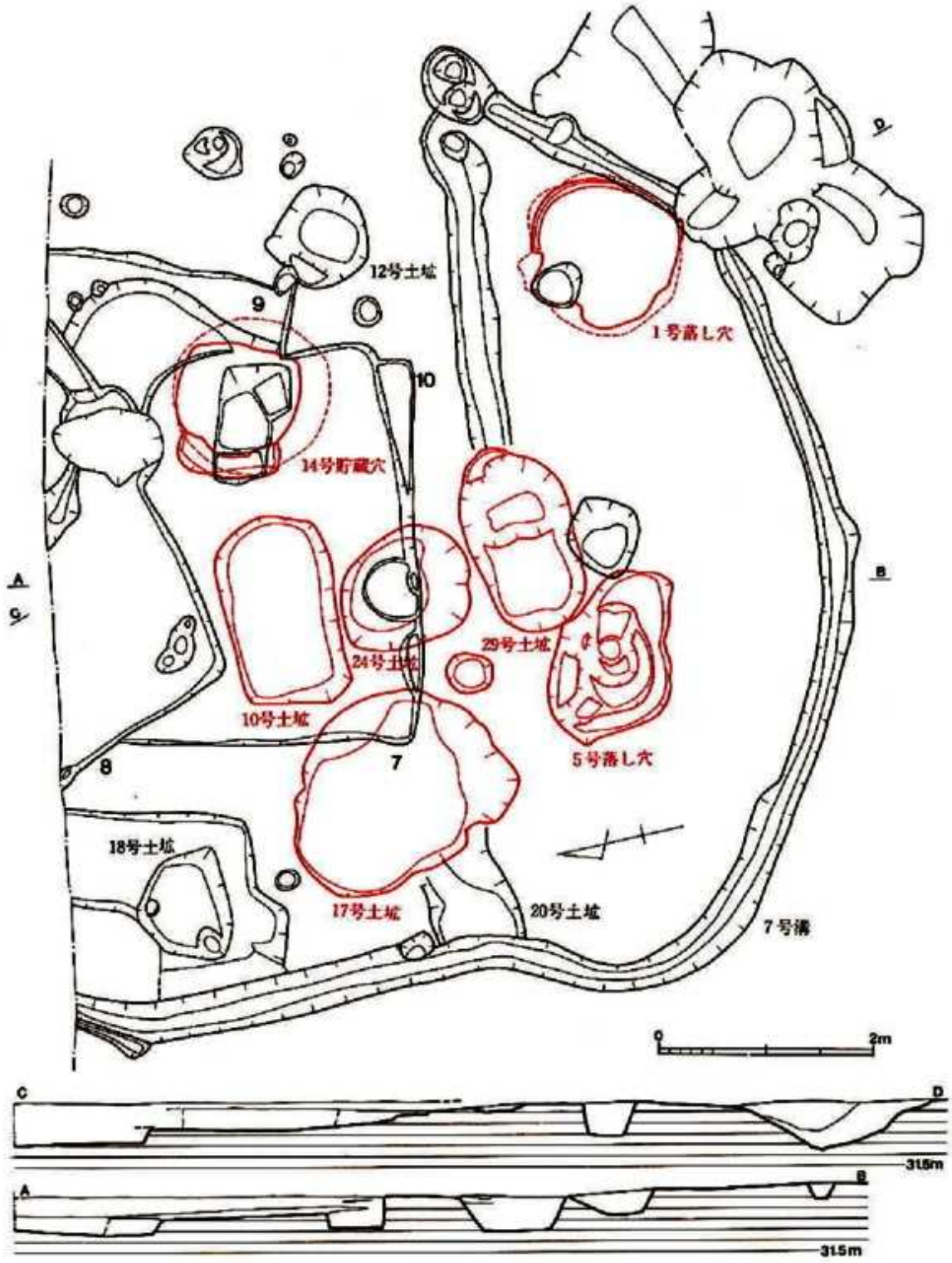
７号竪穴住居跡（図版11～12、第15図）

７号竪穴住居跡は、調査区中央北端側、４軒の竪穴住居跡が複雑に切り合う部分にある。９号、10号竪穴住居跡、10号、19号、24号土坑、14号貯蔵穴を切り、また８号竪穴住居跡に切られる。他の３軒の竪穴住居跡と比較して残りがよい。

この遺構の平面プランは、南側両隅角の形状から四角形になると推定される。一辺の長さは南側で3.7ｍを測る。住居跡中央には、８号竪穴住居跡や10号土壙との重複関係から十分に把握できなかったが、若干の焼土部分がみられ、炉址と思われる。また、これも14号貯蔵穴との重複関係で明確にし得なかったが、東側壁体には屋内土壙があると思われる。上述の４軒の竪穴住居跡では、上部の削平が著しく、この７号竪穴住居跡の壁体の高さは、10cm程しか残っていない。

この竪穴住居跡で注目されることは、住居跡外側の南側から西側にかけて周溝を残していることである。この周溝は、幅40cm、深さ30cm程を残していて、西側部分は、北側の調査区域外までのびている。雨落ち溝かと思われる。

土器等が出土していない。



第 15 図　7～10号竪穴住居跡実測図（1/60）

8号竪穴住居跡（図版11～12、第15図）

8号竪穴住居跡は、調査区中央北端側、4軒の竪穴住居跡が複雑に切り合う部分にある。この竪穴住居跡は、7号竪穴住居跡を切って作られる。北側の大半は、調査区域外にのびる。そのため、住居構造の詳細は不明である。

この遺構の平面プランは、隅角の形状より四角形になると推定される。南側壁体には屋内土坑が見られるが、後世の攪乱のため、その一部を残すのみである。その屋内土坑からは、住居跡中央部へむけて小溝が走る。壁体の高さは20cm程である。

土器等は出土していない。

9号竪穴住居跡（図版11～12、第15図）

9号竪穴住居跡は、調査区中央北端側、4軒の竪穴住居跡が複雑に切り合う部分にある。この竪穴住居跡は、7号竪穴住居跡に切られ、その隅角部分をわずかに残すのみで、住居構造の詳細は不明である。

この遺構の平面プランは、隅角の形状より四角形になると推定される。壁体の高さは、削平を受けて3cm程しか残っていない。土器等の出土はない。

10号竪穴住居跡（図版11～12、第15図）

10号竪穴住居跡は、調査区中央北端側、4軒の竪穴住居跡が複雑に切り合う部分にある。この竪穴住居跡は7号竪穴住居跡に切られ、14号貯蔵穴を切っていて、南東隅角と北側調査区域外にのびる壁体の一部を残すのみで、住居構造の詳細は不明である。

この遺構の平面プランは、隅角の形状より四角形になると推定される。壁体の高さは、削平を受けて10cm程しか残っていない。土器等の出土はない。

11号竪穴住居跡（図版6～7、第11図）

11号竪穴住居跡は、調査区中央より南西側、1号石蓋土壙墓、3号竪穴住居跡にその大半を切られ、北西側隅角と南東側隅角しか残していない。従って、その住居構造の詳細は不明である。

北西側隅角壁体下には、小溝（幅20cm、深さ5cm程）が巡る。壁体の高さは5cm程しか残っていない。土器等の出土はない。

2）貯蔵穴

調査区では、計19基の貯蔵穴を検出した。貯蔵穴は、同時期の2号、4号溝状遺構（V字溝）により囲続されると思われる。すべて平面プランは、円形である。

1号貯蔵穴（図版13、第16図）

1号貯蔵穴は、調査区北側、4号竪穴住居跡南側に位置する。

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から20cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。大きさは、上面で、長軸0.75m、短軸0.97m、深さ0.8mを測り、床面では径1.35mである。

土器等は出土していない。

2号貯蔵穴（図版13、第16図）

2号貯蔵穴は、調査区中央よりやや東に偏して位置する。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面から40～50cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。大きさは、上面で、長軸0.73m、短軸0.68m、深さ1.15mを測り、床面では径1.4～1.47mである。

土器等が出土している。

3号貯蔵穴（図版14、第16図）

3号貯蔵穴は、調査区中央よりやや北側、2号貯蔵穴の北西6mの所に位置する。

この遺構の床面は略円形を呈し、床面から40cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。大きさは、上面で、長軸0.94m、短軸0.87m、深さ0.98mを測り、床面では径1.5～1.55mである。

土器等が出土している。

4号貯蔵穴（図版15、第16図）

4号貯蔵穴は、調査区中央よりやや北側、5号貯蔵穴の北側約5mの所に位置する。

この遺構の床面は略円形を呈し、大きさは長軸0.83m、短軸0.65m、深さ0.14mを測る。

土器等は出土していない。

5号貯蔵穴（第16図）

5号貯蔵穴は、調査区中央よりやや東側、4号貯蔵穴の南側約3mの所に位置する。

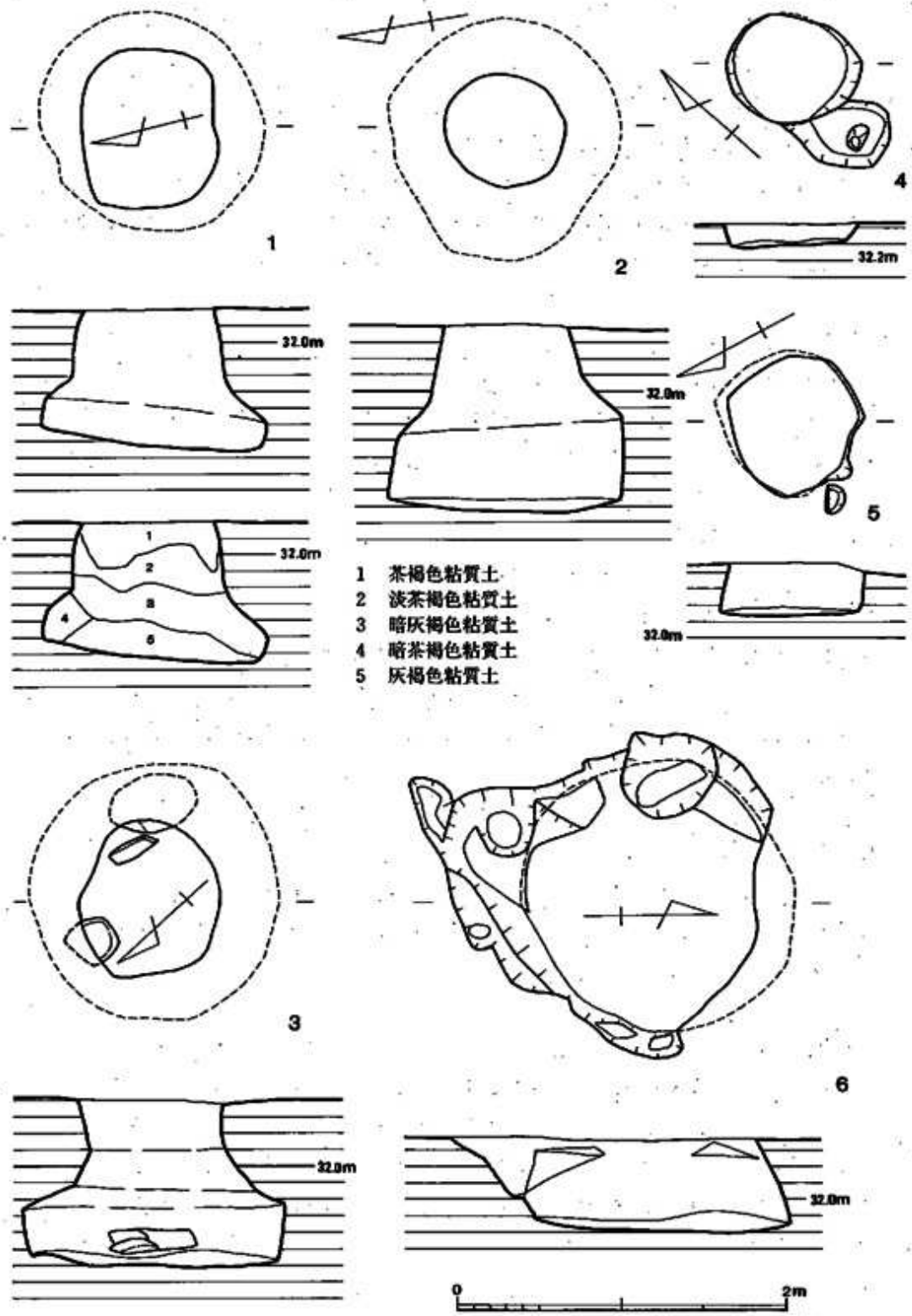
この遺構の床面は、楕円形を呈し、床面から壁面はやや内傾しながら立ち上がる。大きさは、上面で、長軸0.85m、短軸0.8m、深さ0.31mを測る。床面では、長軸0.9m、短軸0.87mを測る。

4号、5号貯蔵穴は、他の貯蔵穴に比べ、規模が小さく、共に壁面が袋状を成さない。

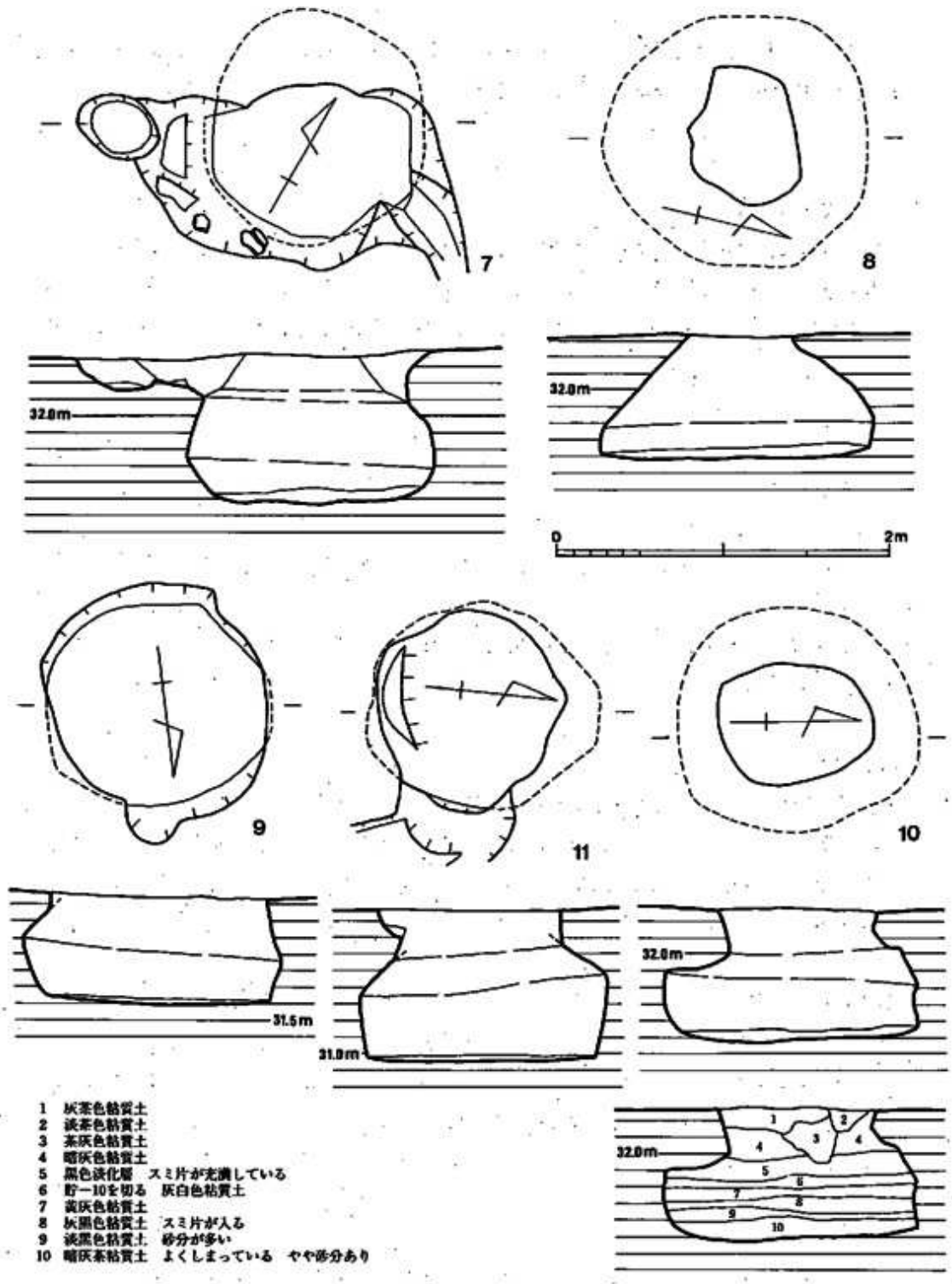
土器等が出土している。

6号貯蔵穴（図版15、第16図）

6号貯蔵穴は、調査区ほぼ中央、西側約2m離れて、7号貯蔵穴がある。



第 16 図　1～6 号貯蔵穴実測図 (1/40)



1 灰茶色粘質土
2 淡茶色粘質土
3 茶灰色粘質土
4 暗灰色粘質土
5 黒色淡化層　スミ片が充満している
6 貯−10を切る　灰白色粘質土
7 黄灰色粘質土
8 灰黒色粘質土　スミ片が入る
9 淡黒色粘質土　砂分が多い
10 暗灰茶粘質土　よくしまっている　やや砂分あり

第 17 図　7～11号貯蔵穴実測図 (1/40)

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から斜め上方に強い内傾度で立ち上がる。大きさは、上面で、長軸1.9m、短軸1.38m、深さ0.54mを測る。床面では、長軸1.7m、短軸1.65mを測る。

土器等が出土している。

7号貯蔵穴（第17図）

7号貯蔵穴は、調査区中央よりやや西側、西側約3m離れて、8号貯蔵穴が位置する。

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から26cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。大きさは上面で、東西からの削平で形状を乱すが、径0.95m、深さ0.9mを測り、床面で長軸1.4m、短軸1.25mを測る。

土器等が出土している。

8号貯蔵穴（第17図）

8号貯蔵穴は、調査区中央より西側、河岸段丘西端近くに位置する。

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から20cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。壁面最大幅からの立ち上がりはとても急である。大きさは、上面で長軸0.82m、短軸0.62m、深さ0.73mを測り、床面では長軸1.6m、短軸1.55mを測る。

土器等が出土している。

9号貯蔵穴（第17図）

9号貯蔵穴は、調査区中央よりやや北側、6号溝状遺構に切られる。

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から35cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。大きさは、上面で、長軸1.55m、短軸1.32m、深さ0.7mを測り、床面で長軸1.3m、短軸1.2mを測る。

土器等が出土している。

10号貯蔵穴（図版17、第17図）

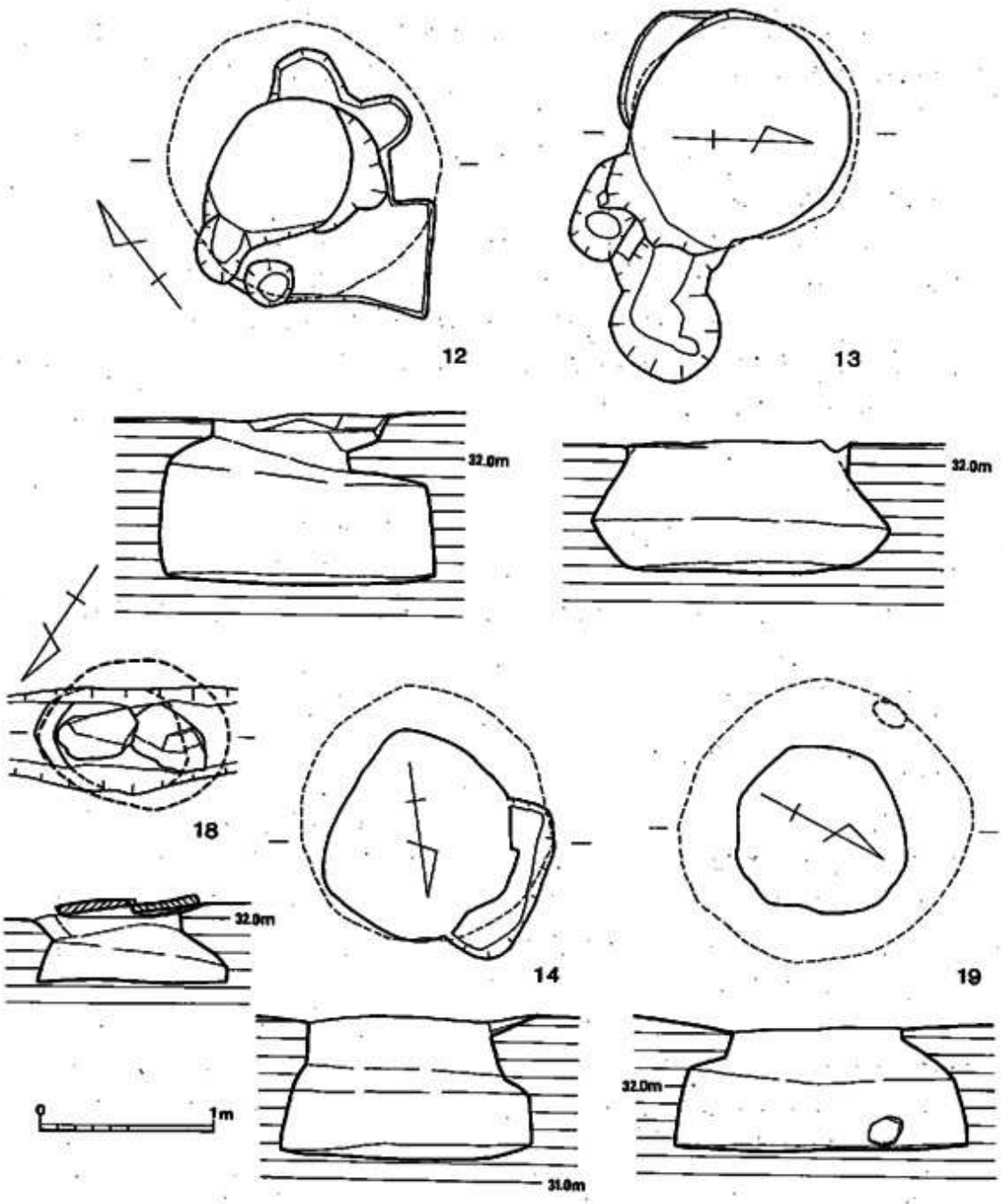
10号貯蔵穴は、調査区中央よりやや北西側、東側2m離れて1号おとし穴状遺構がある。

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から40cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。大きさは、上面で長軸0.92m、短軸0.7m、深さ0.8m、床面で長軸1.42m、短軸1.35mを測る。

土器等が出土している。

11号貯蔵穴（第17図）

11号貯蔵穴は、調査区中央よりやや南西側、3号溝状遺構、「コ」の字に囲む11号と13号溝状遺構の内側にある。西側に隣接して、11号土壙墓が位置する。



第 18 図　12−14、18〜19号貯蔵穴実測図 (1/40)

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から45cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。大きさは、上面で、長軸1.15m、短軸1.1m、深さ0.9m、床面で長軸1.4m、短軸1.25mを測る。

土器等が出土している。

12号貯蔵穴（図版17、第18図）

12号貯蔵穴は、調査区南西側、3号溝状遺構の南側、約2m離れて位置する。

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から50～70cm程緩やかに内傾してから、急激にすぼまり、続いてほぼ直立して上面口部へ達する。大きさは、上面で長軸0.95m、短軸0.8m、深さ0.97m、床面で長軸1.6m、短軸1.55mを測る。

土器等が出土している。

13号貯蔵穴（第18図）

13号貯蔵穴は、調査区北側、西側約3m離れて7号土壙墓が位置する。

この遺構の床面は、略円形を呈し、床面から30cm程の所で最もふくらむ袋状の壁面をしている。大きさは、上面で長軸1.38m、短軸1.25m、深さ0.75mを測り、床面で長軸1.27m、短軸1.25mを測る。

土器等は出土していない。

14号貯蔵穴（第18図）

14号貯蔵穴は、調査区北端、7号竪穴住居跡内にあり、この遺構により切られる。

この遺構の床面は、略円形を呈し、上方に向け若干内傾させながら立ち上がる。その後、口をすぼめるようにして立ち上がり、上面口部へ達する。大きさは、上面で長軸1.22m、短軸1.02m、深さ0.83m、床面で長軸1.48m、短軸1.44mを測る。

土器等が出土している。

18号貯蔵穴（第18図）

18号貯蔵穴は、調査区中央よりやや西側、11号溝状遺構にすっぽりはまるように切られる。

この遺構の床面は、略円形で、断面形が若干内傾させながら立ち上がり、口部をすぼめてさらに立ち上がるものである。上面口部には長辺40～45cm、短辺20cm程の片岩2個を置いている。これはあたかも、11号溝状遺構掘削時に検出された、18号貯蔵穴の口部を、石でマンホールのフタとし、ふさいだかのようになる。

大きさは、床面で長軸0.73m、短軸0.6m、深さ0.36m、11号溝状遺構の溝底面にある口部で、長軸1.08m、短軸0.8mを測る。

土器等が出土している。

19号貯蔵穴（第18図）

19号貯蔵穴は、調査区中央よりやや南側、３号溝状遺構の北側に位置する。

この遺構の床面は、略円形を呈し、上方に向け若干内傾しながら立ち上がり、その後口をすぼめ、さらに上方に立ち上がる。大きさは、上面で長軸0.95m、短軸0.92m、深さ0.7mを測る。床面では長軸1.67m、短軸1.64mを測る。

土器等が出土している。

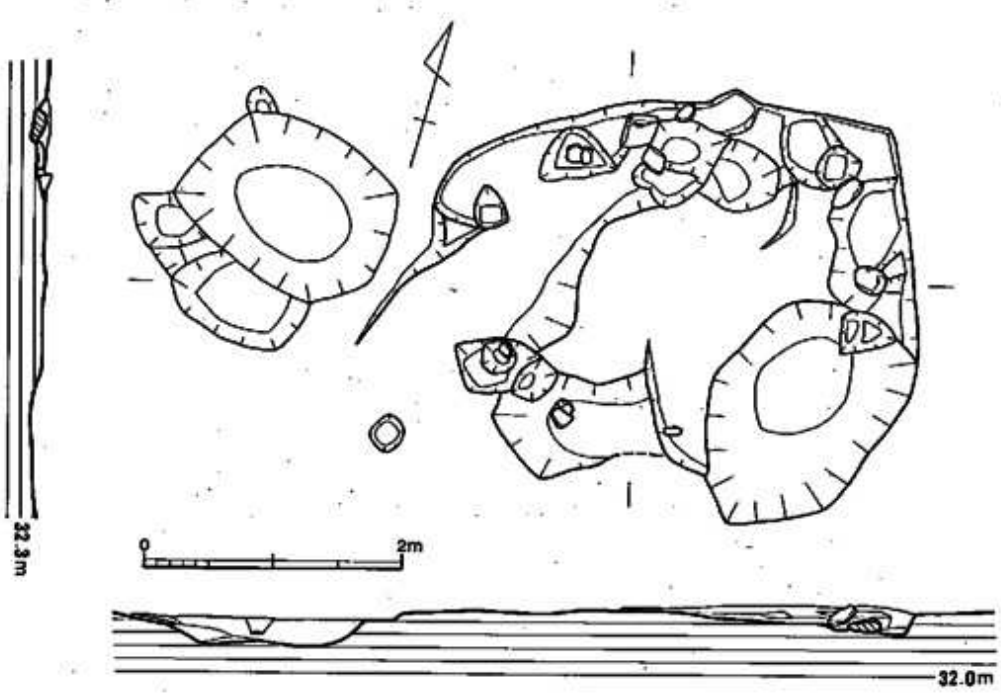
３）古墳

調査区内からは、１基の古墳を検出した。

第１章第２節「遺跡の位置と環境」で述べたように、神手遺跡に隣接して、現在の深江工作所内に、工場築造前には吹ケ上古墳群（１～４号墳）が所在していた。従って、この神手１号墳も、鍛川右岸の河岸段丘上に立地する吹ケ上古墳群に包括される古墳と推定される。

１号墳（図版18、第19図）

１号墳は、調査区中央より北東側、南側に３号、東側に８号溝状遺構があり、共に１号墳の



第 19 図　１号墳実測図（1/60）

周溝を切って作られる。

1号墳は、墳丘は完全に削平され、さらに石室の石材もすべて抜き取られ、若干の根石と掘方を留めるにすぎない。また、周溝も削平を受け、南側と東側にその一部を残しているのみである。

石室の掘り方は、削平が著しく、正確に把握し得ないが、現状では長軸3.8m、短軸2.6~3.2m、深さは奥壁部分で20cm程である。東側に開口する単室横穴式石室と考えられ、本来の石室の床面は、長さ2.2m、幅1.5m、また玄室入口幅は0.8m程と推測される。

周溝は、残りの良い東側では幅50~60cm、深さ30cm程を測る。

周溝から土器等が出土している。

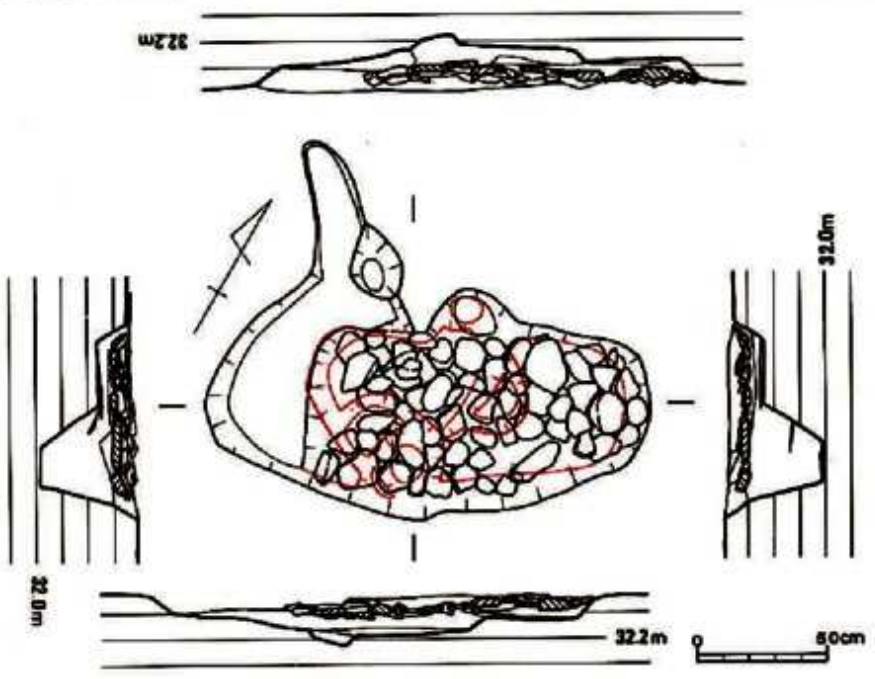
4）集石墓

調査区内から、1基の集石墓を検出した。

1号集石墓（図版19、第20図）

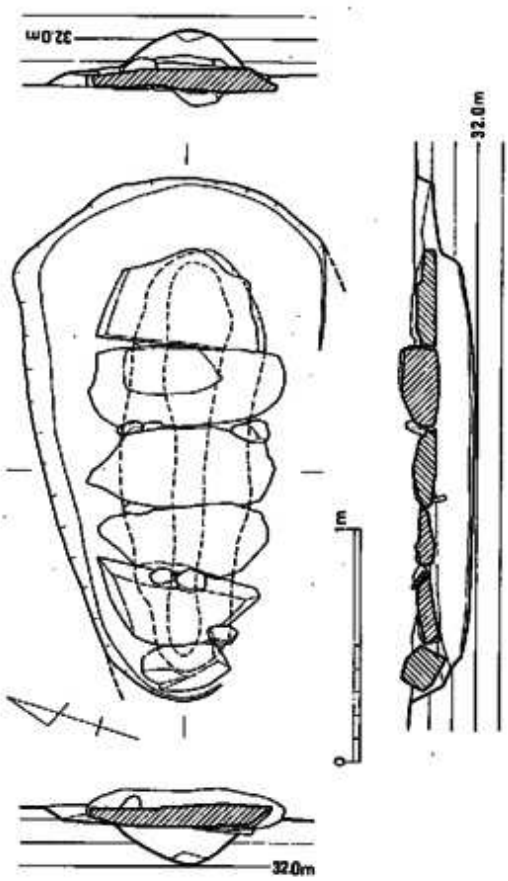
1号集石墓は、調査区中央よりやや南東側、3号溝状遺構と3号竪穴住居跡の間にある。隣接して北側に8号土坑がある。

この遺構は、当初、横穴式石室の一部と考えたが石室の掘り方の痕跡もみられず用途は不明である。平坦面を持つ厚さ3~5cm程の河原石を長軸1.3m、短軸0.6mの範囲に敷き詰める。



第20図　椎田B、P、1号集石墓実測図（1/30）（赤線は床石除去後）

床面は短軸上で若干舟底状に反りかえる。床石を除去し、下層の観察を行うと、全体に二段掘りになるが、平坦面をもつ。しかし、南側には、径30cm、深さ30cm程の円形ピットがある。土器等の検出は全くなかった。



第 21 図　1号石蓋土壙墓実測図（1/30）

5）石棺墓

調査区域内からは、1基の石棺墓を検出した。

1号石棺墓（図版21、第22図）

1号石棺墓は、調査区南西側、8～9号土壙墓を切って作られる。

棺材は盗掘などで全て抜き取られていたが、抜跡から石棺墓であったと推定される。

棺内には、石蓋の片岩系石材が西半部にある。しかし、東半部には、粘土を3～4cm程敷きつめた床面があるのに比べ、西半部は一段下がり、土坑を掘った状態を呈していることから、盗掘時に、棺材を投棄したものと思われる。

粘土を貼った床面は、ほぼ平坦面（標高32.15m）を保つ。石棺墓は、掘り方の長さ2.1m、幅0.8m、棺内の長さ1.75m、幅0.45m、深さ0.12mを測る。鉄器等が出土している。しかし、整理途中、担当者の不注意から紛失してしまった。

6）石蓋土壙墓

調査区内からは、1基の石蓋土壙墓を検出した。

1号石蓋土壙墓（図版22、第21図）

1号石蓋土壙墓は、調査区南側、3号竪穴住居跡を切って作られる。

この遺構の墓壙は、3号竪穴住居跡検出時の掘削の際、その先後関係を考慮し得なかったために、明瞭にその平面プランを把握できていない。従って、南側及び西側では、その墓壙プランが明瞭でない。

墓壙の大きさは、現存長201cm、現存幅120cm、現存高21cmを測り、隅丸三角形プランを呈す

るが、墓壙と棺の主軸は一致せず、元来、墓壙の対角線上に棺が入っていたと推定される。

蓋石は、6枚の板石を架構している。蓋石の並べ方は、頭位部の東側から足位部の西側へ、大石から小石へと配列している。蓋石はすべて横位に架構される。また、蓋石間や蓋石周囲には10～15cm程の不整形礫が目張りとして置かれる。

6枚の蓋石には、表裏面共にベンガラの塗布がない。

蓋石の石材は、②、③、④、⑥が片岩で、他は玄武岩を使用する。また、目張り用礫はすべて玄武岩である。

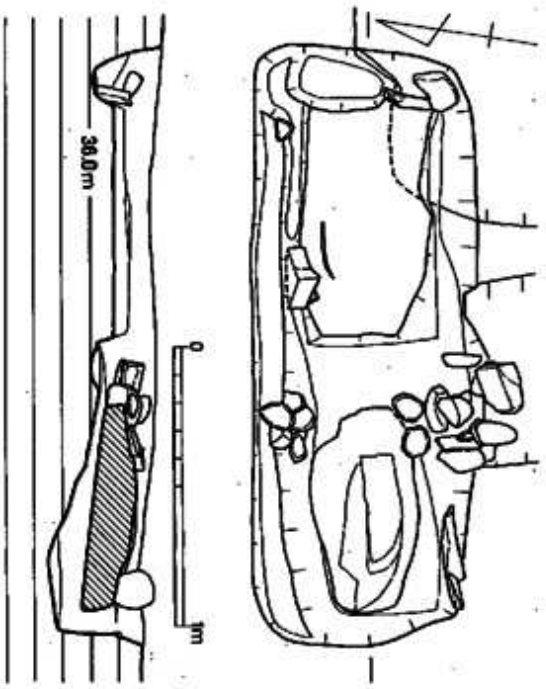
棺内は側壁の崩落などで、ほとんど埋没していた。

棺の大きさは、上場の長さ1.79m、幅0.32～0.54m、深さ0.2m、下場（棺内床面）では、長さ1.67m、頭位側幅0.27m、中央部幅0.28m、足位側幅0.13mを測る。床面はほぼ水平である（棺内床面標高32.02m）。

棺材及び床面には、ベンガラの塗布がみられない。

棺内の壁面の立ち上がりは、頭位・足位小口部及び側壁部共に緩やかである。

土器等の出土は全くなかった。



第22図　1号石棺墓跡実測図（1/30）

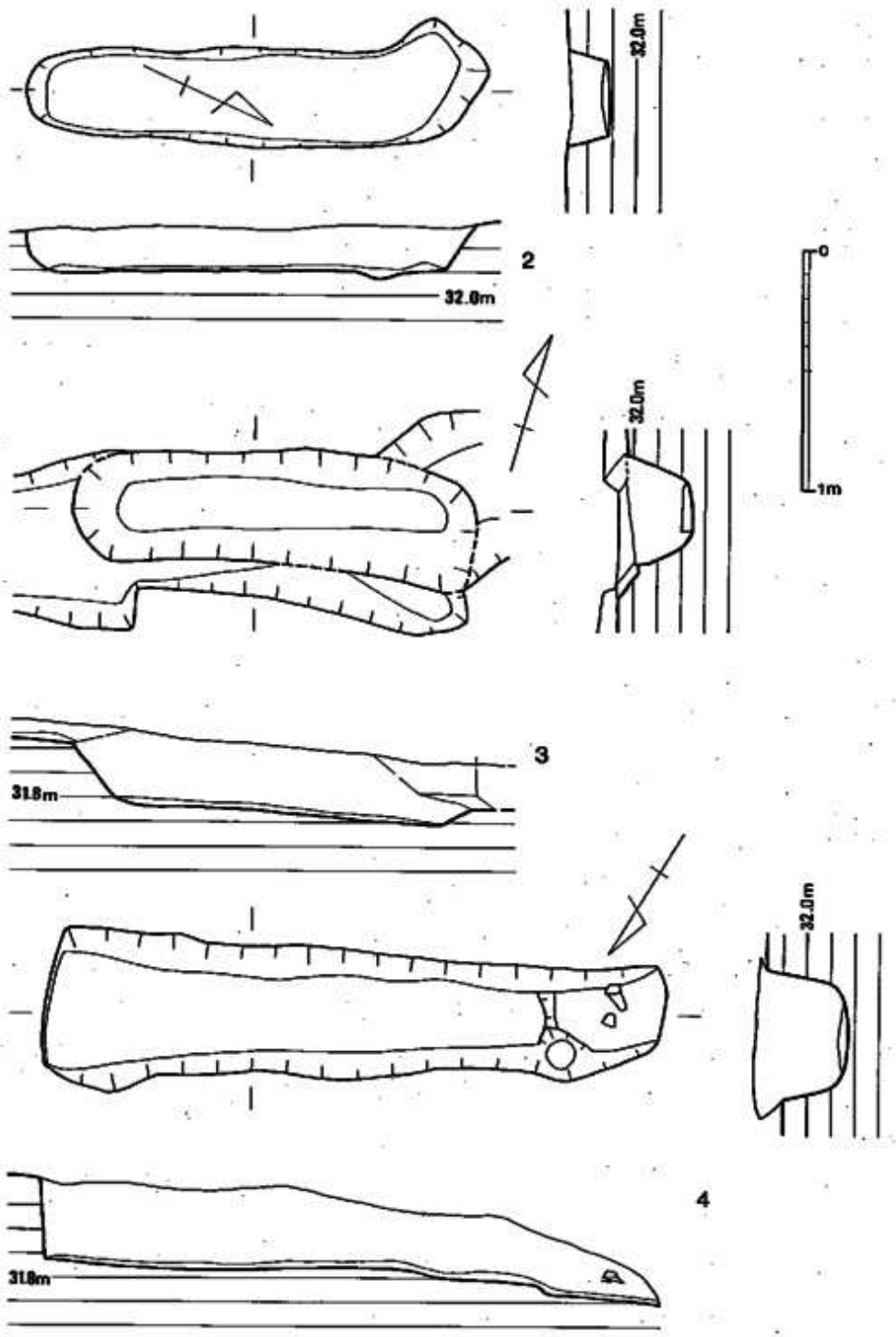
7）土壙墓

調査区内からは、計10基の土壙墓を検出した。1号土壙墓は、28号土坑に変更した。

2号土壙墓（図版23、第23図）

2号土壙墓は調査区南側、4号溝状遺構と3号竪穴住居跡の間にあり、西側には9号土坑がある。

2号土壙墓は、主軸方位をN—24°—Wにとり、長軸1.92m、短軸0.41m、深さ0.19mを測



第 23 図　2～4 号土壙墓実測図 (1/30)

る。平面形プランは、長楕円形を呈する。

北側の短軸（0.5m）は、南側の短軸（0.36m）に比べ若干幅広くなる。

頭位方向については不明である。

土器等の出土遺物はなかった。

3号土壙墓（図版23、第23図）

3号土壙墓は、調査区南偶、3号竪穴住居跡の南側に位置し、4号溝状遺構を切って作られる。

3号土壙墓は、主軸方位をN—73°—Eにとり、長軸1.69m、短軸0.48m、深さ0.3mを測る。

平面形プランは、長楕円形を呈する。

底面は、西側（標高31.8m）から東側（標高31.7m）に向け、やや傾斜する。

頭位方向については不明である。

土器等の出土はなかった。

4号土壙墓（図版24、第23図）

4号土壙墓は、調査区南側、3号竪穴住居跡西南側に位置する。4号溝状遺構、8号土壙墓を切って作られる。

4号土壙墓は、主軸方位をN—58°—Eにとり、長軸2.6m、短軸0.54m、深さ0.34mを測る。平面形プランは長楕円形を呈する。西側の短軸（0.66m）は、東側の短軸（0.4m）に比べ幅狭くなる。西側部分は、底面、壁体共、削平が著しい。

頭位方向は不明である。

土器等の出土はなかった。

5号土壙墓（図版24、第24図）

5号土壙墓は、調査区北側、8号溝状遺構を切って作られる。

5号土壙墓は、主軸方位をN—4°—Wにとり、長軸1.58m、短軸0.62m、深さ0.47mを測る。平面形プランは、長楕円形を呈する。北側の壁体に比べ、南側の壁体の立ち上がりは緩やかである。

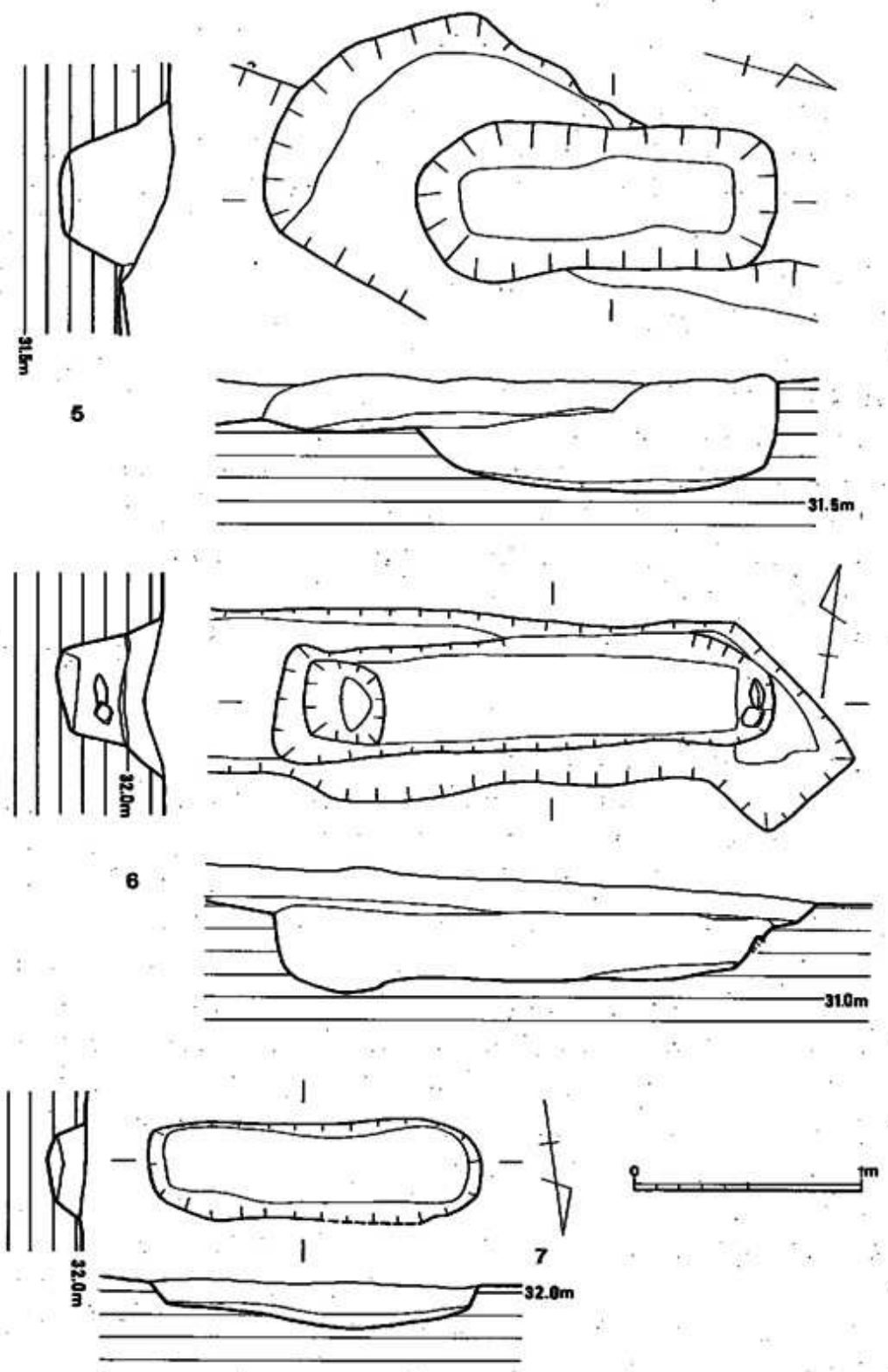
頭位方向については不明である。

土器等の出土はなかった。

6号土壙墓（図版25、第24図）

6号土壙墓は、調査区南側、4号溝状遺構を切って作られる。西側には、3号土壙墓、南側には16号土坑がある。

6号土壙墓は、主軸方位をN—83°—Eにとり、長軸2.18m、短軸0.5m、深さ0.3mを測る。



第 24 図　5～7号土壙墓実測図 (1/30)

平面形プランは、長楕円形を呈する。

底面の高さは、東側（標高31.26m）から西側（標高31.02m）へ若干傾斜している。また、底面西端側では、径30cm、深さ5cm程の凹みがみられる。その他、西側の壁体に比べ東側の壁体が、その立ち上がりが緩やかである。

頭位方向は不明である。

土器等の出土はなかった。

7号土壙墓（図版25、第24図）

7号土壙墓は、調査区北側、4号竪穴住居跡の南側に位置する。

7号土壙墓は、主軸方位をN—82°—Wにとり、長軸1.46m、短軸0.43m、深さ0.19mを測る。平面形プランは、長楕円形を呈する。

底面は、平坦にはならず、両側（標高31.9m）から中央側（標高31.7m）へ、若干傾斜する。また、壁体の立ち上がりは、底面より斜め上方へ緩やかになる。

頭位方向は不明である。

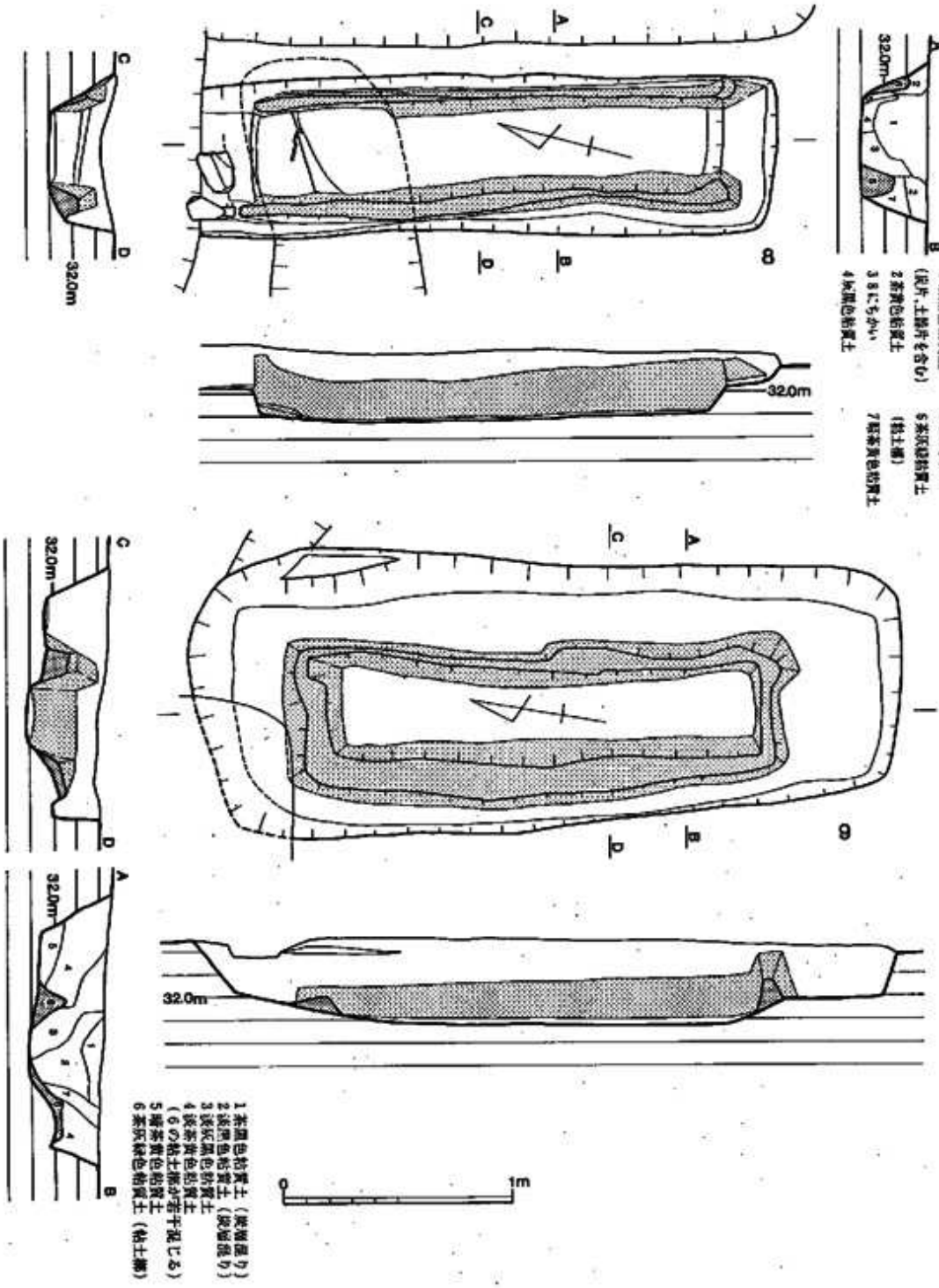
土器等の出土はなかった。

8号土壙墓（図版26～29・32、第25～26図）

8号土壙墓は、調査区中央より南西側、3号溝状遺構の南側、3号竪穴住居跡の西側に位置し、隣接して東側に9号土壙墓があり、北側は1号石棺墓に切られ、西側では4号土壙墓を切っている。

遺構検出当初、土層断面図からも判るように、上面に、粘土帯の痕跡が見られなかった。しかし、掘り方（この埋土は、茶黄色粘質土である）内側に、長さ2.1m、幅0.48mの隅丸長方形のプラン（この埋土は茶黒色粘質土である）が確認されたため、その部分から掘り下げていった。その結果、掘り方の大きさは、長さ2.5m、中央幅0.67m、深さ0.31mを測り、そして、内側のプランは、茶灰緑色粘質土で周りを固め、内部に木棺を埋置する墓制であることがわかった。粘土帯内の大きさは、上面で長さ2.1m、幅0.47m、床面で長さ1.94m、幅0.29～0.32mを測る。

床面まで掘り下げて、確認されたことは、①粘土床面までまわらず、両側にのみ見られること、②北側小口では粘土帯が長軸両側の粘土帯の内側にあること、③粘土帯は、長軸両側を比べると、西側（下端幅0.14m）より東側が狭小であること、④北側小口（幅0.36m）が南側小口（幅0.3m）より広いこと、⑤幅広い北側小口には、一段高い部分（高さ5cm程の粘土塊）があること、⑥床面は平坦（標高30.9m）南側小口床面から北側へ0.5m程の範囲に赤色顔料があること、⑦北側小口の粘土塊の下から1点の鉄製品が見つかったこと、⑧内側のプランからは粘土ブロック等の落ち込みがなかったことなどである。



第 25 図　神手道跡　8号～9号　土壙墓実測図 (1/30)

以上のことから推測されることは、①粘土帯内には、長さ1.95m、幅0.3m、高さ0.3m以上の木棺（これについては、土層断面図から粘土帯や床面が丸味を帯びていることから、割竹形木棺と推測することも可能であろう）が置かれ、その外側を粘土帯で固めていたこと、②床面での頭位は、北側小口にあり、粘土塊による枕が置かれていたことである。

主軸方向はN—15°—Wとなる。

土器等の出土はなかった。鉄製品は整理途中、担当者の不注意から紛失している。

9号土壙墓（図版26～27・30～32、第25～26図）

9号土壙墓は、調査区中央より南西側、先述した8号土壙墓が西側に隣接し、3号竪穴住居跡を切り、1号石棺墓に切られる。

遺構検出当初、土層図からも判るように、上面で、粘土帯の痕跡が見られなかった。しかし、掘り方（この埋土は淡茶黄色粘質土である）内側に、隅丸長方形のプラン（この埋土は茶黒色粘質土である）が確認されたため、その部分から掘り下げていった。その結果、掘り方の大きさは、長さ3.05m、北側幅1.16m、南側幅0.96m、深さ0.37mを測り、そして、内側のプランは、茶灰緑色粘質土で周りを固め、内部に木棺を埋置する墓制であることがわかった。粘土帯内の大きさは、北側で一部乱れているものの、上面で、長さ1.95m、北側幅0.55m、中央幅0.55m、南側幅0.48m、床面で長さ1.77m、0.23～0.34mを測る。

床面まで掘り下げて、確認されたことは、①粘土帯は床面までまわらず、両側及び南側小口（北側小口は、1号石棺墓に切られ明瞭でない）に見られること、②粘土帯は、長軸両側で比べると、西側（下端幅0.37m）より東側が狭小であること、③床面はほぼ平坦（標高31.88m）で、北側小口（幅0.35m）が南側小口（幅0.28m）より広いこと、④内側のプランからは、粘土ブロック等の落ち込みがなかったこと、⑤南側小口に寄り鉄製品が出土したことなどである。

以上のことから推測されることは、①粘土帯には、長さ1.8m、幅0.4m、高さ0.4m程の木棺（これについては、8号土壙墓と同様に、割竹形木棺の可能性もある）を置き、その外側を粘土帯で固めていたこと、②鉄製品の出土位置が、8号土壙墓とほぼ同様であることから、頭位は、8号土壙墓と逆の南側にあったことである。

主軸方向は、N—10°—Wとなる。

土器等の出土はなかった。

第26図　8・9号土壙墓作業風景

10号土壙墓（第27図）

10号土壙墓は、調査区中央よりやや南側、3号溝状遺構の南側に位置する。

10号土壙墓は、主軸方位をN—36°—Wにとり、長軸1.87m、短軸0.54m、深さ0.26mを測る。平面形プランは、略長楕円形を呈する。

底面は、東側小口付近で若干の凹みをもつが、ほぼ平坦になる。

頭位方向は不明である。

土器等の出土はない。

11号土壙墓（第27図）

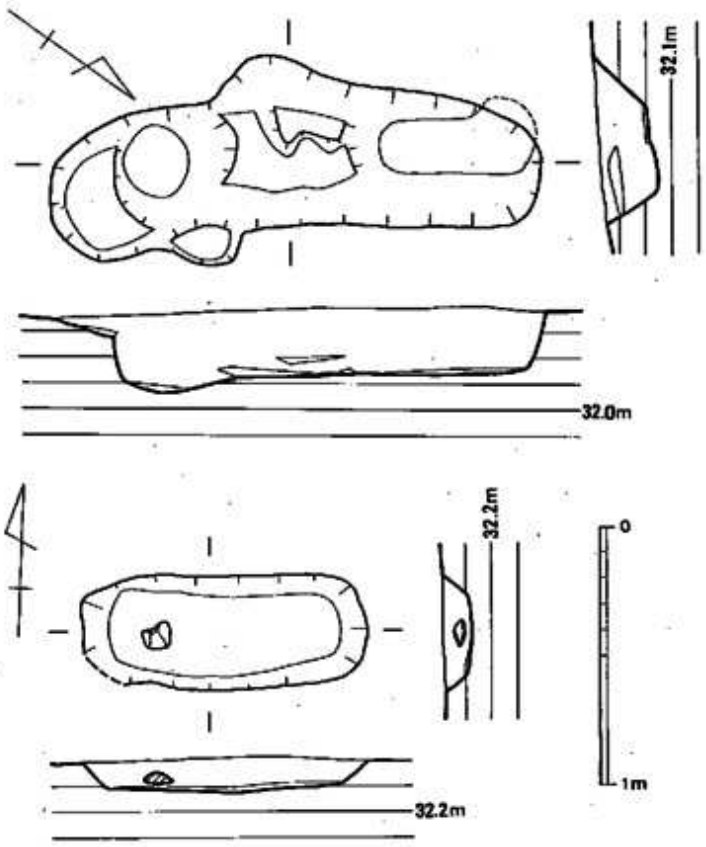
11号土壙墓は、調査区中央よりやや南側、3号溝状遺構、11号貯蔵穴の北側に位置する。また、11号土壙墓は、11、13、8号溝状遺構で取り囲まれる「コ」の字型の区画の内にある。

11号土壙墓は、主軸方位をN—88°—Eにとり、長軸1.08m、短軸0.48m、深さ0.12mを測る。平面形プランは、隅丸長方形を呈する。他の土壙墓に比べ、長さが短い。

底面はほぼ平坦である。

頭位方向は不明である。

土器等の出土はなかった。



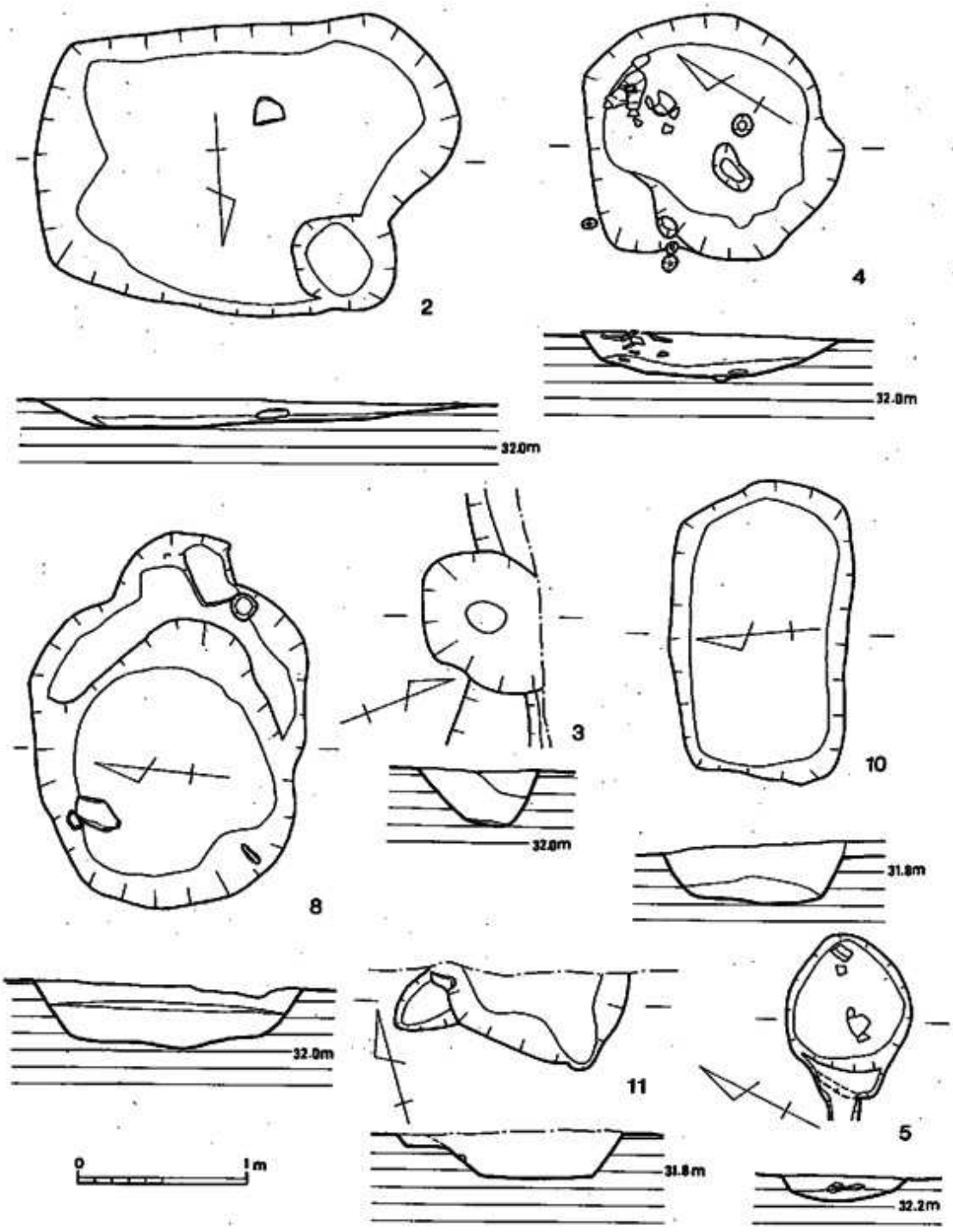
第 27 図　10~11号土壙墓実測図（1/30）

8）土坑

調査区内では、計26基の土坑を検出した。

2号土坑（図版33、第28図）

2号土坑は、調査区中央よりやや北側、13号貯蔵穴の南側4m離れて位置する。



第 28 図　2～5、8、10～11号土壙実測図 (1/40)

この遺構の平面プランは、不整方形を呈し、長軸2.5m、短軸1.7m、深さ0.2m程を測る。土器等の出土があった。

3号土坑（図版34、第28図）

3号土坑は、調査区北東端から東へ突き出す取り付け用道路部分の調査区内に位置する。東側に3m離れて、2号竪穴住居跡がある。1号溝状遺構に切られる。

この遺構は一部調査区域外にのびているが、その平面形プランは略円形を呈する。大きさは長軸0.8m、深さ0.3m程を測る。

土器等の出土があった。

4号土坑（図版34、第28図）

4号土坑は、調査区南側、3号溝状遺構の南3.6m離れ、また3号竪穴住居跡を切って作られる。土坑内北側で、底面から浮いた状態の出土土器があった。

この遺構の平面形プランは、不整円形を呈し、長軸1.6m、短軸1.5m、深さ0.28m程を測る。底面には、径10cm程のピットと、長軸30cm、短軸18cm程のピット2個がある。

土器等の出土はなかった。

5号土坑（図版33、第28図）

5号土坑は、調査区中央より南側、4号竪穴住居跡と3号溝状遺構の間にある。南東側約1.4m離れて4号土坑がある。

この遺構の平面プランは、長卵形を呈し、その大きさは、長軸1m、短軸0.74m、深さ0.16mを測る。

底面から浮いた状態で土器を検出した。

8号土坑（第28図）

8号土坑は、調査区中央より南側、3号溝状遺構と4号竪穴住居跡の間にあり、4・5号土坑とは東へ約3m離れる。南側に近接して1号集石墓がある。

この遺構の平面プランは、楕円形を呈し、その大きさは長軸2.2m、短軸1.6m、深さ0.4m程を測る。埋土中から土器が出土した。

10号土坑（第28図）

10号土坑は、調査区中央北端側、7号竪穴住居跡内にあり、それを切って作られる。

この遺構の平面プランは、隅丸長方形を呈し、その大きさは、長軸1.8m、短軸1.08m、深

さ0.34m程を測る。

土器等の出土はなかった。

11号土坑（第28図）

11号土坑は、調査区北端、8号竪穴住居跡の東約3.5mのところにある。遺構の一部は調査区域外にのびていて、その平面プランは明確にし得ない。

この遺構の大きさは、長軸1.04m、深さ0.28m程を測る。

土器等の出土はなかった。

12号土坑（図版35、第29図）

12号土坑は、調査区北端側、7号竪穴住居跡東側に近接してある。

この遺構の平面プランは、略円形を呈し、その大きさは、長軸0.96m、短軸0.92m、深さ0.6m程を測る。

土器等の出土はなかった。

13号土坑（第29図）

13号土坑は、調査区中央より南西側、4号竪穴住居跡に切られる。ほぼ4号竪穴住居跡の屋内土坑の対面に位置する。また、東側にあるピットにも切られる。

この遺構の平面プランは不整長方形を呈し、東側では、階段状の2段のテラスをもって底面に達する。長軸2.5m、短軸1.9m、深さ0.6m程を測る。底面には4個のピットがあるが、中央部のものが、最も深く、径0.3m、深さ0.32mを測る。おとし穴状遺構となる可能性もある。

土器等の出土があった。

14号土坑（第29図）

14号土坑は、調査区南西側、6号竪穴住居跡に近接してある。遺構の一部は、調査区域外にのびている。

この遺構の大きさは、長軸1.96m、深さ0.4m程を測る。

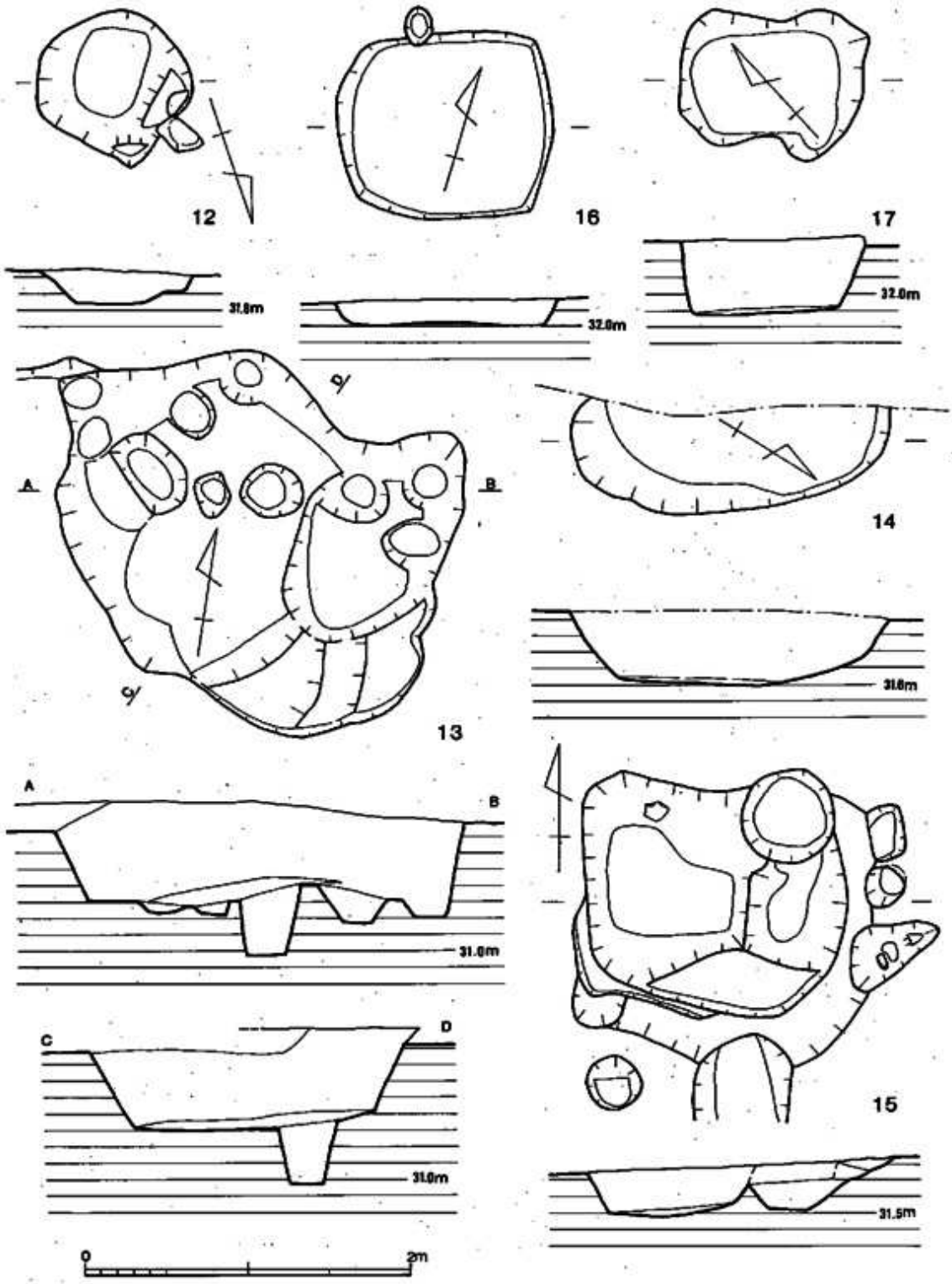
土器等の出土はなかった。

15号土坑（第29図）

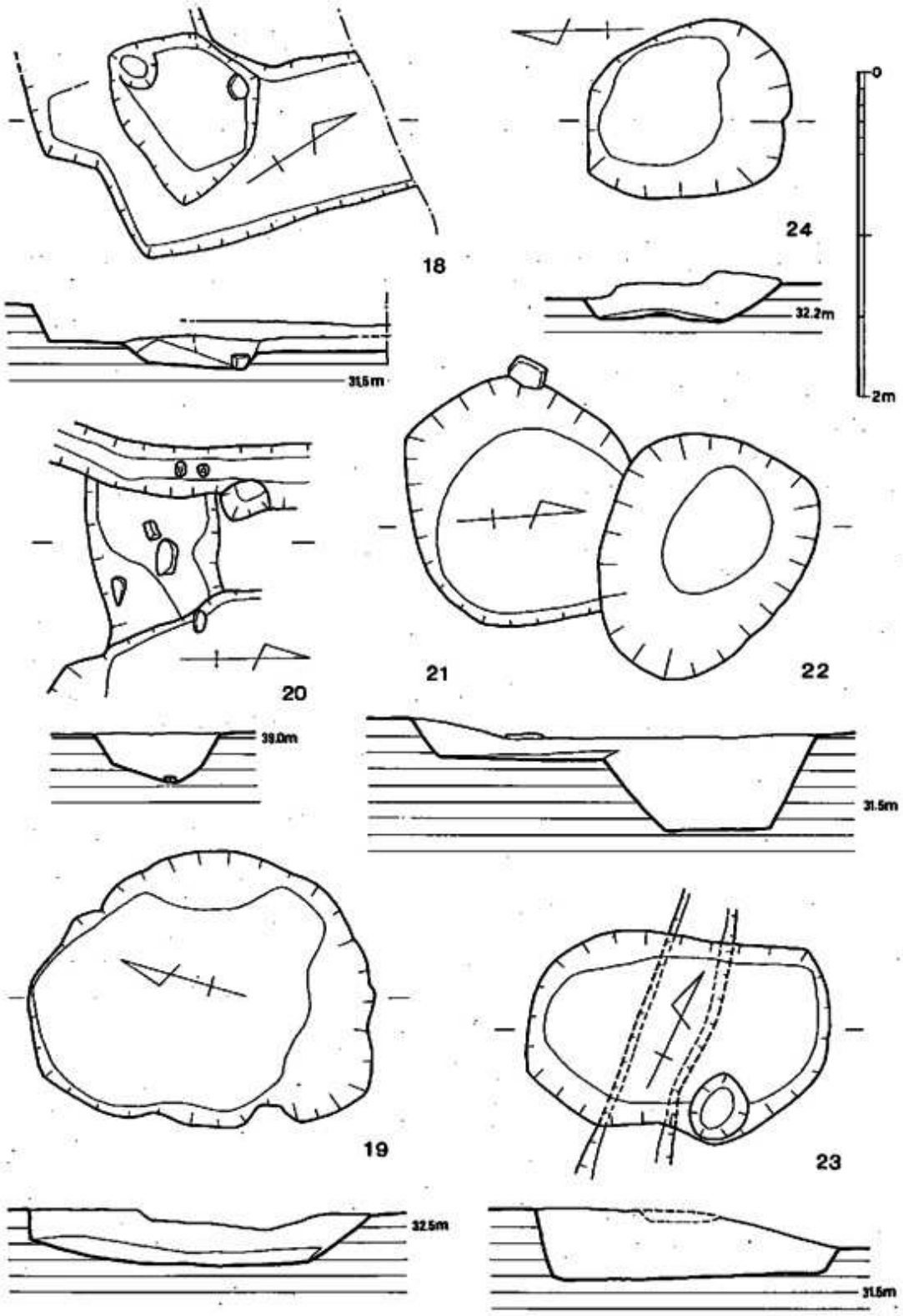
15号土坑は、調査区北端側、5号竪穴住居跡の西側20cm程に近接して位置する。

この遺構の平面プランは、隅丸方形を呈し、その大きさは一辺1.3m、深さ0.3m程を測る。

土器等の出土があった。



第 29 図　12−17号土壙実測図 (1/40)



第 30 図　神手遺跡18～24号土壙実測図（1/40）

16号土坑（図版36、第29図）

16号土坑は、調査区南端、4号溝状遺構と14号溝状遺構の間に位置する。

この遺構の平面プランは、隅丸方形を呈し、その大きさは一辺1.34m、深さ0.16mを測る。

土器等の出土があった。

17号土坑（第29図）

17号土坑は、調査区中央よりやや北西側、東側に約2m離れて26号土坑がある。

この遺構の平面プランは、隅丸方形状を呈し、その大きさは長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.44mを測る。

土器等の出土はなかった。

18号土坑（第30図）

18号土坑は、調査区北端、8号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡周溝の間に位置する。この遺構は北側のピットにより切られる。

この遺構の平面プランは、不整方形を呈し、長軸1m、短軸0.8m、深さ0.2m程を測る。

土器等の出土はなかった。

19号土坑（第30図）

19号土坑は、調査区北端側、7号竪穴住居跡南西隅角を切って作られる。

この遺構の平面プランは、不整楕円形を呈し、その大きさは長軸2.1m、短軸1.7m、深さ0.3m程を測る。

土器等の出土があった。

20号土坑（第30図）

20号土坑は、調査区北端側、19号土坑と7号竪穴住居跡周溝に切られる。

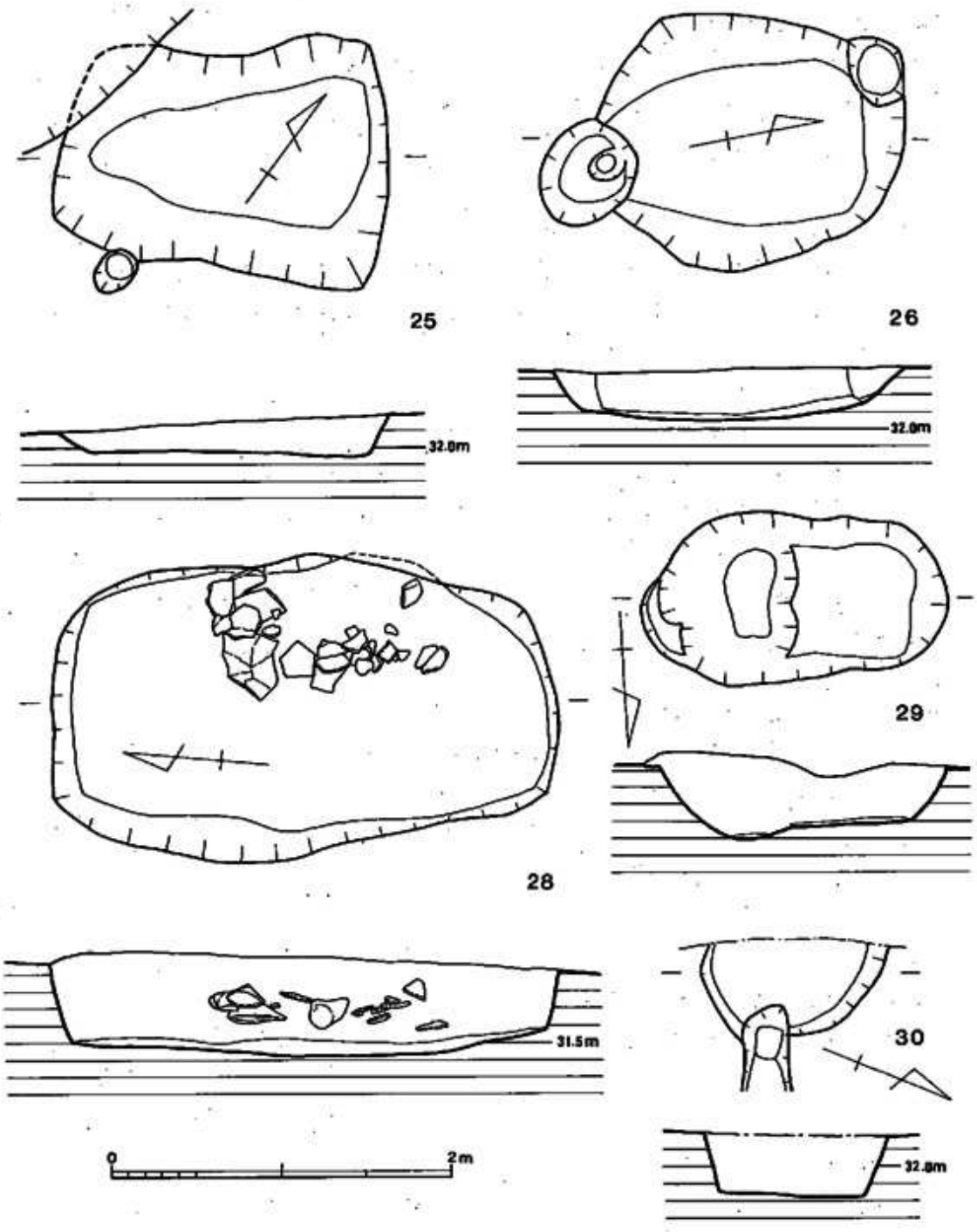
この遺構の大きさは、長軸側が両端で切られるため不明だが幅0.7m、深さ0.28mを測る。

土器等の出土はなかった。

21号土坑（図版37、第30図）

21号土坑は、調査区北端側、5号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡の間に位置する。この遺構は22号土坑により切られる。

この遺構の平面プランは、北側を22号土坑に切られるものの、略円形を呈し、径1.5m、深さ0.2m程を測る。土器等の出土はなかった。



第 31 図 25～26、28～30号土壙実測図（1/40）

22号土坑（図版37、第30図）

22号土坑は、調査区北端側、5号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡の間に位置し、21号土坑を切って作られる。

この遺構の平面プランは、楕円形を呈し、その大きさは、長軸1.5m、短軸1.24m、深さ0.6m程を測る。

土器等の出土があった。

23号土坑（図版37、第30図）

23号土坑は、調査区北端側、4号竪穴住居跡両側壁体により切られる。

この遺構の平面プランは、楕円形状を呈し、南側にはピットがある。その大きさは、長軸1.84m、短軸1.2m、深さ0.42m程を測る。

土器等の出土はなかった。

24号土坑（図版37、第30図）

24号土坑は、調査区中央北端側、7号竪穴住居跡南側壁体を切って作られる。

この遺構の平面プランは、略円形を呈し、その大きさは、長軸1.2m、短軸1.08m、深さ0.28mを測る。

土器等の出土があった。

25号土坑（図版37、第31図）

25号土坑は、調査区中央よりやや北東側、6号溝状遺構に切られる。

この遺構の平面プランは、略隅丸長方形で、その大きさは長軸1.92m、短軸1.48m、深さ0.12～0.26mを測る。

土器等の出土はなかった。

26号土坑（図版35、第31図）

26号土坑は、調査区中央よりやや西側、南側約3m離れて6号貯蔵穴がある。

この遺構の平面プランは、略楕円形を呈し、南北両端では、各1個のピットに切られる。その大きさは、長軸1.8m、短軸1.5m、深さ0.25m程を測る。

土器等の出土はなかった。

28号土坑（図版36、第31図）

28号土坑は、調査区中央より西側、区域外近くに位置し、南側約1mに離れて3号溝状遺構

がある。

この遺構の平面プランは、隅丸長方形を呈し、長軸2.96m、短軸1.76m、深さ0.6m程を測る。埋土中に土器の出土があった。

29号土坑（第31図）

29号土坑は、調査区北端側、7号竪穴住居跡とその南側の周溝の内にある。24号、27号土坑を切って作られる。

この遺構の平面プランは、長楕円形を呈し、長軸1.8m、短軸1m、底面は西側にテラスを設ける二段掘りになる。深さは0.5mを測る。

土器等の出土があった。

30号土坑（第31図）

30号土坑は、調査区西端にあり、遺構は区域外にのびている。

この遺構の大きさは、長軸1.06m、深さ0.4mを測る。

土器等の出土があった。

9）おとし穴状遺構

調査区内では、計5基のおとし穴状遺構を検出した。これらは調査当時、貯蔵穴、土坑と認識していたが、報告書整理の段階で、その遺構の様相から、近年、豊前地域においてもその検出例が多くなっているおとし穴状遺構ととらえ直した。

1号おとし穴状遺構（第32図）

この遺構は、調査区北側、7号竪穴住居跡周溝に切られる。

この遺構は、調査当時、貯蔵穴として認識されていた。

この遺構の大きさは、主軸方位をN—11°—Wにとり、長軸1.45m、短軸1.45m、深さ0.35mを測る。底面は平坦で、そこには2個のピットがあり、中央付近のものは、径25cm、深さ16cm、壁体寄りのものは、径25cm、深さ10cmを測る。

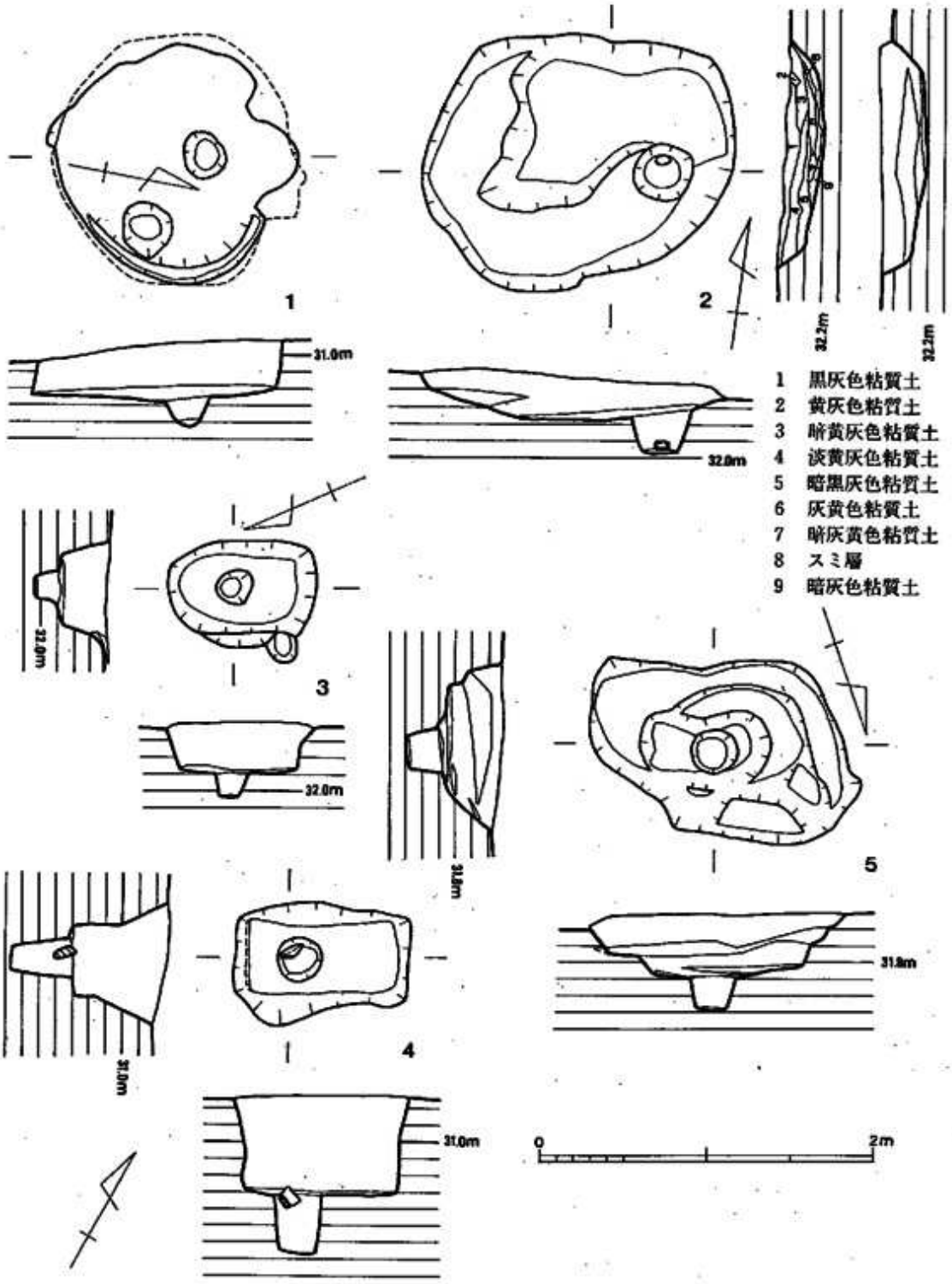
平面形プランは略円形を呈する。

土器等の出土があった。

2号おとし穴状遺構（第32図）

2号おとし穴状遺構は、調査区中央よりやや北側に位置する。

この遺構は、調査当時、土坑として認識されていた。



第 32 図　神手遺跡 1 ～ 5 号落し穴状遺構実測図 (1/40)

この遺構の大きさは、主軸方位をN—83°—Eにとり、長軸1.84m、短軸1.52m、深さ0.26mを測る。底面には、東端に径35cm、深さ25cmのピットがあり、内部に拳大状の小石がみられた。

他のものに比べ、後世の削平を考慮しても、若干深さが浅すぎる傾向にある。

平面形プランは、不整円形である。

土器等の出土があった。

3号おとし穴状遺構（第32図）

3号おとし穴状遺構は、調査区中央付近、6号・7号貯蔵穴の間に位置する。

この遺構は、調査当時、土坑として認識されていた。

この遺構の大きさは、主軸方位をN—23°—Eにとり、上面では長軸0.9m、短軸0.5m、深さ0.3mを測り、また底面では、長軸0.7m、短軸0.4mを測る。底面は平坦で、そのほぼ中央に径20cm、深さ15cmのピットがある。

平面形プランは、隅丸長方形を呈する。

土器等の出土はなかった。

4号おとし穴状遺構（図版38、第32図）

4号おとし穴状遺構は、調査区南側、3号竪穴住居跡と4号溝状遺構の間に位置する。東側には、2号土壙墓が隣接する。

この遺構は、調査当時、土坑と認識されていた。

この遺構の大きさは、主軸方向をN—65°—Eにとり、上面では長軸1.05m、短軸0.65m、深さ0.59m、底面では長軸0.9m、短軸0.4mを測る。底面は平坦で、中央よりやや西側に偏して、径27cm、深さ35cmのピットがある。このピットには、長軸10cm、短軸5cm程の小石が根石として置かれていた。

平面形プランは、隅丸長方形を呈する。

土器等の出土はなかった。

5号おとし穴状遺構（図版38、第32図）

5号おとし穴状遺構は、調査区北側、7号竪穴住居跡とその周溝の間に位置する。周囲には、15号貯蔵穴があり、5号おとし穴状遺構を切っている。

この遺構は、調査当時、土坑として認識されていた。

この遺構の大きさは、主軸方向をN—71°—Wにとり、上面の長軸1.5m、短軸1m、深さ0.36mを測り、掘り方が二段掘り状をなす。下段の底面では、長軸0.57m、短軸0.25m、中央のピットは径26cm、深さ20cmを測る。

平面形プランは、不整長方形を呈する。

土器等の出土はなかった。

10）溝状遺構

調査区内からは、計16条の溝状遺構を検出した。溝状遺構は、３号、６号、８号溝状遺構以外は、全て規模が小さく、長くのびるものもない。これは、後世の開墾等による著しい削平のためとも考えられるが、その他に、祓川右岸の河岸段丘上に立地する地勢から、排水を目的とした簡易なものという事に起因するかもしれない。５、７号溝状遺構は説明を省く。

１号溝状遺構（付図２）

１号溝状遺構は、調査区本線部分北東隅から、取り付け道路部分へ入った１号円形住居跡、２号竪穴住居跡を切って作られる。また、３号土坑には切られる。

この遺構は、調査区域外南東側（31.325ｍ）から調査区域外北西側（30.458ｍ）に向け走り、残存長20ｍ、幅0.4～1.3ｍ、深さ0.1～0.3ｍ程を測る。

土器等の出土はなかった。

２号溝状遺構（図版39、第33図、付図２）

２号溝状遺構は、調査区（本線部分）北東隅から東側へ取り付け道路部分に入った所に位置する。

この溝状遺構は、調査区域外北側（31.217ｍ）から調査区域南側（31.184ｍ）に向け走り、残存長3.4ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.5ｍ程を測る。

この溝状遺構の断面形は鋭角な「Ｖ」字となる。この形状を示す遺構には、調査区（本線部分）南側を調査区域外の東側（31.502ｍ）から調査区外（祓川方向）西側（29.815ｍ）へ向け弧形に走る、断面「Ｖ」字形の４号溝状遺構があり、おそらく両者は東側の農地に続いて連絡し、祓川右岸の河岸段丘上に弧形に巡る「Ｖ」字形溝状遺構になり、その内側には、同時期の貯蔵穴群を内含すると推定される。

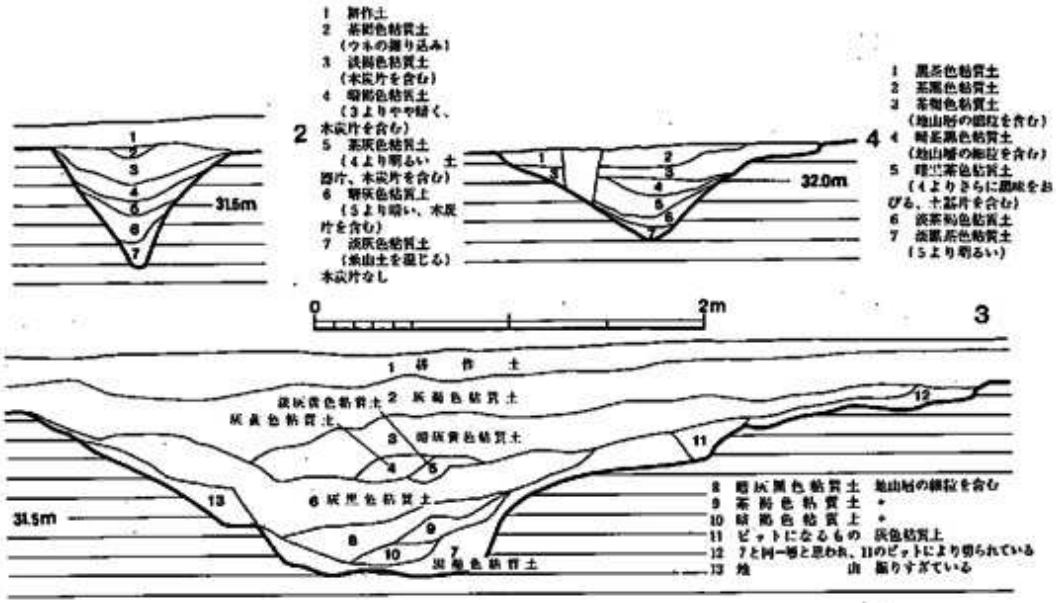
土器等の出土はなかった。

３号溝状遺構（第33図、付図２）

３号溝状遺構は、調査区中央より南側、北東側（32.056ｍ）から調査区域外南東側（31.228ｍ）へ向け走り、東側では１号墳周溝と８号溝状遺構により切られる。

この溝状遺構は、残存長22ｍ、幅２ｍ、深さ0.6ｍ程で、断面形は逆台形を呈する。

土器等の出土があった。



第 33 図　2－4号溝状遺構土層断面図（1/40）

4号溝状遺構（図版40、第33図、付図2）

4号溝状遺構は、調査区南側、調査区域外東側（31.502m）から調査区域外（祓川方向）西側（29.815m）へ向け弧形に走るものである。西側では、3号、4号、6号土壙墓、東側では8号溝状遺構に切られる。先述したように、この溝状遺構は、北東側へ区域外にのびて、取り付け道路部分で検出された2号溝状遺構に連結するものと考えられる。

この遺構の大きさは、残存長20m、幅1m、深さ0.6m程を測る。断面形は「V」字形を呈する。

土器等の出土があった。

6号溝状遺構（図版40、付図2）

6号溝状遺構は、調査区北東側、南西から調査区域外の北東側へやや蛇行しながら走る。19号貯蔵穴や9号溝状遺構を切って作られる。南側部分で人頭大の石や五輪塔の「空」部分1点が集中している。

この遺構は、現存長15m、幅0.5～1.5m、深さ0.2m程を測る。

土器等の出土はなかった。

8号溝状遺構（付図2）

8号溝状遺構は、調査区東端を南北に緩やかな弧形を呈して走る。南北端共、調査区域外にのびる。3号、4号溝状遺構や1号墳周溝を切って作られる。

この遺構は、残存長50cm、幅1.3～1.6m、深さ0.2～0.5m程を測る。

土器等の出土はなかった。

9号溝状遺構（付図2）

9号溝状遺構は、調査区北東端、調査区域外から、8号溝状遺構と平行に走り、5号土壙墓付近で、西側に向きをかえ、6号溝状遺構へ達するが、6号溝状遺構には切られる。

この遺構は、現存長13m、幅0.6～0.16m、深さ0.3～0.4m程を測る。

土器等の出土はなかった。

10号溝状遺構（付図2）

10号溝状遺構は、調査区北東側、8号溝状遺構と9号溝状遺構の間に位置し、共に切られる。南側（32.286m）から北側（32.012m）に向け走る。

この遺構は、現存長6m、幅0.6～1m、深さ0.1～0.3mを測る。

土器等の出土はなかった。

11号溝状遺構（付図2）

11号溝状遺構は、調査区中央より西側、北東側から調査区域外の南西側へ向け走る。北東側では「L」字状に曲がり、18号溝状遺構と連結する様相をみせる。18号貯蔵穴を切って作られる。

この遺構は、現存長9m、幅0.4m、深さ0.1～0.4m程を測る。

土器等の出土はなかった。

12号溝状遺構（付図2）

12号溝状遺構は、調査区中央より東側、3号溝状遺構北側に位置する。1号墳周溝に切られており、その西側にも一部の遺構がみられる。

この遺構は、残存長7.5m、幅0.4～0.6m、深さ0.05～0.1mを測る。

土器等の出土はなかった。

13号溝状遺構（付図2）

13号溝状遺構は、調査区中央より西側、11号溝状遺構とは直角に交叉し切られる。また、3号溝状遺構にも切られる。11号溝状遺構の北側にも連続すると推定される遺構の一部が残る。11号溝状遺構は18号溝状遺構と共に、方形区画を成す周溝状遺構とも推定し得るが、11号と13号溝状遺構の交叉部分からそれぞれ南西側と北西側にのびていく傾向にあるため、それぞれ独立した遺構と考えるのが妥当かもしれない。

この溝状遺構は、残存長4.5m、幅0.4m、深さ0.05～0.1m程を測る。

土器等の出土があった。

14号溝状遺構（付図２）

14号溝状遺構は、調査区南端、北東から南西に向け走るものだが、そのほとんどが調査区域外にのびており、その規模については正確な数値を測り得ない。

土器等の出土はなかった。

15号溝状遺構（付図２）

15号溝状遺構は、調査区北西端、南東（31.729m）から北西（31.438m）へ向け走るもので、北西側は調査区域外にのびる。

この溝状遺構は、残存長3.6m、幅0.4m、深さ0.1m程を測る。南東側で二又に分かれる。

土器等の出土はなかった。

16号溝状遺構（付図２）

16号溝状遺構は、調査区北西隅、南側（31.762m）から北側（31.423m）へ向け走るもので、６号竪穴住居跡を切って作られる。またピット185には切られる。

この溝状遺構は、残存長6.8m、幅0.44m、深さ0.1～0.15m程を測る。

土器等の出土はなかった。

17号溝状遺構（付図２）

17号溝状遺構は、調査区中央より北西側、北東から調査区域外の南西へ向け走る。30号土坑墓を切って作られる。

この溝状遺構は、現存長6.2m、幅0.2m、深さ0.1m程を測る。北東側で二又に分かれる。

土器等の出土はなかった。

18号溝状遺構（付図２）

18号溝状遺構は、調査区中央より西側、３号溝状遺構北側に位置する。

この溝状遺構は、北西側から南東側に向け走り、19号貯蔵穴を切っている。

この遺構の大きさは、現存長2.6m、幅0.2～0.6m、深さ0.1m程を測り、11号溝状遺構に直結するものと推定される。

土器等の出土はなかった。

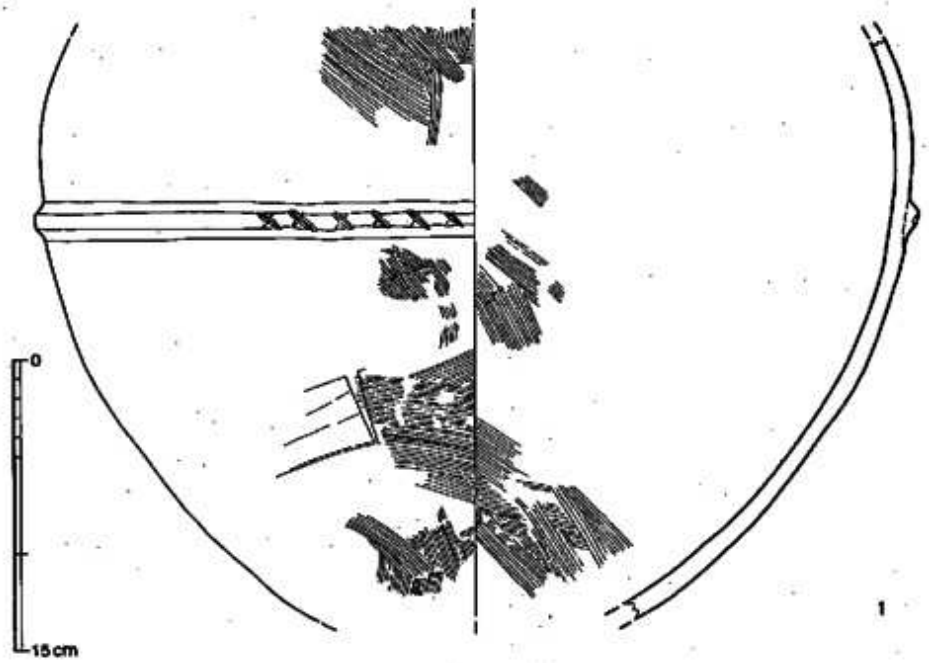
第３節　遺物

１．土器

・竪穴住居跡出土土器（第34～35図）

３号竪穴住居跡（第34図）

１は、壺の胴部で、胴部最大径付近に突帯をめぐらし、そこには「×」字の刻目を入れる。この土器は、弥生時代終末期に比定できよう。



第 34 図　３号竪穴住居跡出土土器実測図（1/4）

４号竪穴住居跡（図版43、第35図）

２は、緩やかに外反する口縁部をもつ甕で、復原口径19.5cmを測る。内外面共、ハケ目調整である。

３は、如意形にひらく口縁部をもつ甕で、復原口径20cmを測る。

４は、底部が丸味をおびるもので、４号竪穴住居跡炉内から出土している。

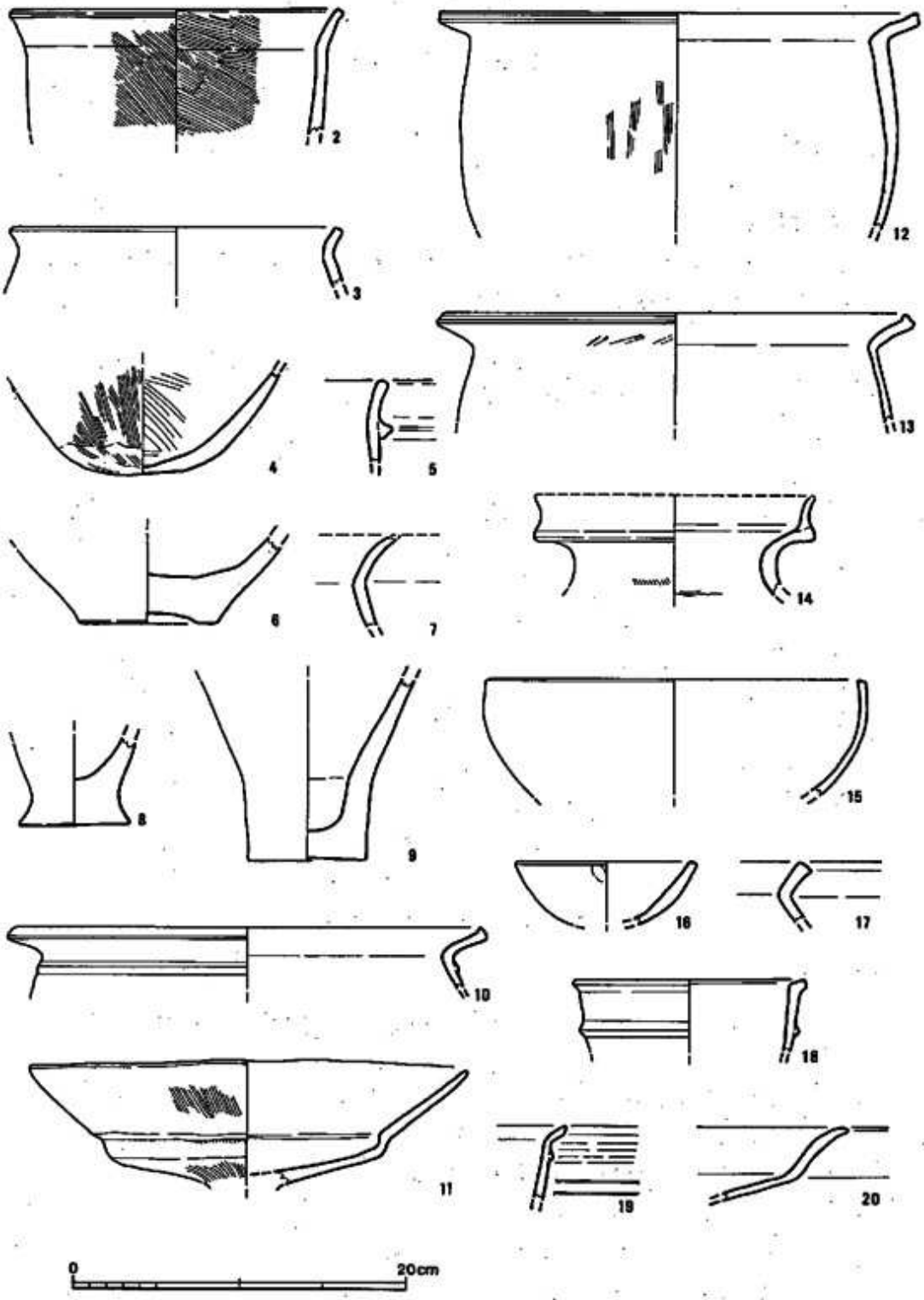
５は、口縁部外面下方に突帯をめぐらすものである。

６は、径８cmの上げ底の底部である。

７は、「く」の字にカーブする口縁部をもつ甕である。

８は、底部周縁が外方にひろがるもので、底径6.4cmを測る。

９は、底部が突出するもので、底径７cmを測る。



第 35 図　4 号～7 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/4)

3以外は埋土中のもので、弥生時代中期前半から後期後半のものを含む。

5号竪穴住居跡（第35図）

10は、「く」の字に曲折する口縁部をもつ甕である。口縁端部は面をもち、やや上方につまみ上がる。口縁部外面下方に断面三角形の突帯が付く。復原口径28.1cmを測る。

11は、復原口径26.2cmの高杯で、底部と体部の境からやや内湾し、さらに外方に大きくひろがって、口縁部に達するものである。

これらの土器は、弥生時代後期後半に比定できよう。

6号竪穴住居跡（第35図）

12は、「く」の字に外反する口縁部をもつ甕である。復原口径28.4cmを測る。

13は、9と類似する甕で、「く」の字に曲がる口縁部をもち、口縁端部は面をもち、やや上方につまみ上がる。復原口径29cmを測る。

14は、二重口縁壺であり、復原口径は16.6cmを測る。

15は、碗形土器で、復原口径22cmを測る。

16は、復原口径10.4cmを測る、手づくねの碗形土器である。

これらの土器は、弥生時代後期後半から終末期に比定できよう。

7号竪穴住居跡（第35図）

17は、「く」の字に屈曲する口縁部片である。

18は、「L」字状口縁をもつ鉢形土器で、体部に断面三角形の突帯を付ける。復原口径13.8cmを測る。

19は、「く」の字に屈曲する口縁部片である。口縁部外面下方に断面三角形の突帯をつける。

20は、底部と体部の境から外方にゆるやかにカーブして口縁部に達する高杯片である。

これらの土器は、弥生時代中期から後期後半に比定できよう。

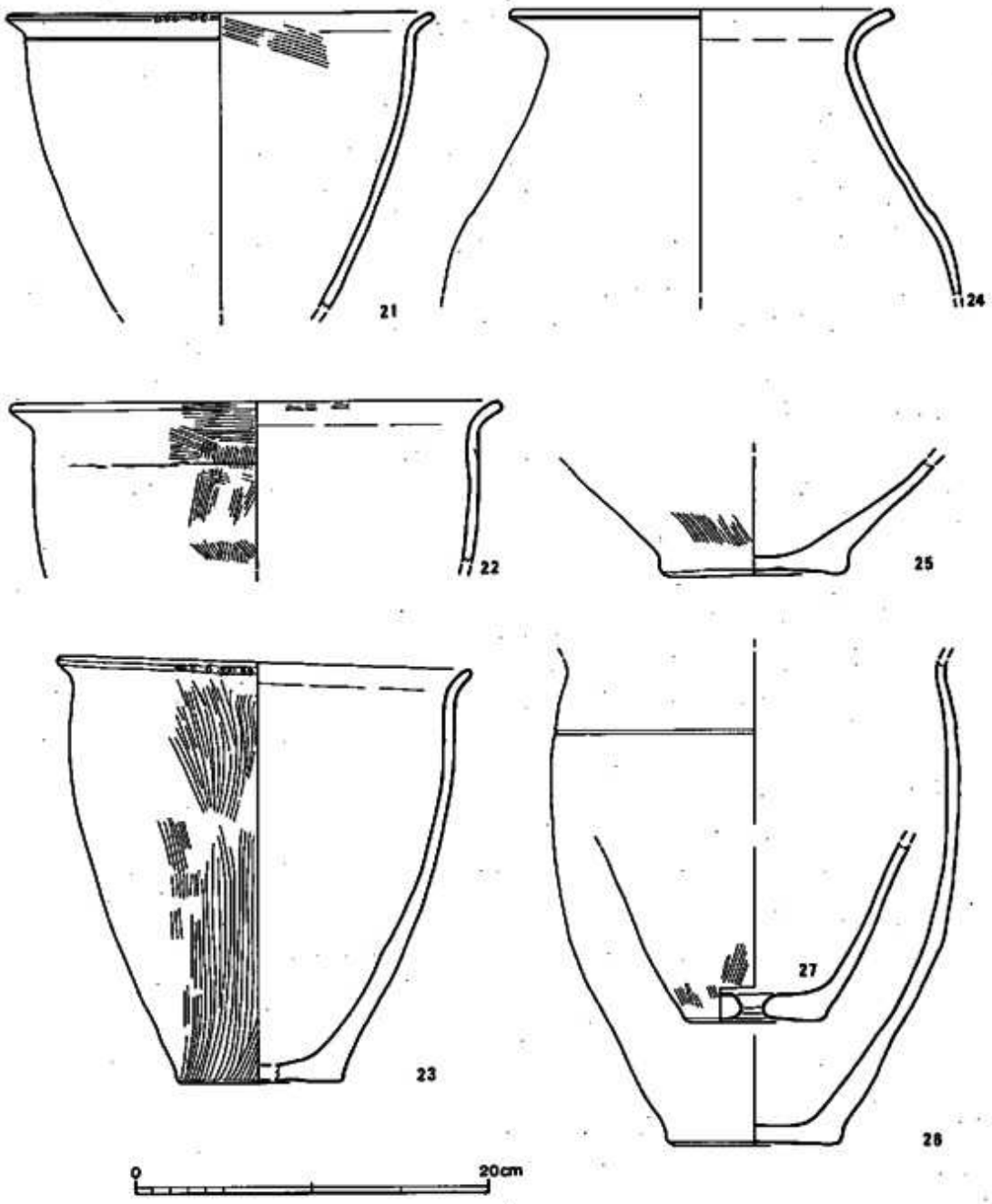
・貯蔵穴出土土器（図版41～43、第36～43図）

2号貯蔵穴（第36図）

21は、如意形にひらく口縁部をもつ甕で、口縁端部に刻目を入れる。調整は、内外面剥離のため不明であるが、口縁内側には斜め方向のハケ目が残る。復原口径23.8cm。

22は、如意形にひらく口縁部をもつ甕で、復原口径27.4cmを測る。外面はハケを施す。内面は不明である。

23は、如意形にひらく口縁部をもつ甕で、口縁端部に刻目を入れる。口径23cm、底径9.4cm、



第 36 図　2号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

器高23.9cmを測る。外面はハケ目を施す。内面は剝離が著しく、不明である。

24は、復原口径21.4cmの短頸壺で、胴部中央よりやや上には、へらで削り出した段がある。

25は、底径10.6cmの壺の底部で、底部周縁はやや肥厚し、上げ底になる。

26は、胴部中央よりやや上に、一条の沈線をもつ口縁部が欠失した甕である。復原口径9.7cmを測る。

27は、復原底径9.6cmの甕の底部である。底部中央には、焼成前にあけた径1.2cm程の孔がある。

これら土器の所属時期は、弥生時代前期後半に比定できよう。

3号貯蔵穴（第37図）

28は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。内外面共に剝離が著しく、胴部中央よりやや上では、粘土紐のつなぎ目が、段状に残っている。復原口径25.2cmを測る。

33は、復原口径6.6cmを測る鉢形土器である。立ち上がった口縁端部と口縁端部下に一条めぐらした突帯には、刻目を入れる。

34は、復原底径7.2cmを測る甕の底部である。

これらの土器の所属時期は、弥生時代中期前半に比定できよう。

5号貯蔵穴（第37図）

29は、逆「L」字状口縁をもつ甕である。復原口径29cmを測る。

30・31は、復原底径9.2cm、5cmを測る甕の底部である。共にやや上げ底になる。

これらの土器は、弥生時代中期前半に比定できよう。

6号貯蔵穴（第37図）

32は、如意形口縁をもつ甕で、胴部中央より上方に一条の沈線を入れる。復原口径26.6cmを測る。

35は、如意形口縁をもつ甕で、胴部中央付近に一条の沈線を入れる。復原口径19.4cmを測る。

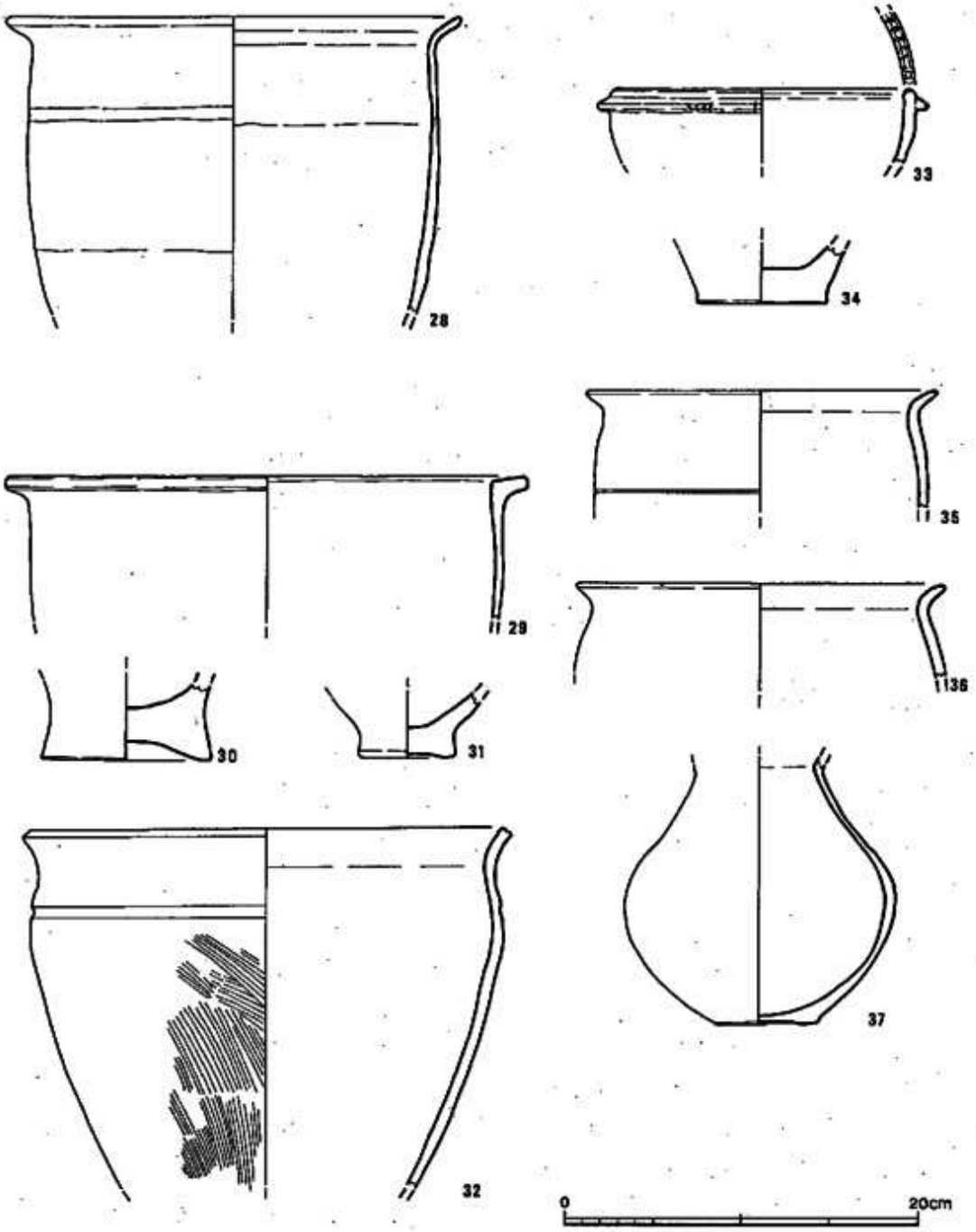
36は、32、35とは異なり、無文の如意形口縁の甕である。口径20.9cmを測る。

37は、口縁部付近を欠失する短頸壺で、胴部中央より上方に、へラで削り出した段を有する。底径7.6cm、胴部最大径15.4cmを測る。

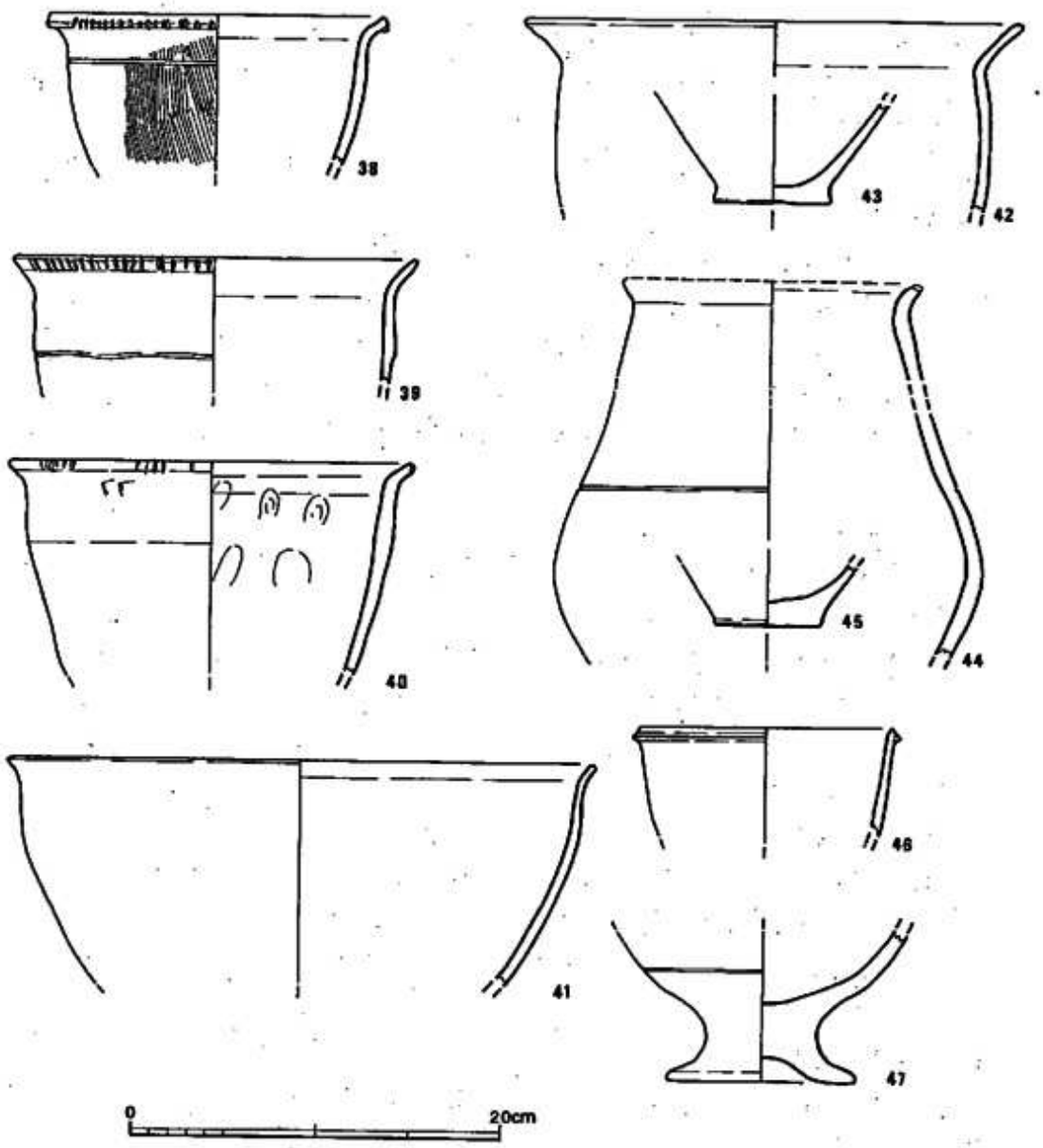
これらの土器のうち、37は、弥生時代前期後半のものだが、上層で検出した他のものは、中期前半に比定できよう。

7号貯蔵穴（第38図）

38、39、40は、口縁部の刻目の入れ方が異なる。



第 37 図　3号、5号－6号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）



第 38 図　7 号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

38は、如意形にひらく口縁部をもつ甕で、口縁端面に刻目を入れる。また、胴部中央より上方に一条の沈線をめぐらす。外面は、縦方向のハケ目をしっかり残し、内面も胴部にハケによる調整痕を残す。復原口径18cmを測る。

39は、如意形に緩やかにひらく口縁部をもつ甕で、口縁外面に刻目を入れる。胴部上方には一条の沈線をめぐらす。復原口径21.7cmを測る。

40は、如意形にひらく口縁部をもつ甕で、その端部に刻目を入れる。復原口径21.6cmを測る。

41は、胴部から緩やかにひらき、口縁部が如意形になる鉢である。復原口径44cmを測る。

42は、如意形にやや長くひらく口縁部をもつ甕で、復原口径26cmを測る。

43は、復原口径6.2cmを測る底部である。底部周縁はやや肥厚し、外方にひろがる。

44は、復原口径15.7cmの口縁部片と胴部最大径23.2cmの体部片からなる無頸壺である。胴部中央より上方に、一条の沈線をめぐらす。

45は、復原口径5.2cmの底部である。

46は、体部から直線的にのびて口縁部に達する甕で、口縁外端部下方に、一条の断面三角形の突帯をめぐらす。復原口径13.4cmを測る。

47は、脚付甕になるもので、底径10cmを測る。体部中央より下方に、一条の沈線をめぐらす。

これらの土器は、弥生時代前期後半に比定できよう。

8号貯蔵穴（第39図）

48は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。復原口径19cmを測る。

49は、底径7cmを測る底部である。底部周縁は外方に肥厚する。

50は、底径7.8cmを測る底部である。底部はやや突出している。

これらの土器は、弥生時代前期末から中期初頭に比定できよう。

9号貯蔵穴（第39図）

51は、蓋形土器である。つまみ部径は4.4cmを測り、つまみ部外端から斜め外方に「八」の字に広がり体部へと続く。

52は、底径9.8cmを測る底部片である。

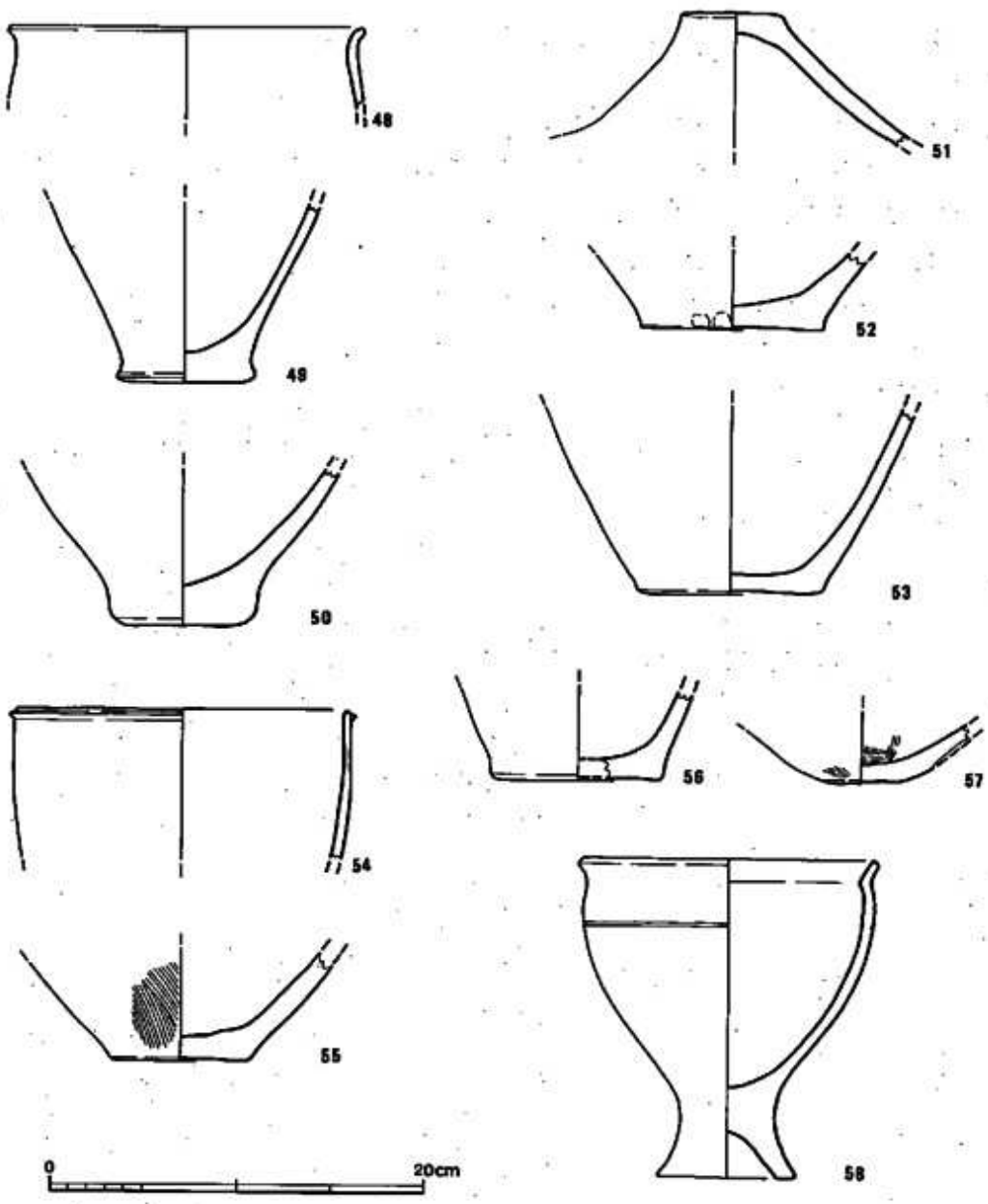
53は、底径9.8cmを測る底部片である。

56は、復原底径9.1cmを測る底部片である。

これらの土器は、弥生時代前期末に比定できよう。

10号貯蔵穴（第40図）

59は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。復原口径は26cmを測る。



第 39 図　8号～9号、11号、18号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)

60は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。胴部上方に一条の沈線をめぐらす。復原口径25cmを測る。

61は、復原底径10.8cmを測る底部片である。

62は、胴部最大径16.1cmを測る甕である。口縁部は如意形にひらくようである。

63は、復原底径12.4cmを測る底部片である。

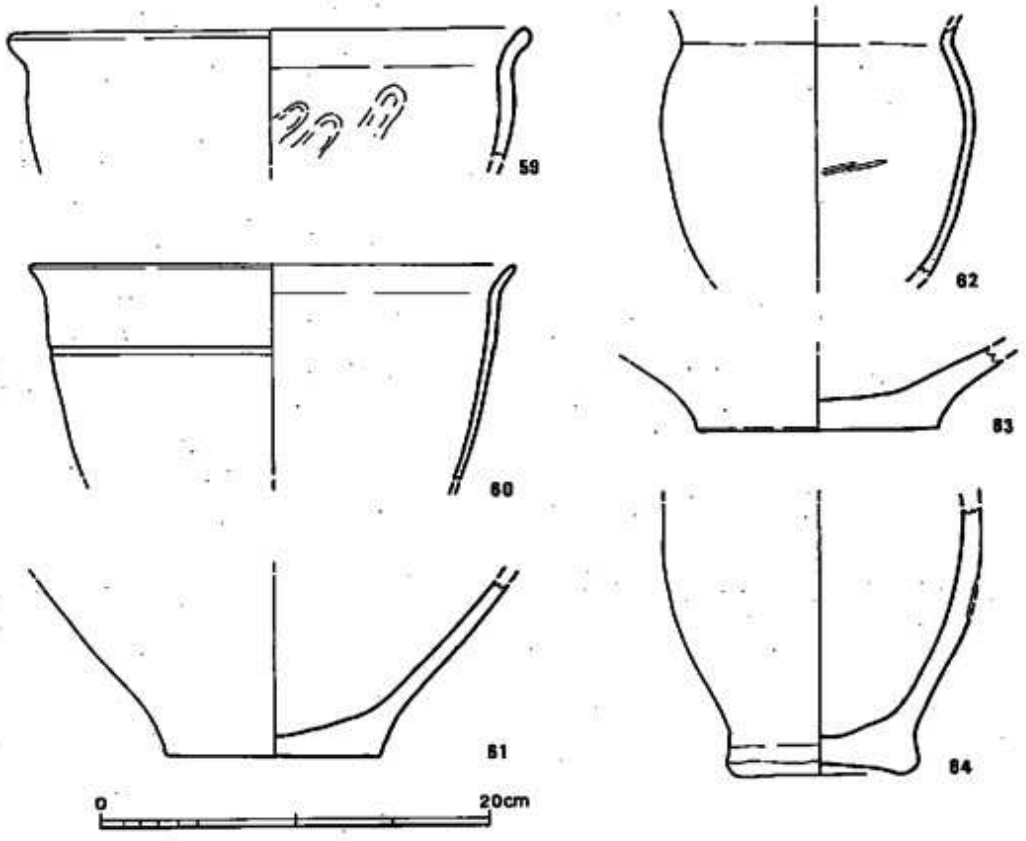
64は、底径5.1cmを測る底部片である。

これらの土器は、弥生時代前期末に比定できよう。

11号貯蔵穴（第39図）

54は、体部から直線的に立ち上がり口縁部へ達する甕である。口縁部外面直下に断面三角形の突帯をめぐらす。

55は、底径7cmを測る底部片である。外面にはハケ目が施される。



第 40 図　10号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

これらの土器は、弥生時代前期後半に比定できよう。

12号貯蔵穴（第41図）

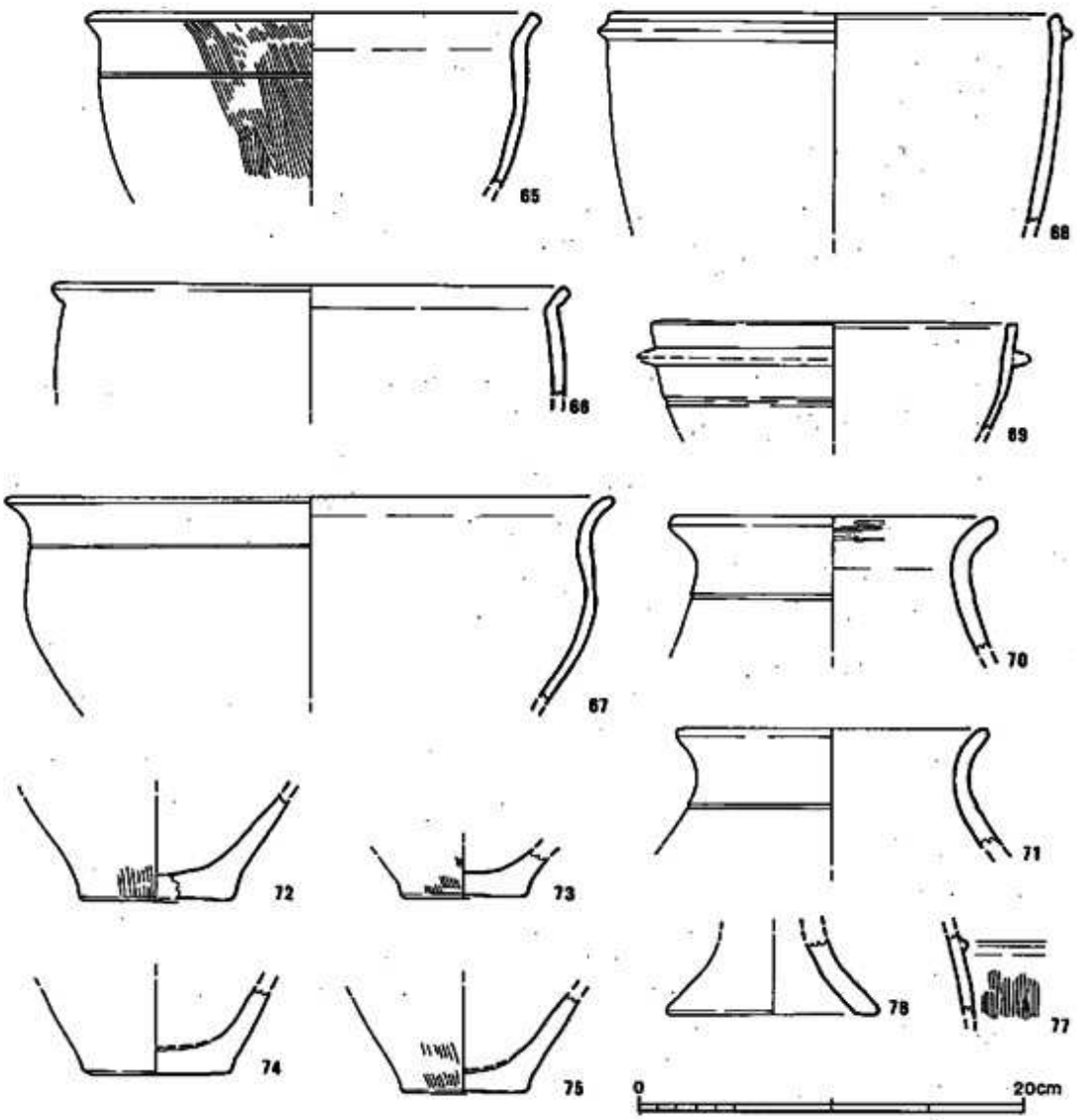
65から66は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。

65は、胴部上方に一条の沈線をめぐらす。復原口径22.4cmを測る。外面にはハケ目を施す。

66は、復原口径27cmを測る。

67は、復原口径31cmを測る鉢形土器である。口縁部外面下方に一条の浅い沈線がめぐる。

68は、体部からゆるやかに内湾し、口縁部に達する甕である。口縁部外面直下に断面三角形



第 41 図　12号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

の突帯をめぐらす。復原口径23.5cmを測る。

69は、体部から斜め外方にややひらく口縁部である。口縁端部は平坦である。口縁部外面直下には、やや突出気味に突帯が付く。その下方には、一条の沈線をめぐらす。

70と71は、無頸壺である。共に肩部に一条の沈線をめぐらす。

70は、復原口径17cmを測る。

71は、復原口径16.2cmを測る。

72から75は、底部片である。

72は、復原底径8.1cmを測る。

73は、復原口径6.4cmを測る。

74は、底径7.8cmを測る。

75は、底径6.7cmを測る。

76は、脚付甕片である。底径10.8cmを測る。

77は、断面三角形の突帯をつける体部片である。

これらの土器は、弥生時代前期末に比定できよう。

14号貯蔵穴（第42図）

78は、体部からほぼ直線的にのび、口縁部に達する甕である。口縁部外面直下に断面三角形の突帯を付け、その突帯には刻目を入れる。

79と80は共に、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。

79は、口縁端部に刻目を入れ、肩部に一条の沈線をめぐらす。復原口径24.9cmを測る。

80は、復原口径28.2cmを測る。

81は、底径9.4cmを測る壺の底部片である。

82は、「八」の字にひらく壺の口縁部片である。復原口径18cmを測る。

83から85は底部片である。復原口径は、83が6.7cm、84が8.2cm、85が6.4cmである。

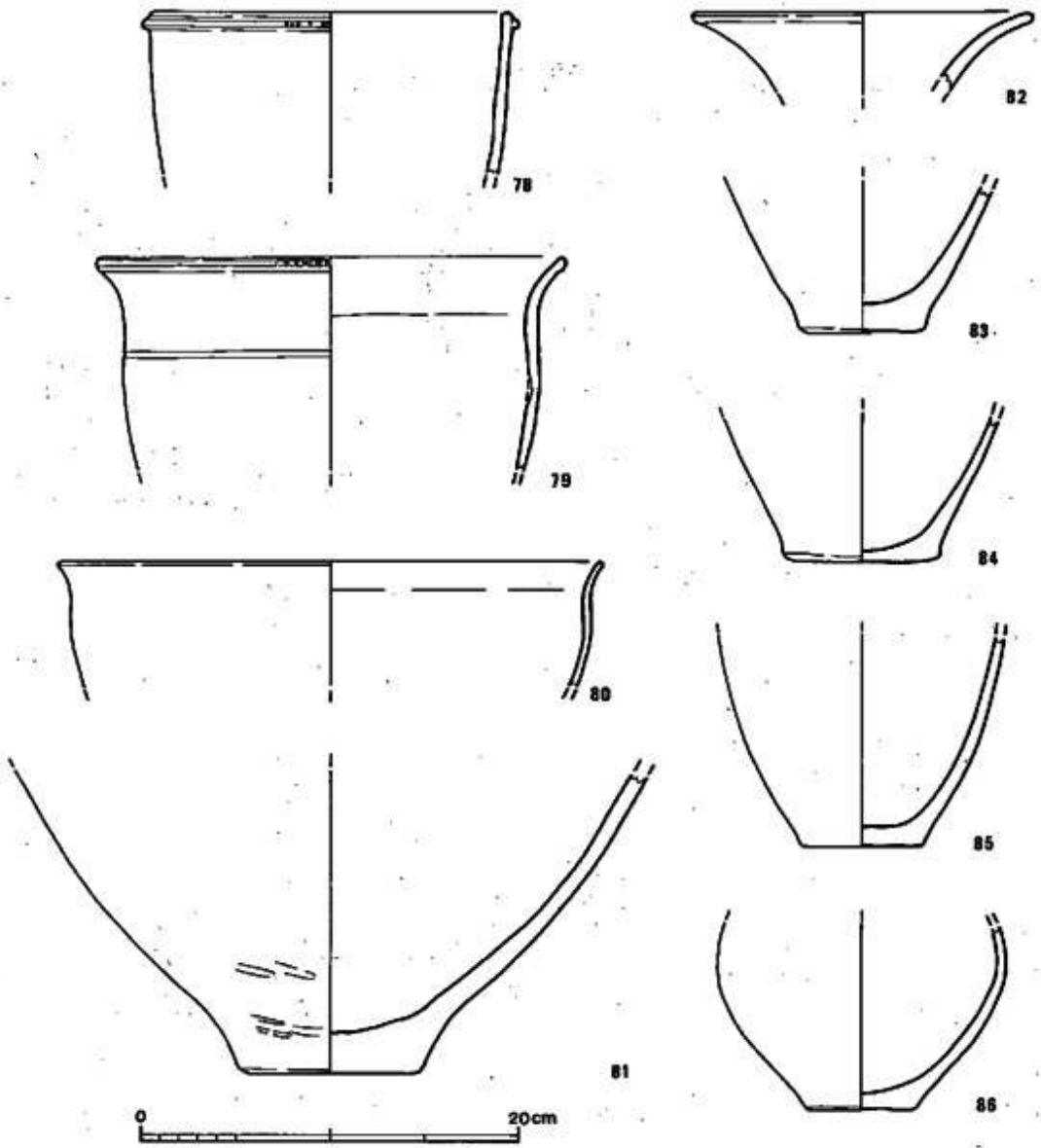
86は、無頸壺の底部片である。底径6cmを測る。

これらの土器は、弥生時代前期末に比定できよう。

18号貯蔵穴（第39図）

57は、底部が丸味を帯びるもので、弥生時代後期に比定できよう。

58は、脚付甕である。口径15.4cm、底径7.3cm、高さ16.9cmを測る。胴部中央より上方に一条の沈線をめぐらす。



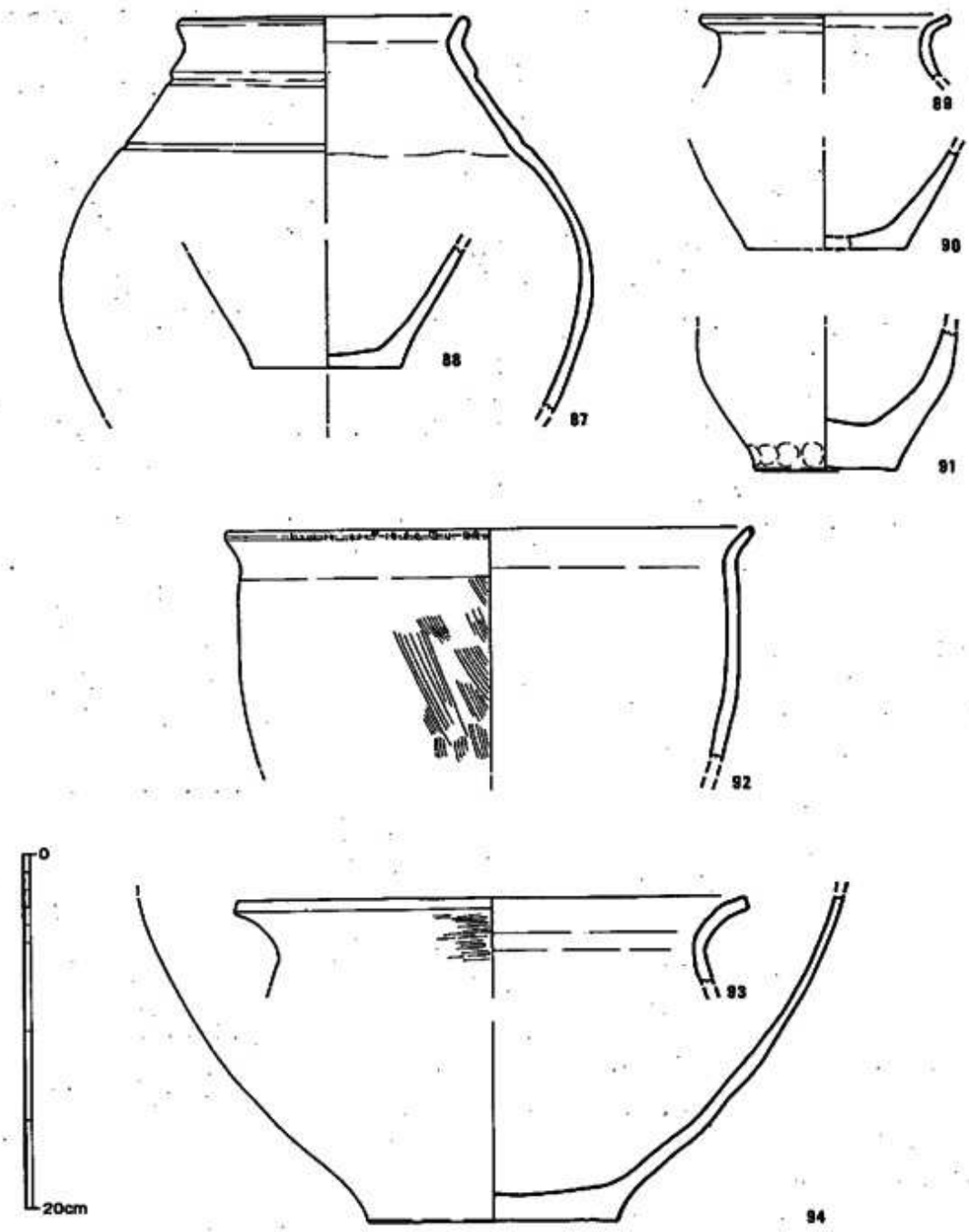
第 42 図　14号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

19号貯蔵穴（第43図）

87は、口径15.7cm、胴部最大径30cmを測る無頸壺である。口頸部に一条の沈線をめぐらし、肩部にヘラによる削り出しの段がある。

88、90から91は、底部片である。復原口径は88が8.2cm、90が9cm、91が8cmを測る。91の底部上辺には、指頭圧痕が残る。

89は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。復原口径13.6cmを測る。



第 43 図　19号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

92は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。口縁端部には刻目を入れる。復原口径30.2cmを測る。

93は、復原口径28.4cmを測り、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。

94は、底径14cmを測る壺の底部片である。

これらの土器は、弥生時代前期末に比定できよう。

・土坑出土土器（図版41～43、第44～46図）

2号土坑（第44図）

95から97は底部片である。底径は、95が9.7cm、96が10.4cm、97が7.8cmを測る。97はやや上げ底になる。

3号土坑（第44図）

99から101は底部片である。底径は、99が6.1cm、100が9.6cm、101が6.6cmを測る。101と103の底部はやや突出する。

5号土坑（第44図）

106は、復原口径24.2cmを測る、二重口縁壺の口縁部片である。

この土器は、弥生時代後期後半に比定できよう。

8号土坑（第44図）

107は、「く」の字に折れ曲がる口縁部をもつ甕である。口縁端部には刻目を入れる。また、口縁外面直下に一条の沈線を入れる。復原口径31cmを測る。

この土器は、弥生時代中期初頭に比定できよう。

11号土坑（第45図）

110は、壺の口縁部から体部を残す破片である。体部に三条の沈線を巡らす、口径16.4cm。

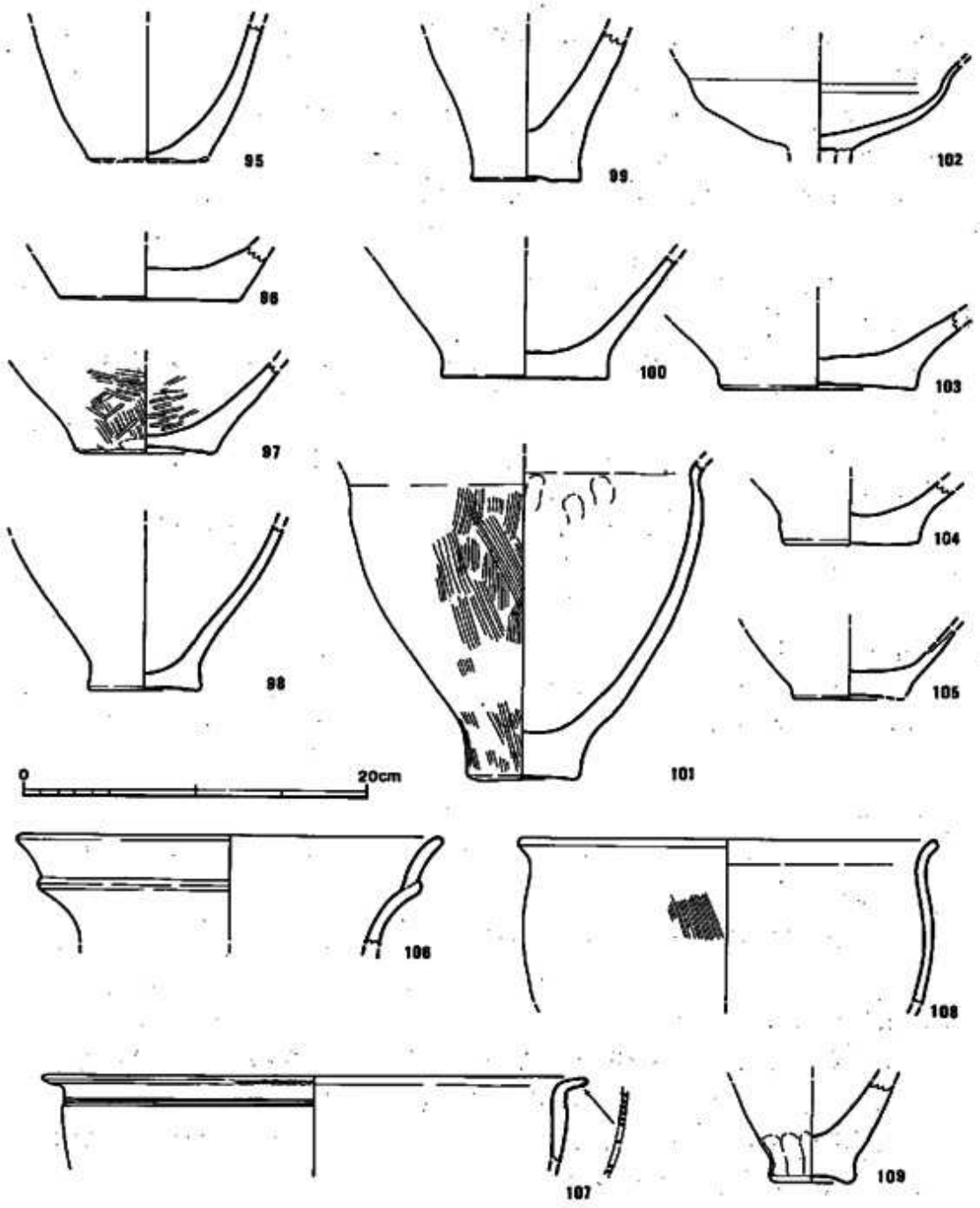
111は、「く」の字に緩やかにまがる口縁部をもつ甕である。口径24.8cm。

112から114は底部辺である。112、113は甕、114は壺の底部と思われる。それぞれの底径は、112が8.3cm、113が8.2cm、114が9cmを測る。

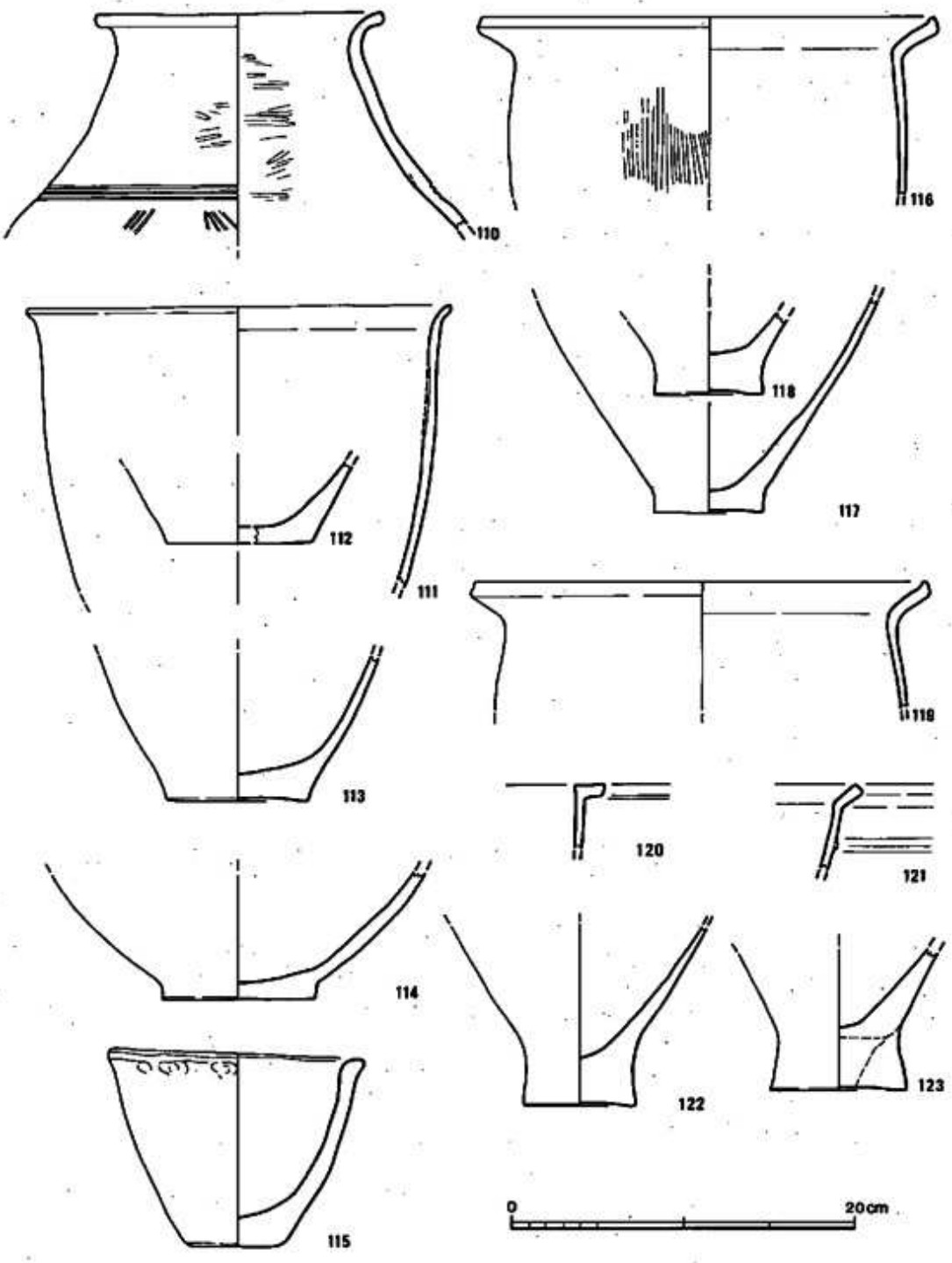
これらは、弥生時代前期末葉に比定できよう。

13号土坑（第46図）

124は、胴部が大きく張り出す壺である。胴部最大径22cmを測る。肩部に断面三角形の突帯



第 44 図　2号～3号、5号、8号、15号、19号、22号土壙出土土器実測図 (1/4)



第 45 図　11号、16号、24号、28号～30号土壙出土土器実測図（1/4）

を付け、その下には、羽状文と沈線文を飾る。底径８cmを測る。

125は、「ハ」の字に外反する鉢形土器の口縁部片である。復原口径21.4cmを測る。

126は、如意形に口縁部がやや長目にひらく甕である。復原口径22.4cmを測る。

127は、壺の体部片である。胴部最大径（27cm）よりやや上に、断面三角形の突帯を付け、刻目を入れる。また、肩部には、羽状文と沈線文を飾る。

128は、復原口径23.2cmを測る鉢である。

129から131までは、底部片である。復原底径は、130が7.8cm、131が8.4cm、132が6.8cmを測る。

これらの土器は、弥生時代前期後半に比定できよう。

15号土坑（第44図）

102は、底部から体部へやや内湾してから外方にひらがる高杯体部片である。

103は、復原口径11.4cmを測る底部片である。

これらのうち、102は弥生時代後期後半に比定できよう。

16号土坑（第45図）

116は、「く」の字に屈曲する甕の口縁部片である。復原口径27cmを測る。

117は、116と同一個体になると思われる甕の底部である。底径6.2cmを測る。

19号土坑（第44図）

109は、底径3.2cmを測る底部片である。底部外辺は指頭圧痕がのこる。やや上げ底になる。

22号土坑（第44図）

104と105は、底部片である。復原底径は、104が8.2cm、105が6.6cmを測る。

108は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。復原口径24.4cmを測る。

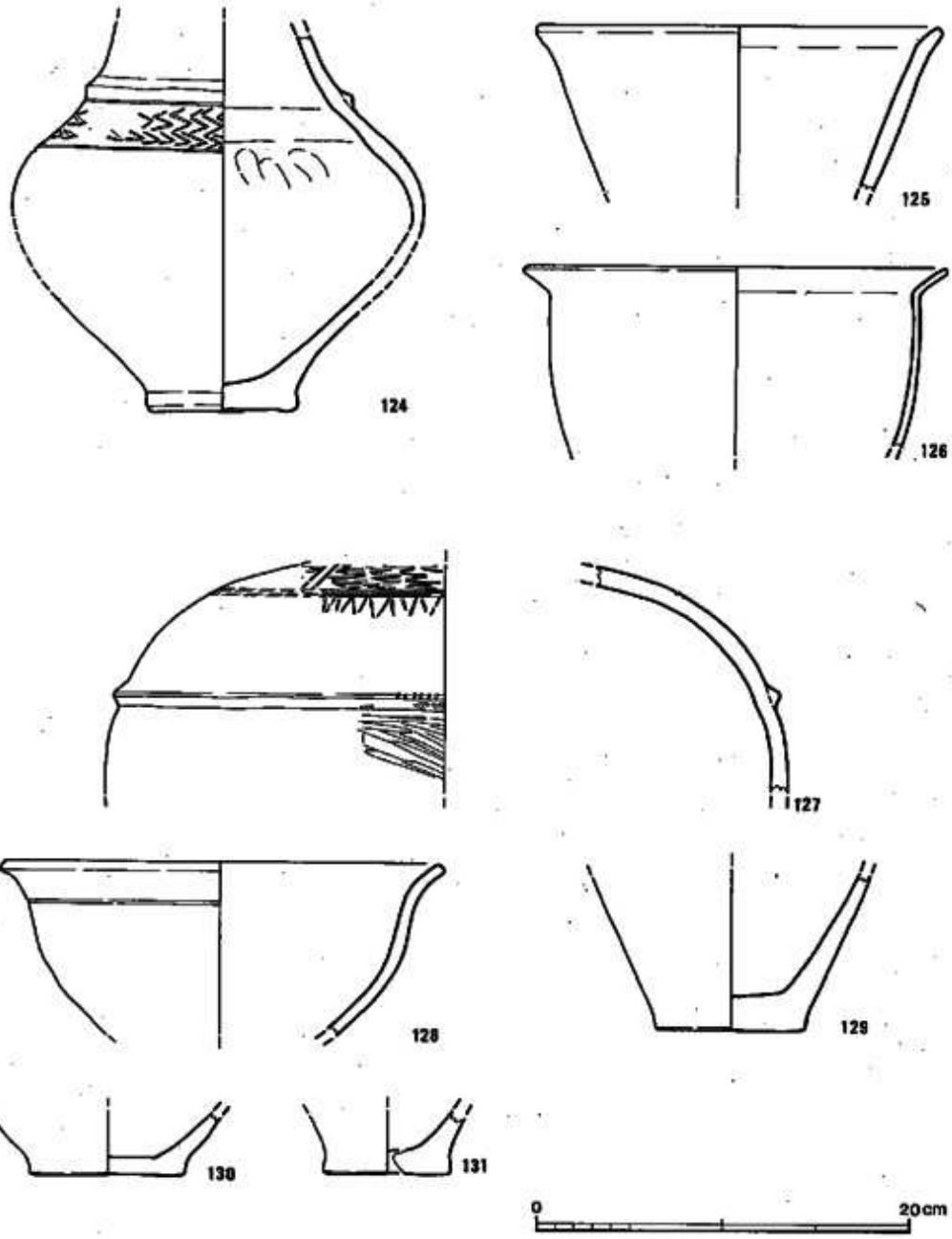
24号土坑（第45図）

119は、「く」の字に屈曲する口縁部をもつ甕である。口縁端部は面をもち、やや上方につまみあがる。

この土器は、弥生時代中期初頭に比定できよう。

28号土坑（第45図）

122は、底径6.6cmを測る底部片である。底部はやや突出し、若干上げ底になる。



第 46 図　13号土壙出土土器実測図（1/4）

29号土坑（第45図）

118は、底径6.2cmを測る底部片である。若干上げ底になる。

30号土坑（第45図）

120は、逆「L」字状口縁部片である。

121は、「く」の字に屈曲する口縁部片で、体部上方に断面三角形の突帯がつく。

123は、復原底径7.8cmを測る底部片である。やや上げ底になる。

・おとし穴状遺構出土土器（図版43、第47図）

1号おとし穴状遺構

132は、復原口径12.8cmを測る無頸壺片である。

133は、口径14.6cm、底径8.8cm、器高17cmを測る鉢形土器である。

134は、如意形にひらく口縁部をもつもので、外面屈曲部に一条の沈線がめぐる。

135は、口径21cm、底径8.3cm、器高19.4cmを測る甕である。

136は、如意形にひらく口縁部をもつ甕である。口径15.6cmを測る。

139と140は底部片である。140は口径5.1cm、141は5.7cmを測る。

これらの土器は、弥生時代前期後半のもので埋土中から出土している。

2号おとし穴状遺構

137から138は、「く」の字に屈曲し、やや長めの口唇部をもつ甕である。138は、口径34.2cmを測る。

・溝状遺構出土土器（図版43、第48図）

3号溝状遺構

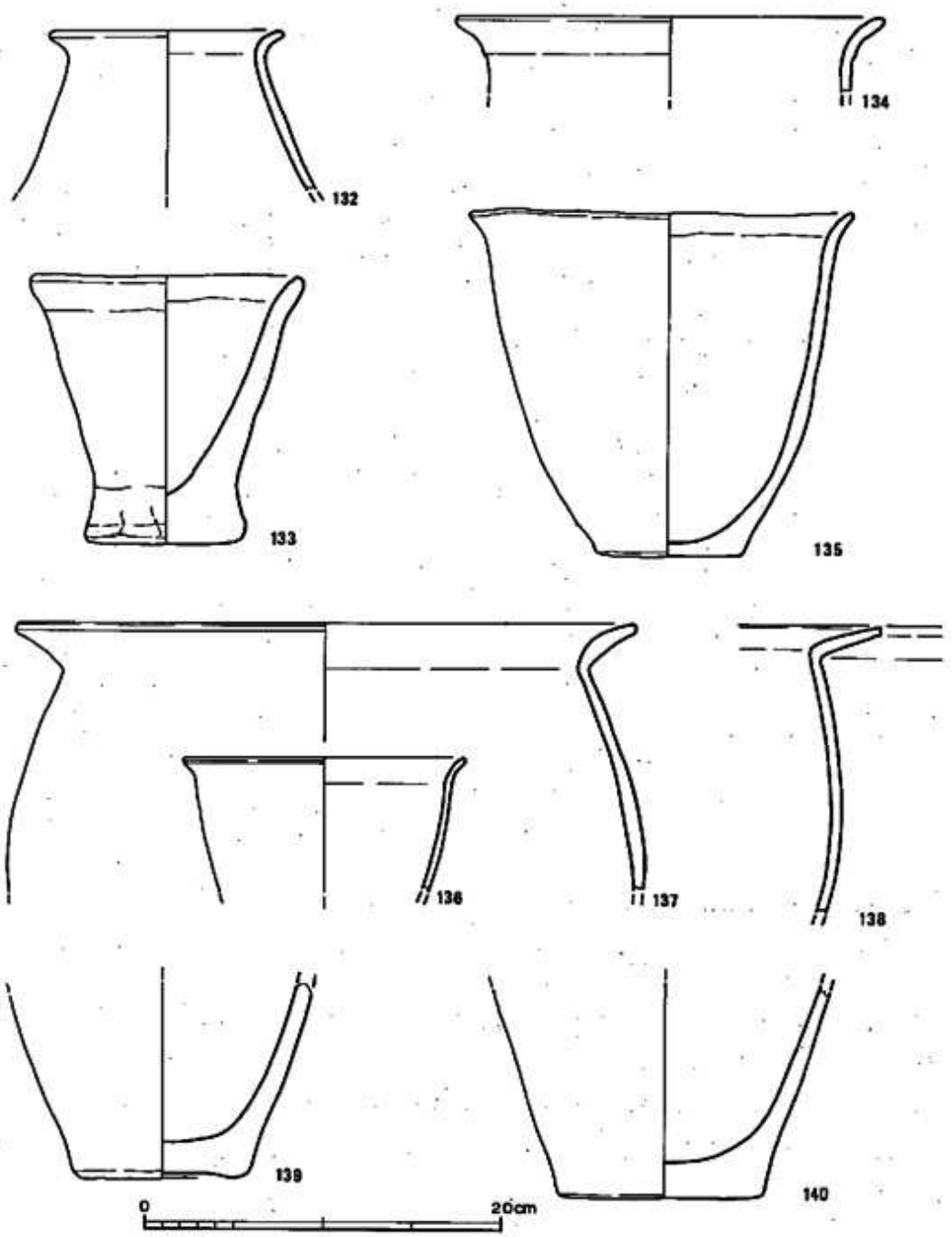
148は、体部から斜め外方にひろがり、口縁部に達するもので、口縁端部はやや下方に垂下する。復原口径20.6cmを測る。

149は、復原底径6.8cmを測る底部片である。やや上げ底になる。

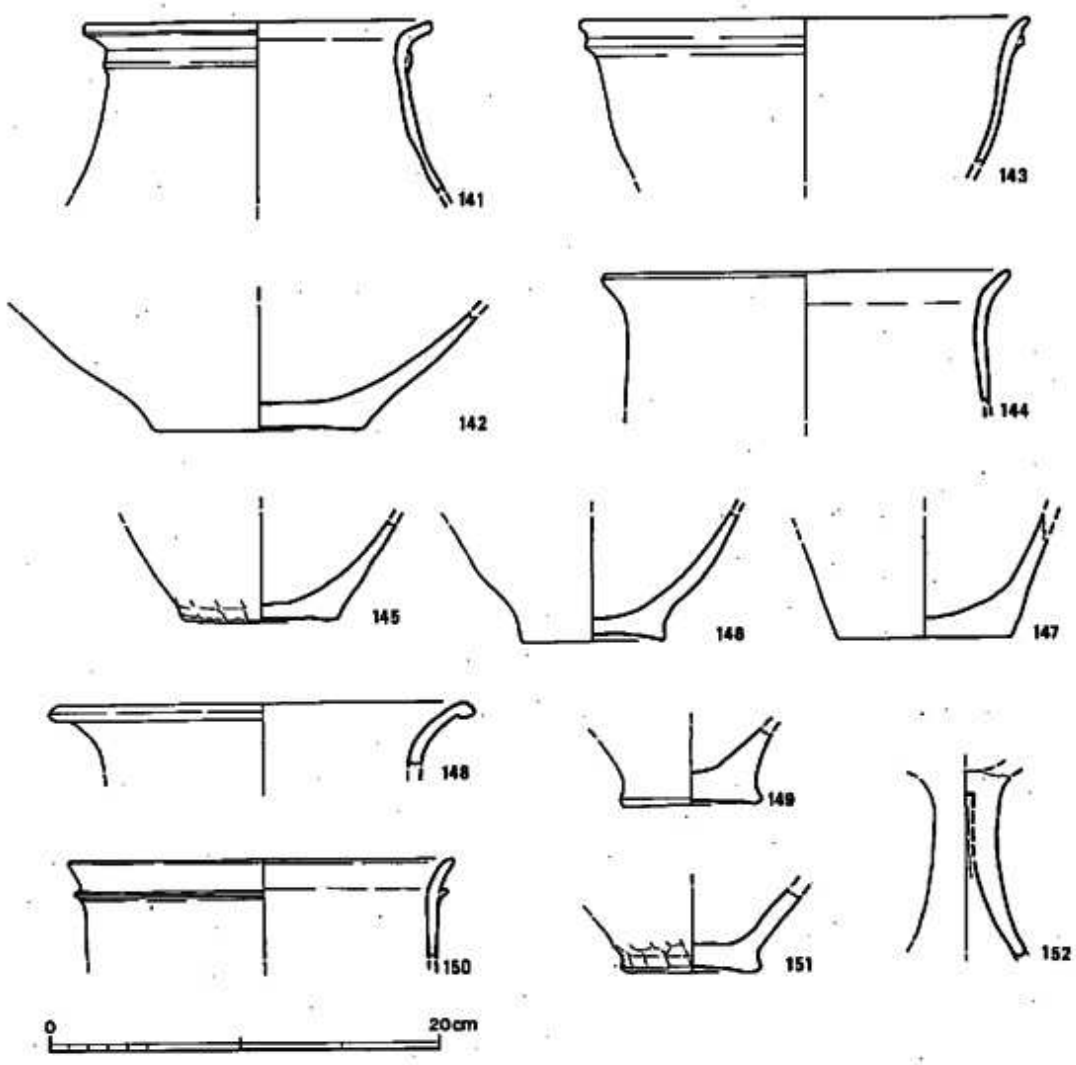
4号溝状遺構

141は、復原口径17.6cmを測る短頸壺の口縁部片である。口縁部外面直下に断面三角形の突帯がつく。

142は、底径10.8cmを測る底部片である。



第 47 図　おとし穴状遺構出土土器実測図（1/4）



第 48 図　溝状遺構出土土器実測図（1/4）

143は、体部から斜め外方にのびて口縁部に達する甕で、口縁部外面直下に断面三角形の突帯がつく。復原口径22.4cmを測る。

144は、如意形にひらく口縁部をもつ甕で。復原口径20.4cmを測る。

145から147は、底部片である。復原底径は146が8cm、147が7.2cm、148が8.8cmを測る。147は上げ底である。

7号溝状遺構

152は、長脚の高杯である。脚内部には、タテ方向にしぼり痕がみられる。

13号溝状遺構

150は、体部から直線的にのびて、口縁部辺で外反する甕で、口縁部外面下に突帯がつく。復原口径19.6cmを測る。

151は、底径8.6cmを測る底部片である。

・ピット等出土土器（図版42、第49図）

ピット153

153は、朝顔形にひらく口縁部片である。口径27.6cmを測る。口頸部には4条の沈線をめぐらす。

ピット125

155は、体部から直線的に口縁部へ達する甕である。復原口径21.7cmを測る。口縁部外面直下には、突帯をつける。

156は、口縁部外面下に突帯をつける甕である。

ピット140

158は、「く」の字に大きく屈曲する甕の口縁部である。復原口径16.6cmを測る。

ピット177

159は、鋤先状口縁の屈曲部に刻目を入れる壺である。

ピット193

161は高杯状を呈するものだが、器形は不明である。

ピット174

162は、上げ底の底部である。底径6.4cmを測る。

その他、4号土壙墓検出の底部片がある。163は径5.1cmを測る。

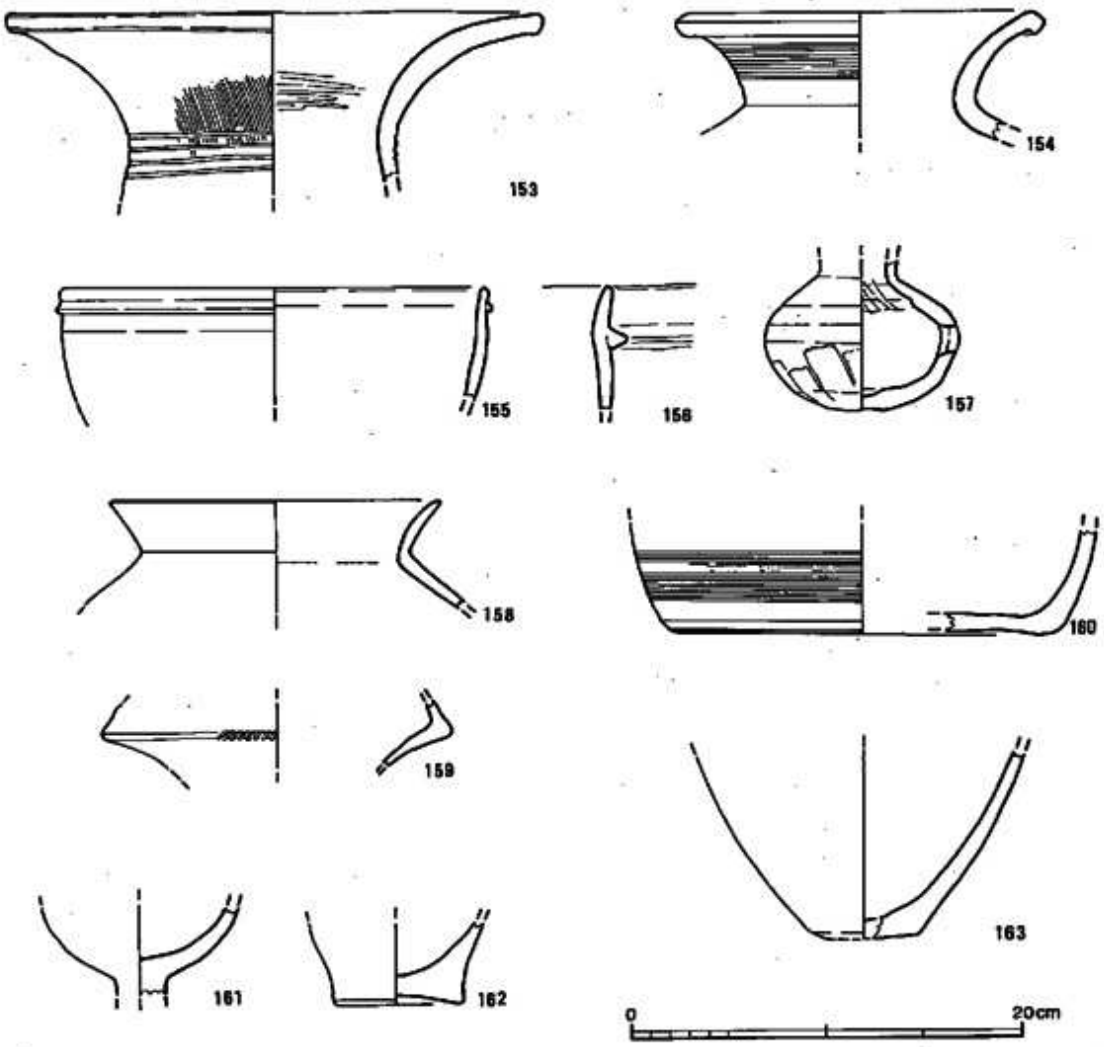
155、157、161は須恵器片である。

154は、1号石棺墓床面から出土した壺の口縁部で、口縁端部はやや垂下する。

157は、1号墳南西側周溝出土の鉢である。胴部最大径10cmで、その部分に穿孔がみられる。

160は、土器溜り検出の底部片である。復原口径18.7cmを測る。

以上、各機構から出土した土器をみてきたわけだが、時期的には、大きく、弥生時代前期後半から中期初頭と後期後半から終末期にかけての二時期のものに集中している。



第 49 図　ピット等出土土器実測図（1/4）

2）土製品（図版44、第50図）

土製紡錘車

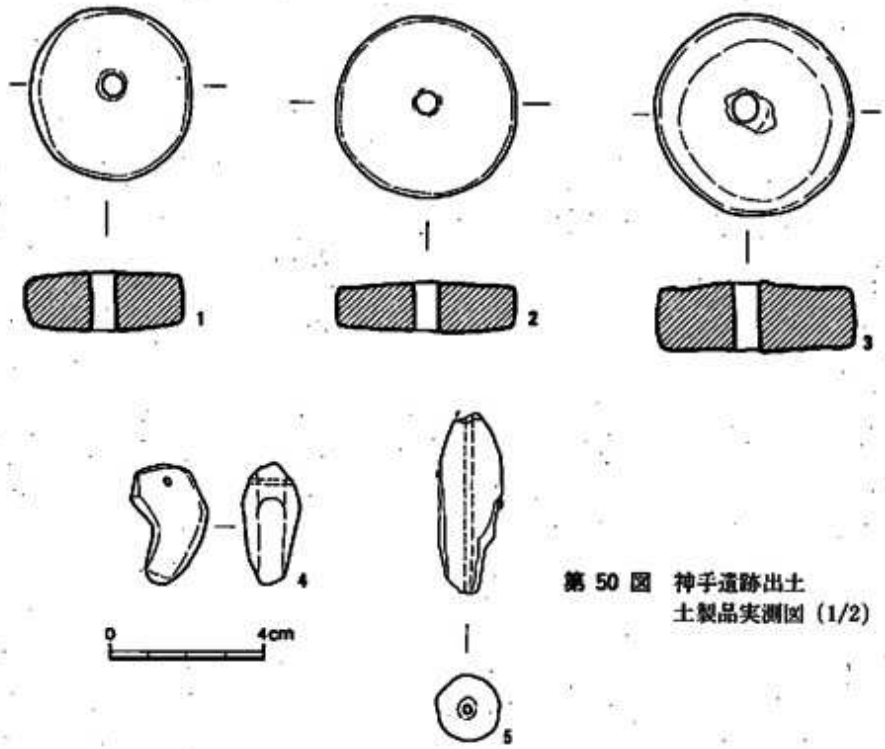
3点出土しているが、共に円形でその中心に穿孔がある。1は径4cm、厚さ1.4cm、2は直径4.6cm、厚さ1.2cm、3は直径5.1cm、厚さ1.8cmを測る。1は2号貯蔵穴、2は7号貯蔵穴、3は13号貯蔵穴から出土している。

土製勾玉

4は4号竪穴住居跡から出土する。高さ3cm、幅1.5cmを測る。

土錘

5は、4号竪穴住居跡出土のもので、長さ3.6cm、胴部最大径1.6cmを測る土錘である。



第 50 図　神手遺跡出土
土製品実測図 (1/2)

3）石器（図版45～47、第51～53図、第３～４表）

石器は各種遺構から出土しているが、それらは弥生時代のものだけでなく縄文時代のものも含まれているようである。石鏃については打製55点中、腰岳産黒曜石製７点（１～７）、姫島産黒曜石製14点（８～22）、サヌカイト製33点（23～55）を数え、このほかに磨製が１点（56）見られる。サヌカイト製のものについては、小さくて薄い三角形ないし五角形の形態特徴や周防灘沿岸地域の弥生時代遺跡の出土状況から判断して、その大半が弥生時代に属すると考えられよう。これに対し腰岳産や姫島産のものに関しては、比較的厚く、また茎部が抉れるという形態的特徴や、石匙といった縄文時代特有の石器が本遺跡でも出土していることなどから、その多くが縄文時代に属するものである可能性が高い。なお、45・46のサヌカイト製石鏃は４号土壙墓からの出土である。

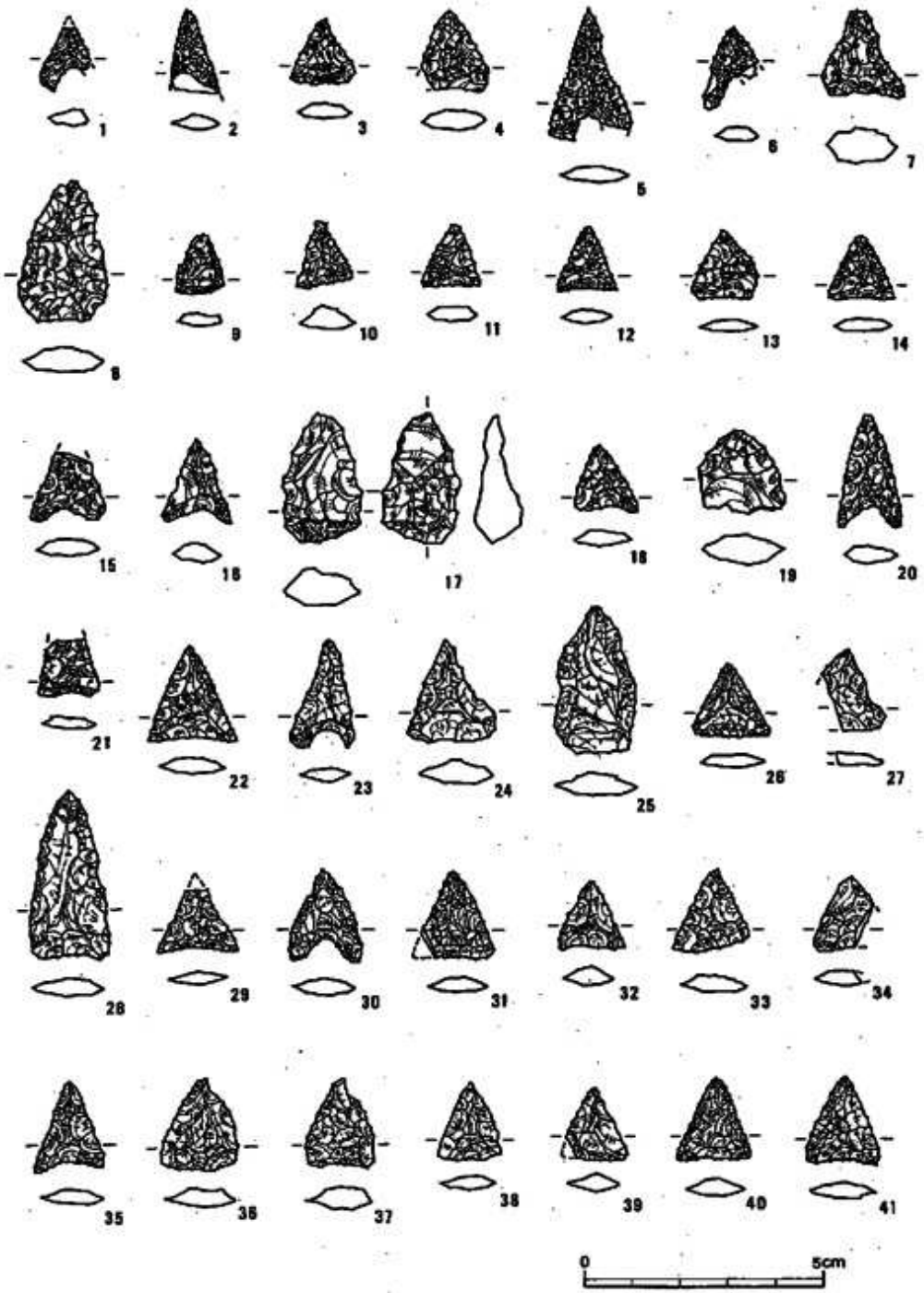
60は大きさや形態的特徴から判断して、九州の縄文後・晩期に見られる十字形石器と考えられる。石材としては結晶片岩が最も普遍的に用いられるが、この60についてはサヌカイト製で他に例をみない。

65の打製石斧は長くて厚いだけでなく基部が丸く成形されており、一般的な打製石斧とはその趣がよほど異なる。本遺跡出土の打製石斧が、縄文後・晩期もしくは弥生前期末～中期初頭のいずれかに属するかは不明である。

67の磨製石斧は蛇紋岩製の両刃石斧で縄文時代に属する。

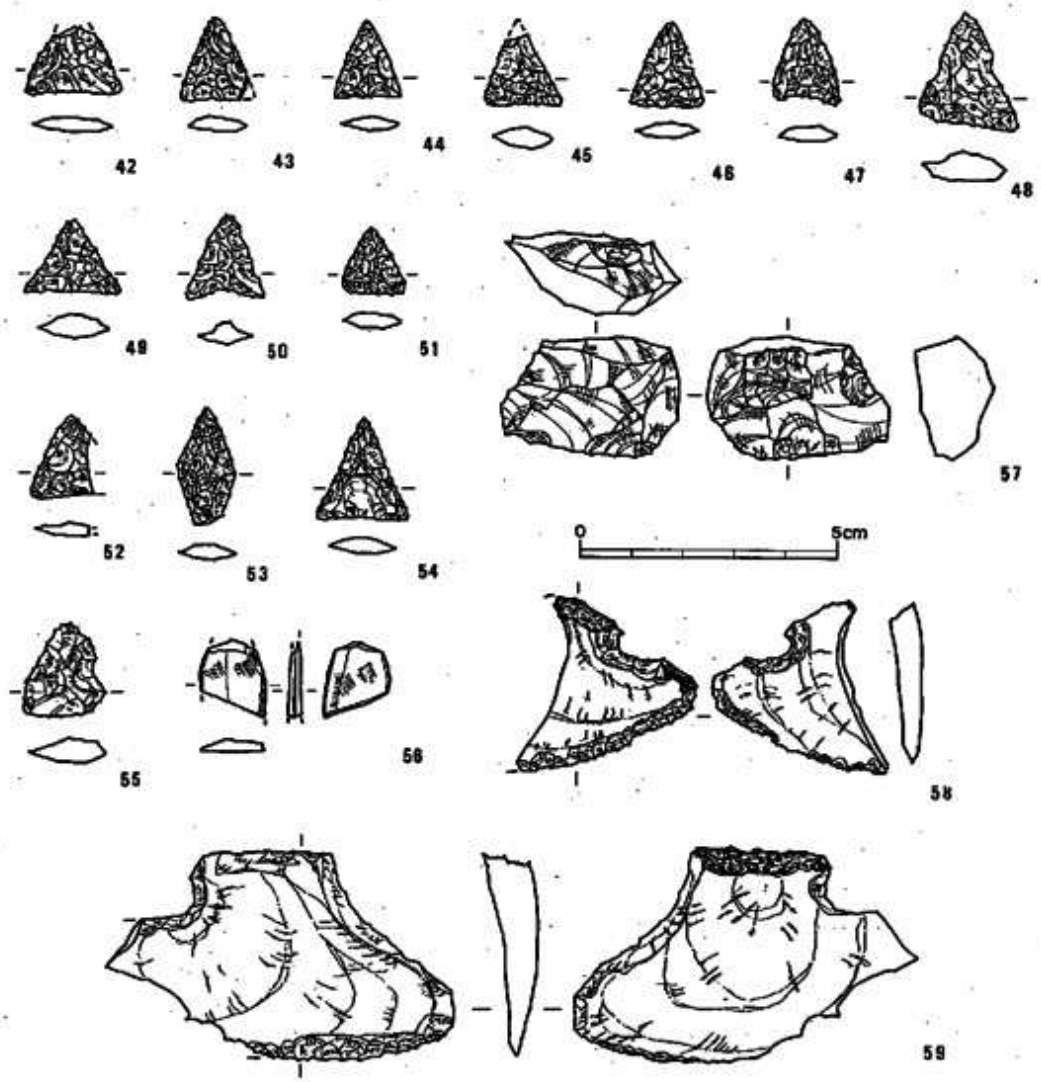
72にはその両面に刃部に平行する稜が各々２本明瞭に作出されており、石戈と考えられる。

本遺跡ではこの他に多量の剥片や石屑が出土しているが、腰岳産黒曜石に関しては石鏃の他に小さな剥片と石屑が数点あるだけで、製品もしくはある程度加工された剥片として搬入され

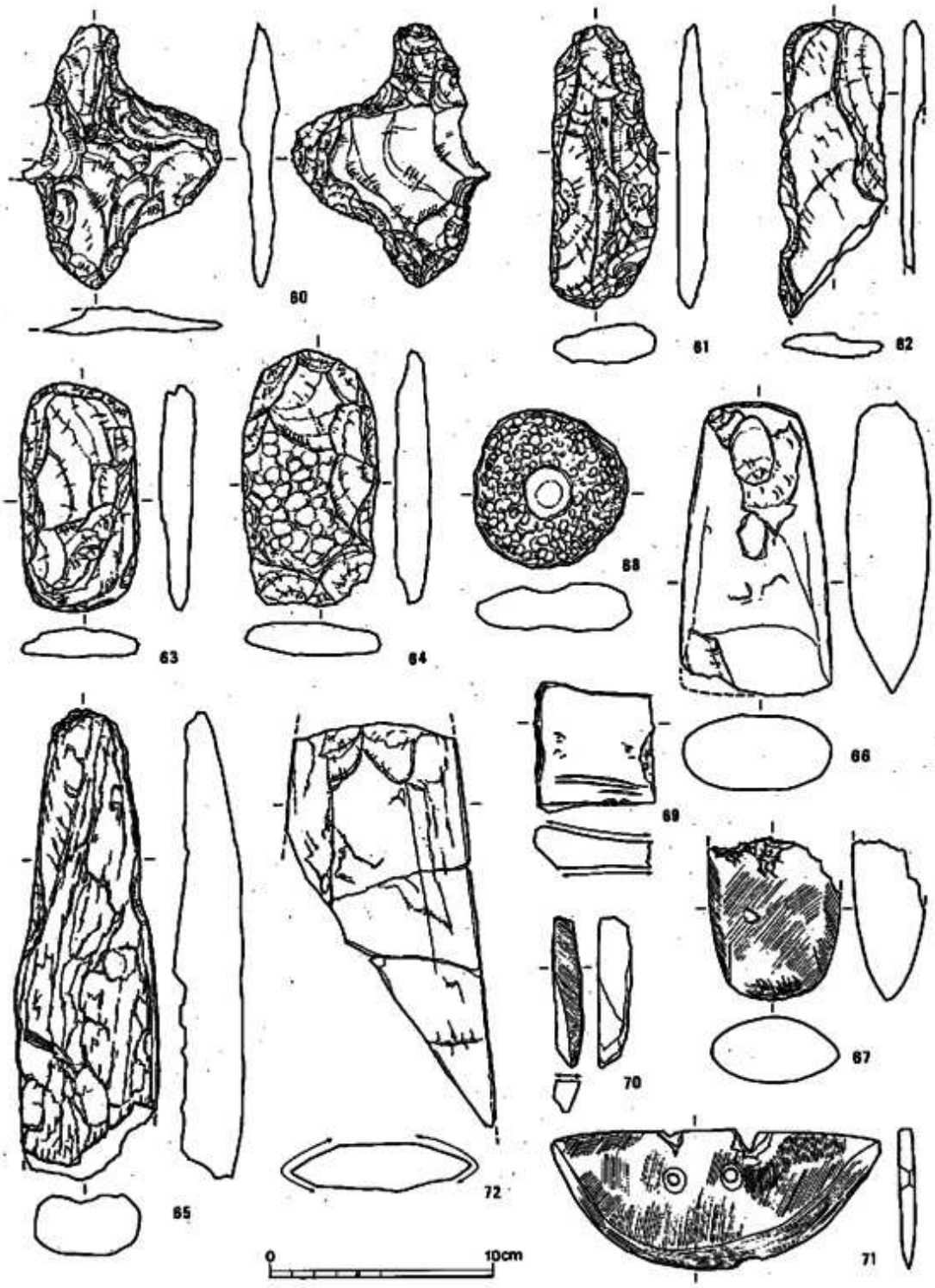


第 51 図　神手遺跡出土石器実測図① (2/3)

た可能性が高い。姫島産黒曜石については57のようにかなり小さな石核が存在することから、本遺跡における石鏃の生産を想定させる。しかし、自然面を残す石核や剥片はほとんど見られないことから、ある程度加工された素材が持ち込まれていたようである。石鏃の製品と同様にサヌカイトの剥片や石屑は圧倒的な量に及ぶが、しっかりとした石核が見当たらないという事実の背景については判断に苦しむ。



第 52 図　神手遺跡出土石器実測図② (2/3)



第 53 図　神手遺跡出土石器実測図③ (1/3)

番号	出土地点	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	6号住居	腰岳産黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.3	
2	6号住居	腰岳産黒曜石	1.7	1.1	0.3	0.5	
3	6号住居	腰岳産黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.4	
4	14号貯蔵穴	腰岳産黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.9	
5	4号おとし穴状遺構	腰岳産黒曜石	2.7	1.7	0.35	1.1	
6	4号おとし穴状遺構	腰岳産黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.3	
7	13号土坑	腰岳産黒曜石	1.8	1.6	0.7	2.1	未製品
8	3号住居	姫島産黒曜石	2.9	1.9	0.55	2.7	未製品
9	4号住居	姫島産黒曜石	1.2	1.1	0.25	0.3	
10	6号住居	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.6	0.4	
11	6号住居	姫島産黒曜石	1.3	1.3	0.35	0.3	
12	7号住居	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.3	
13	2号貯蔵穴	姫島産黒曜石	1.5	1.5	0.2	0.5	
14	3号貯蔵穴	姫島産黒曜石	1.3	1.5	0.3	0.3	
15	5号貯蔵穴	姫島産黒曜石	1.4	1.6	0.4	0.5	
16	11号貯蔵穴・上層	姫島産黒曜石	1.8	1.4	0.6	0.4	
17	11号貯蔵穴・上層	姫島産黒曜石	2.7	1.7	0.8	3.2	未製品
18	12号貯蔵穴	姫島産黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.4	
19	12号貯蔵穴	姫島産黒曜石	1.7	1.8	0.6	1.6	未製品
20	18号貯蔵穴	姫島産黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.7	
21	6号土坑	姫島産黒曜石	1.2	1.3	0.2	0.5	
22	4号溝	姫島産黒曜石	1.9	1.8	0.35	0.8	
23	4号住居	サヌカイト	2.2	1.3	0.3	0.7	
24	5号住居	サヌカイト	1.3	1.7	0.25	0.4	未製品
25	6号住居	サヌカイト	3.1	1.7	0.5	1.8	未製品
26	6号住居	サヌカイト	1.5	1.6	0.2	0.4	
27	6号住居	サヌカイト	1.7	0.9	0.25	0.4	
28	6号住居	サヌカイト	3.6	1.6	0.35	2.3	
29	7号住居	サヌカイト	1.9	1.5	0.55	1.2	
30	2号貯蔵穴	サヌカイト	1.9	1.6	0.35	0.7	
31	2号貯蔵穴	サヌカイト	1.8	1.5	0.3	0.7	
32	3号貯蔵穴・下層	サヌカイト	1.4	1.5	0.4	0.5	
33	3号貯蔵穴・下層	サヌカイト	1.7	1.6	0.35	0.9	
34	8号貯蔵穴・下層	サヌカイト	1.6	1.1	0.3	0.5	
35	8号貯蔵穴・下層	サヌカイト	1.9	1.5	0.3	0.6	
36	8号貯蔵穴・下層	サヌカイト	1.9	1.6	0.4	1.1	未製品
37	8号貯蔵穴・下層	サヌカイト	1.9	1.5	0.55	1.2	未製品
38	8号貯蔵穴・下層	サヌカイト	1.5	1.5	0.3	0.5	
39	8号貯蔵穴・下層	サヌカイト	1.5	1.3	0.4	0.5	
40	11号貯蔵穴	サヌカイト	1.7	1.6	0.35	0.5	

第3表　石器観察表

番号	出土地点	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
41	14号貯蔵穴	サヌカイト	1.8	1.6	0.35	0.6	
42	14号貯蔵穴	サヌカイト	1.3	1.9	0.3	0.6	
43	30号土坑	サヌカイト	1.6	1.4	0.25	0.4	
44	18号貯蔵穴	サヌカイト	1.5	2.5	0.3	0.3	
45	4号土壙墓	サヌカイト	1.4	1.6	0.4	0.5	
46	4号土壙墓	サヌカイト	1.6	1.4	0.3	0.5	
47	13号土坑	サヌカイト	1.8	1.3	0.3	0.5	
48	13号土坑	サヌカイト	2.3	1.9	0.5	1.6	未製品
49	13号土坑	サヌカイト	1.4	1.9	0.45	0.7	未製品
50	4号溝	サヌカイト	1.6	1.7	0.5	0.6	未製品
51	4号溝	サヌカイト	1.3	1.3	0.3	0.4	
52	4号溝	サヌカイト	1.6	1.4	0.25	0.5	
53	包含層	サヌカイト	2.2	1.2	2.5	0.4	
54	包含層	サヌカイト	2.1	1.8	0.25	0.7	
55	包含層	サヌカイト	1.8	1.6	0.5	1.1	未製品
56	5号住居	粘板岩	1.5	1.3	0.2	0.6	磨製石鏃
57	9号住居	姫島産黒曜石	2.3	3.4	1.6	12.4	
58	包含層	サヌカイト	3.5	3.4	0.5	3.7	
59	12号貯蔵穴	サヌカイト	6.6	4.1	0.9	18.7	
60	7号貯蔵穴・中層	サヌカイト	11.8	8.8	1.4	78.8	十字形石器
61	9号住居	安山岩	12.6	4.5	1.6	123	
62	11号土坑	結晶片岩	13.2	4.8	1.1	78.7	
63	9号貯蔵穴	結晶片岩	10.3	5.2	1.3	78.1	
64	1号おとし穴状遺構	結晶片岩	11.4	6.1	1.4	169	
65	21号土坑	結晶片岩?	21.1	6.4	2.6	476	石質は滑石?
66	7号貯蔵穴・床面	砂岩	13.1	6.8	3.4	454	片刃石斧
67	4号溝	蛇紋岩	7.3	5.9	3.1	172	使用痕あり
68	12号貯蔵穴	凝灰岩	7.1	6.9	2.2	110	窪み石
69	14号貯蔵穴	頁岩	5.8	5.3	1.9	82.2	砥石
70	22号土坑	頁岩	6.7	1.2	1.4	19.6	砥石
71	7号貯蔵穴	蛇紋岩?	6.3	14.6	0.7	81.1	
72	13号土坑・下層	安山岩?	15.4	8.2	2.1	329	石戈?

第4表　石器観察表

第3章　おわりに

第3章　おわりに

以上が、一般国道10号線椎田バイパス建設に伴い、事前発掘調査された「神手遺跡」の内容である。

先述のとおり、この遺跡は、弥生時代前期後半～中期前半の貯蔵穴群、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の竪穴住居跡及び墓地、さらには、古墳時代後期の古墳を主体とする複合遺跡であることがわかった。

以下、調査で判明した事柄を箇条書きにしてまとめてみたい。

1．検出した遺構は、竪穴住居跡11軒、貯蔵穴19基、古墳１基、集石墓１基、石棺墓１基、石蓋土壙墓１基、土壙墓10基、土坑23基、おとし穴状遺構５基、溝状遺構18条、ピット等があり、集落・墓地として、その内容はバラエティに富んでいる。

2．出土した遺物は、弥生土器、須恵器等の土器の他に、石鏃、打製石斧、磨製石斧、十字形石器、石匙、石戈等の石製品、紡錘車、勾玉、土錘等の土製品、その他鉄製品があった。

3．弥生時代の貯蔵穴は、平面プランが円形で、断面形が袋状を呈する。それらは、周囲の卵形状にめぐるＶ字溝により囲繞される。こうした状況は、豊前地域では、同じ京都平野の苅田町葛川遺跡でみられる。また、神手遺跡と同じ祓川の河岸段丘上に位置するカワラケ田遺跡では、中期初頭の平面プランが長方形を呈する貯蔵穴６基が検出されている。

なお、神手遺跡では、同時期の住居跡は検出されていない。

4．弥生時代の住居跡は、削平が著しく、その構造の具体相が把握しにくいが、おおむね平面プランが方形で、ベッド状遺構を有している。

5．弥生時代後期から終末期にかけての墓地は、石棺墓１基、石蓋土壙墓１基、土壙墓10基があるが、これらのうち、３号住居跡周辺に位置する石棺墓、石蓋土壙墓、８・９土壙墓はその切り合い関係が注目できる。

３号住居跡からは、終末期の土器が出土しているが、この住居跡を切って、石蓋土壙墓、９号土壙墓がある。また、８号土壙墓は石棺墓を切っている。

８・９号土壙墓は、その検出状況から割竹形木棺になると推測されることから、近接する徳永川の上遺跡での遺構のあり方（①墳墓群が、終末期の竪穴住居跡を埋め戻した後に、分布地域を重複させながら、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて営造されること、②墳墓群中、

割竹木棺墓は、最後期に位置づけられること）などを勘案すれば、これらの遺構は、3号住居跡→石棺墓・石蓋土壙墓→8・9号土壙墓という短期間での変遷が看取できる。

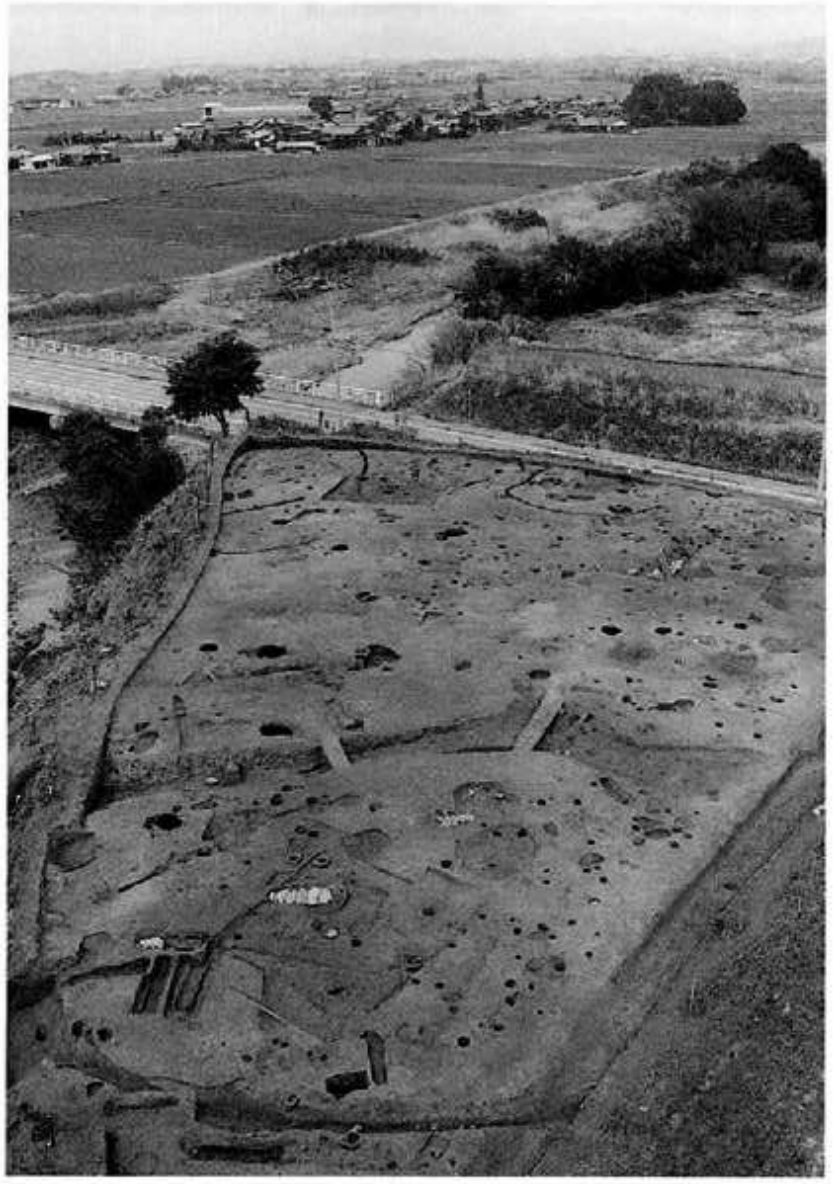
6．古墳は、根石さえ抜かれているため、その構造を把握し得ないが、抜きとり穴の位置から、祓川に向け開口した、両袖式の横穴式石室になると思われる。神手遺跡では、削平が著しく1基の古墳しか検出できなかったが、東側の深江工作所内にあった吹ケ上古墳群や徳永川の上古墳群と共に、祓川河岸段丘上の群集墳として位置づけられよう。

7．おとし穴状遺構は、5基検出したが、そこからの遺物の出土はなく、その帰属時期は不明であり、その分布も規則性を持たず、散在的であるため、おとし穴としての機能を果たしていたかは判断し難い。

8．石鏃では、大分県姫島産黒曜石と佐賀県腰岳産黒曜石が出土しており、当時の地域間交流を探る上で貴重な資料といえよう。

図　版

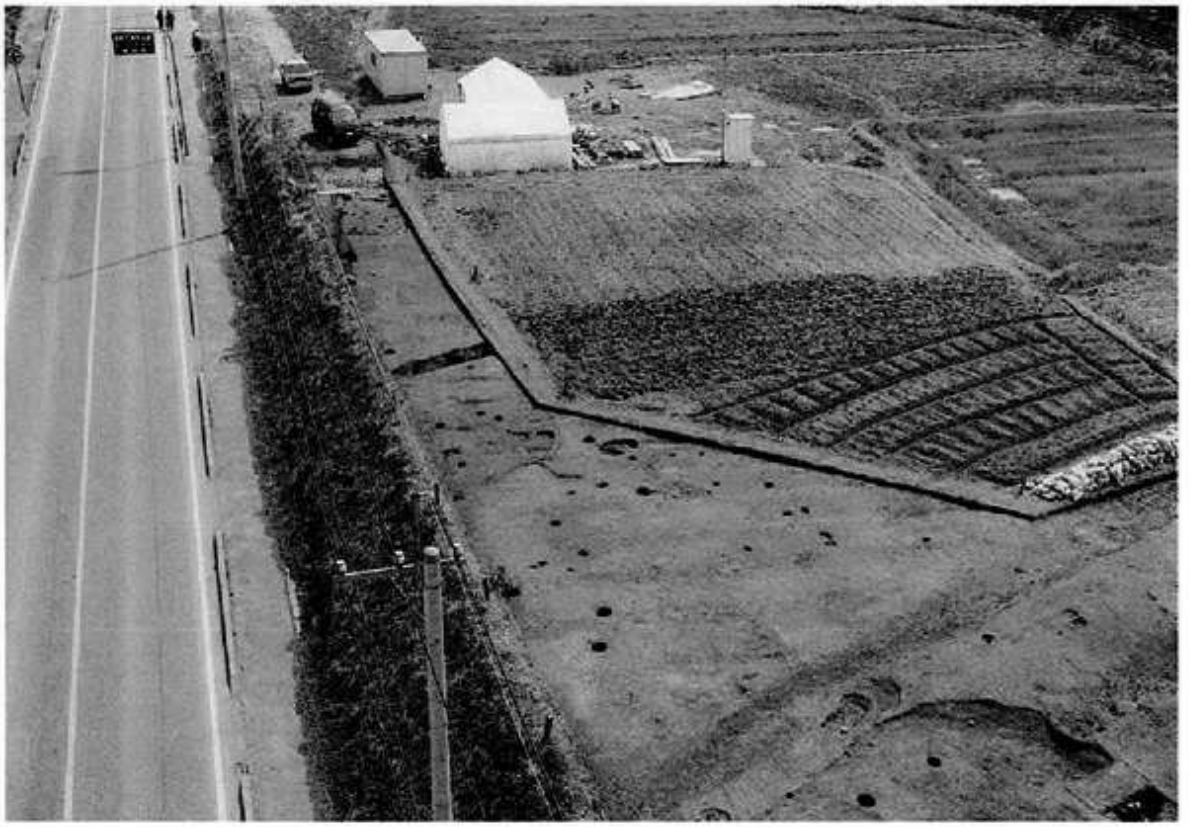
1）神手遺跡遠景（哲見遺跡から周防灘をみる）



2）神手遺跡全景（南から）

1）神手遺跡近景（南から）

2）神手遺跡近景（北から）

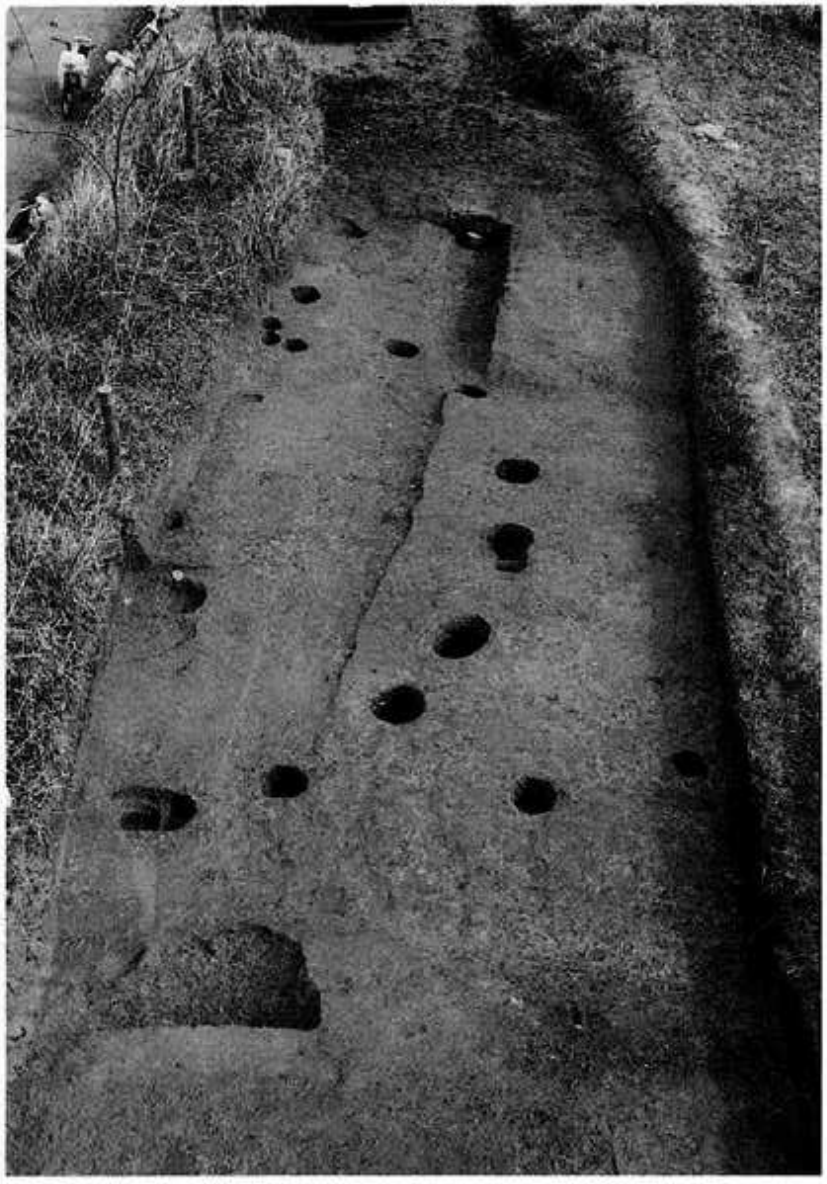


1）神手遺跡近景（北西から）

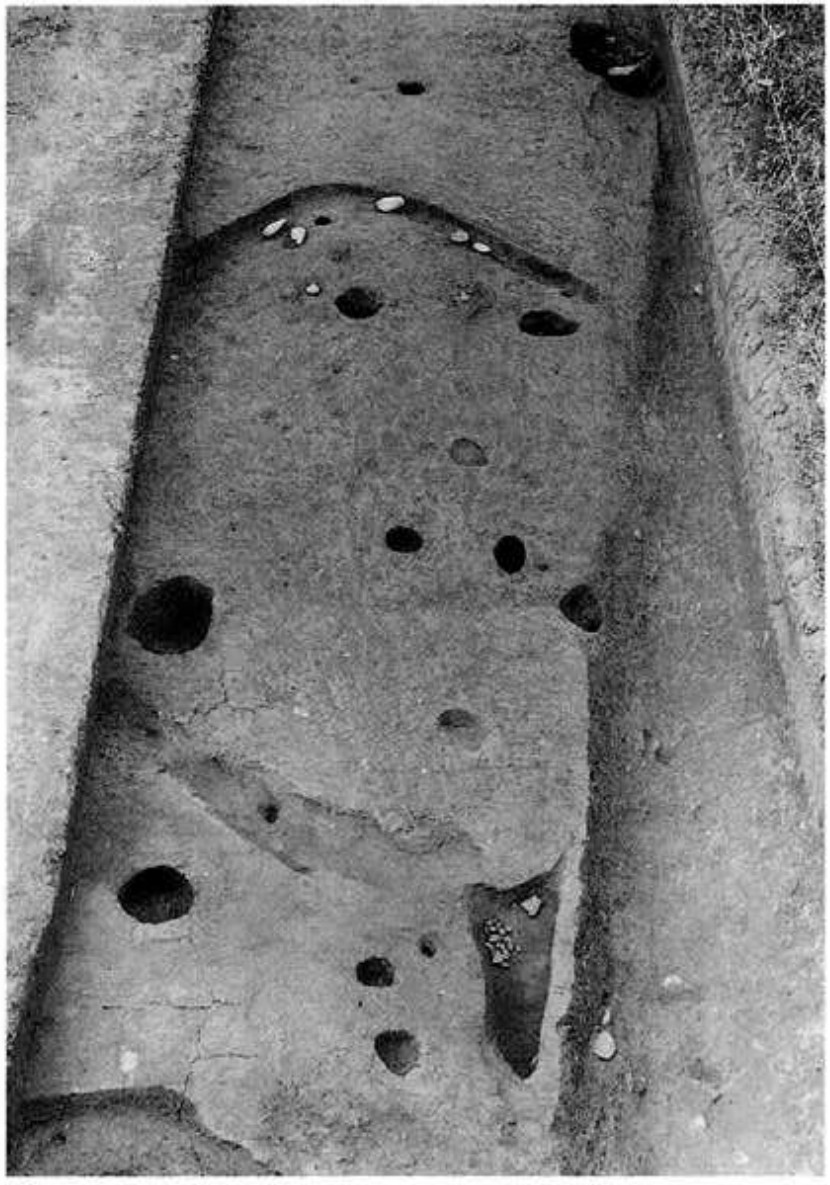
2）神手遺跡近景（南西から）

1）神手遺跡近景（北東から）

2）神手遺跡近景（北西から）

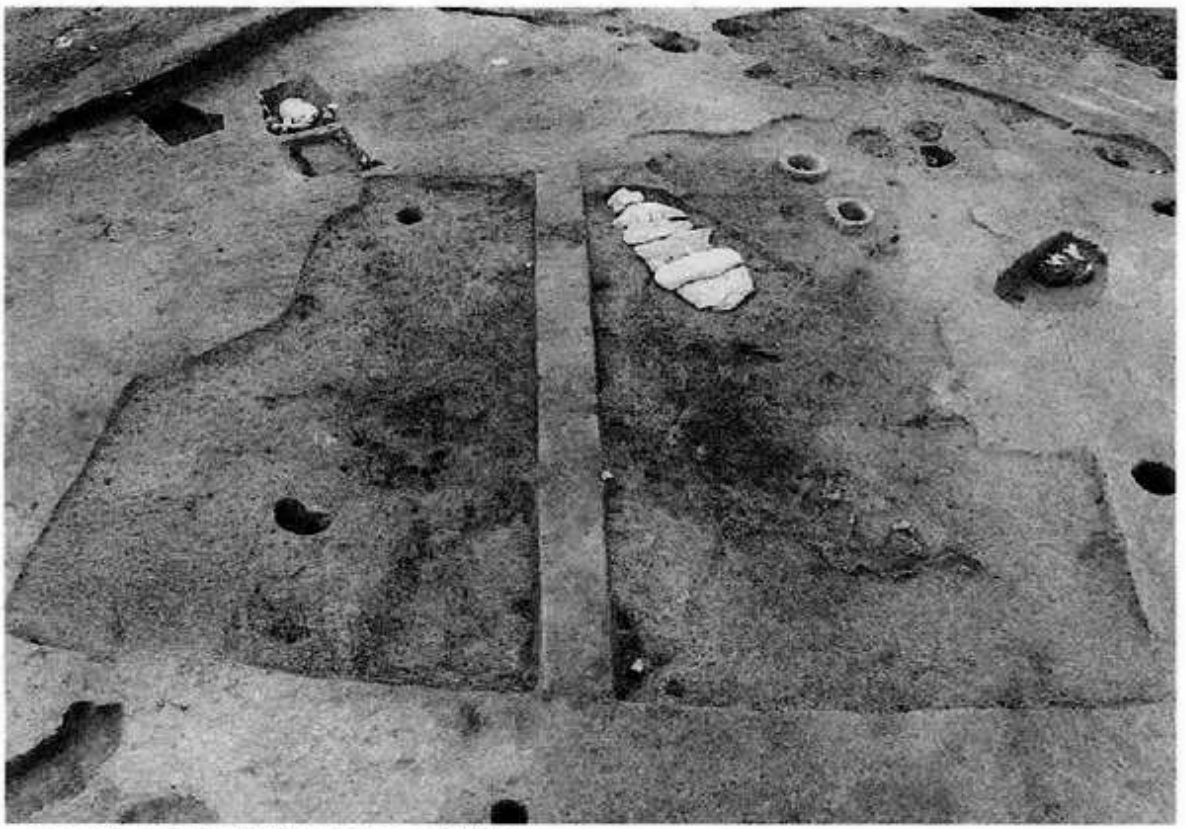


1）1号竪穴住居跡（北西から）



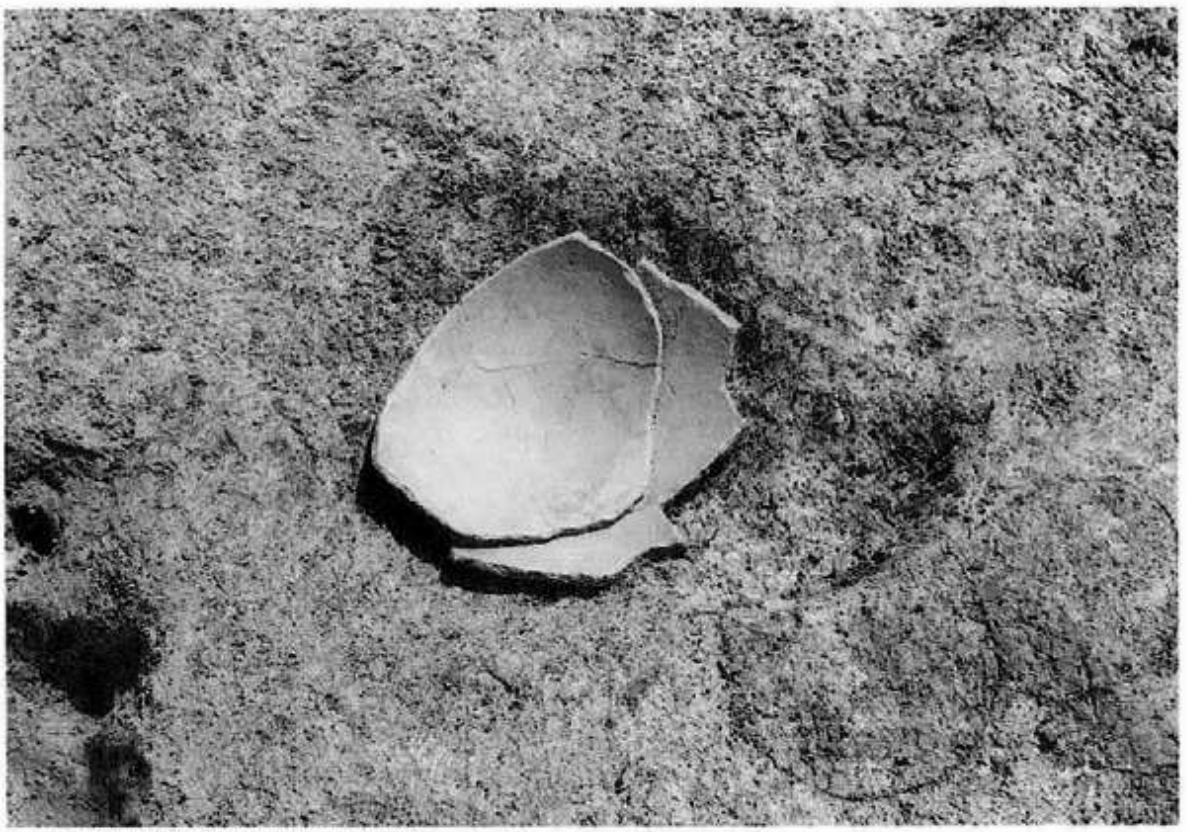
2）2号竪穴住居跡（北西から）

1）3号、11号竪穴住居跡遠景（南から、完掘前）



2）3号、11号竪穴住居跡（南から、完掘前）

1）3号、11号竪穴住居跡（南から、完掘後）

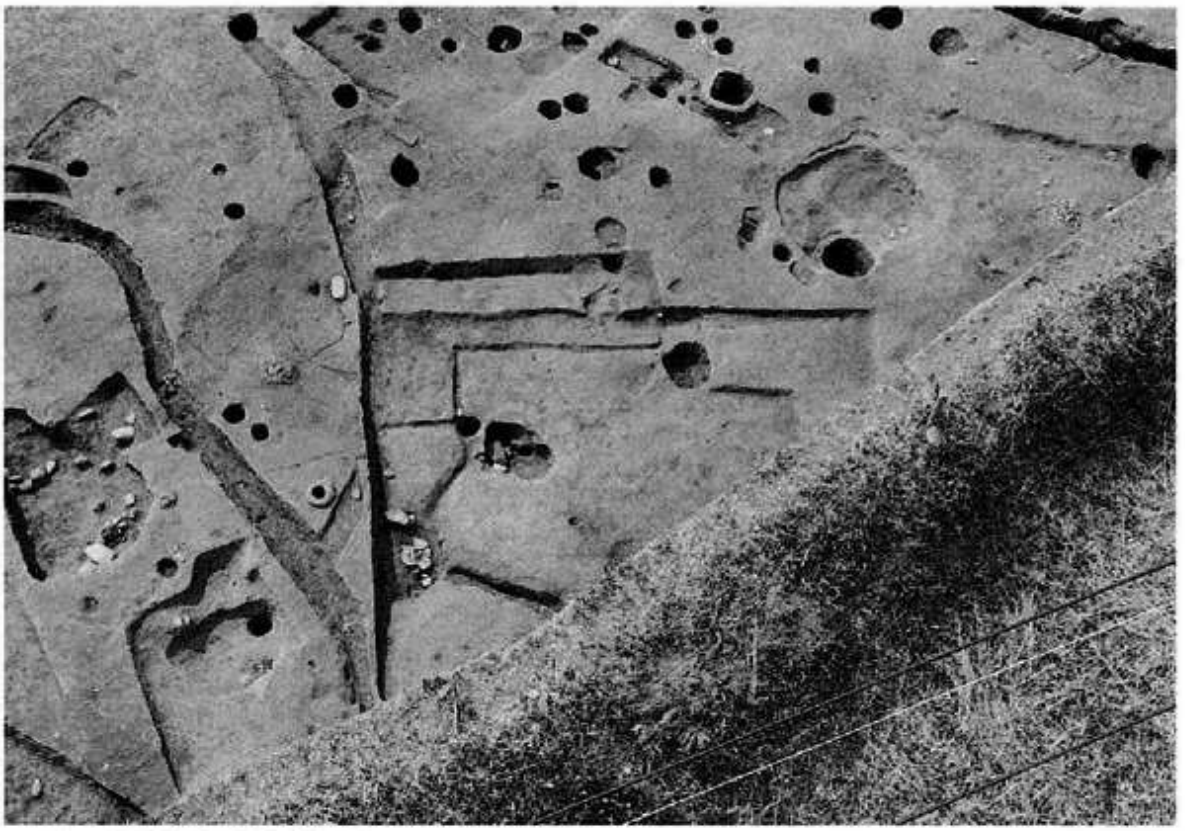


2）3号竪穴住居跡出土土器検出状況

1）4号竪穴住居跡（北東から）

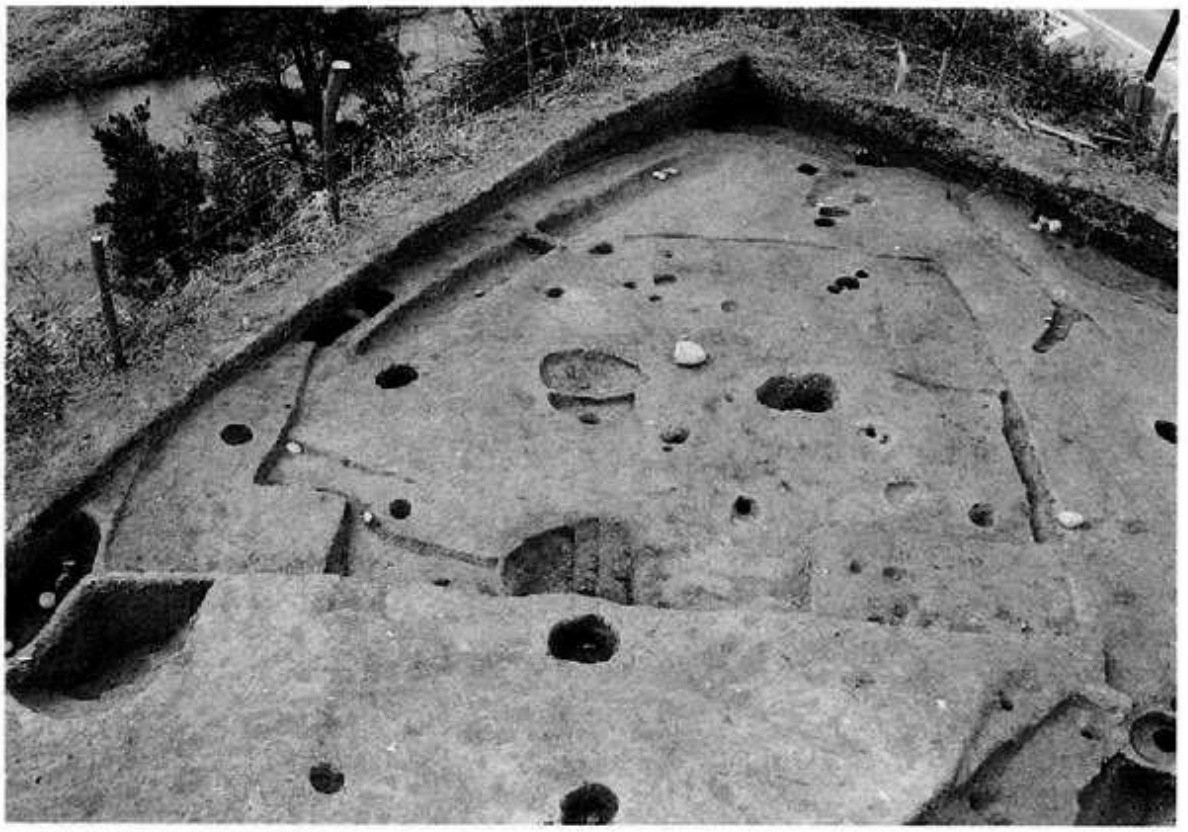
2）4号竪穴住居跡（南から）

1）5号竪穴住居跡（南東から）



2）5号竪穴住居跡（真上から）

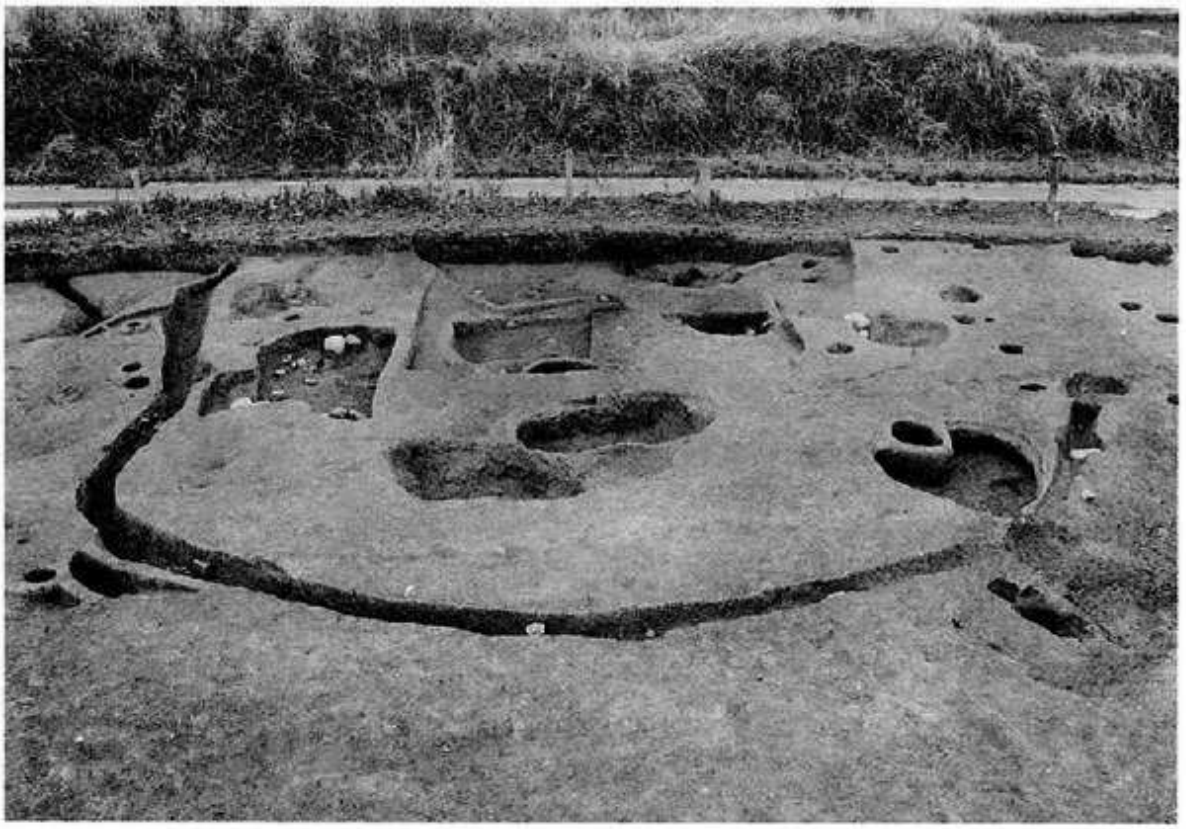
1）6号竪穴住居跡遠景（北東から）



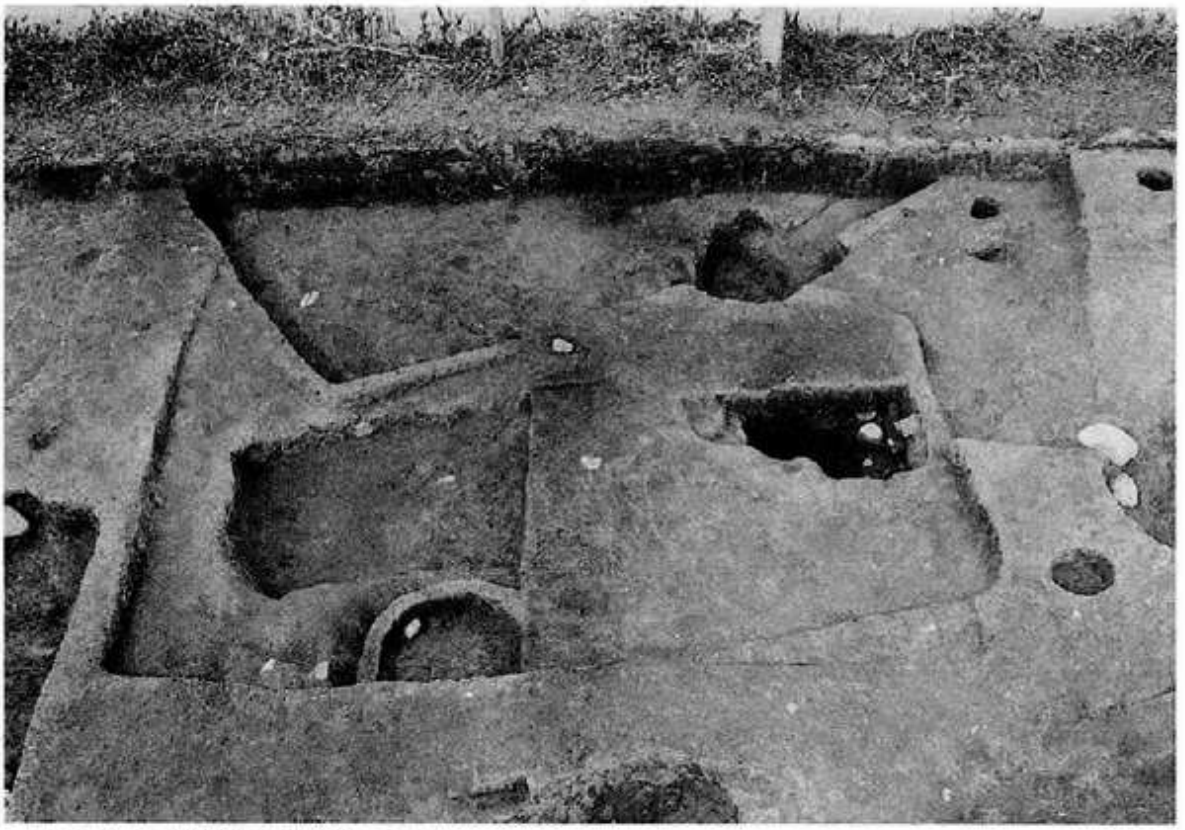
2）6号竪穴住居跡（南から）

1）7号～10号竪穴住居跡遠景（北から）

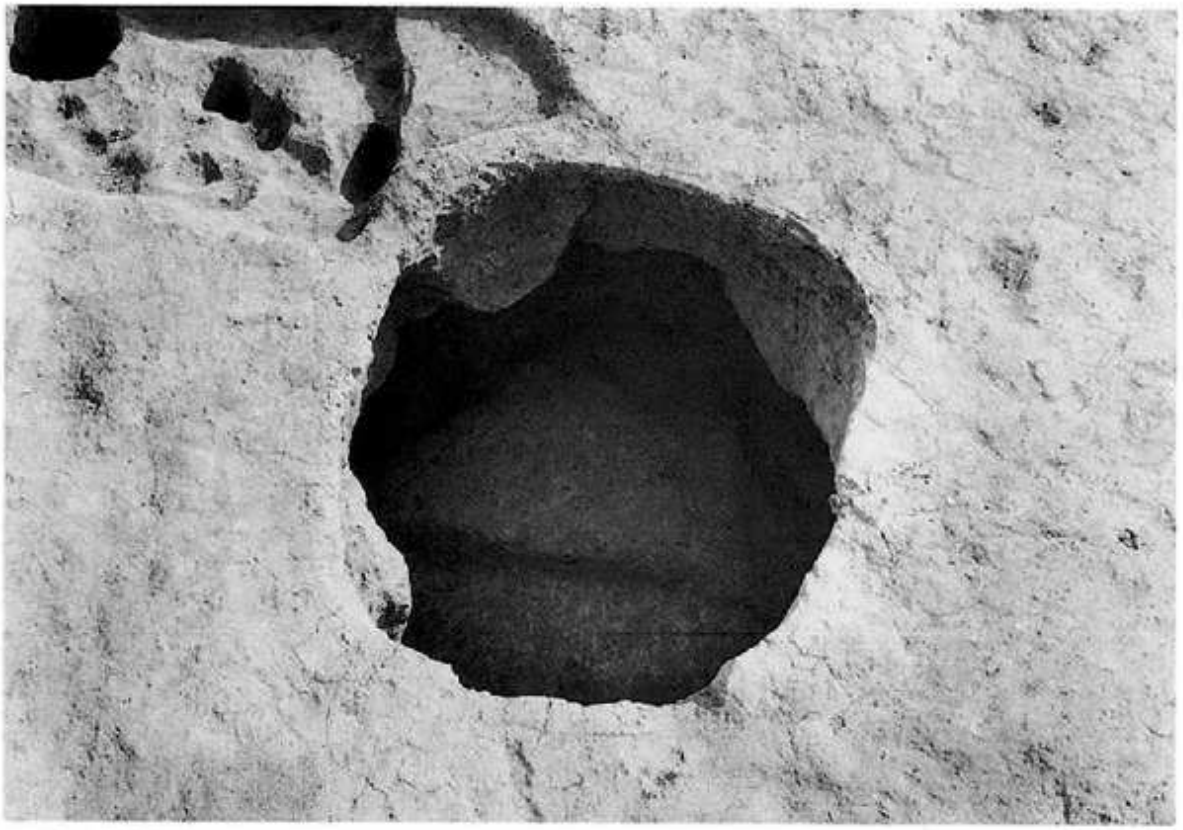
2）7号～10号竪穴住居跡（真上から）



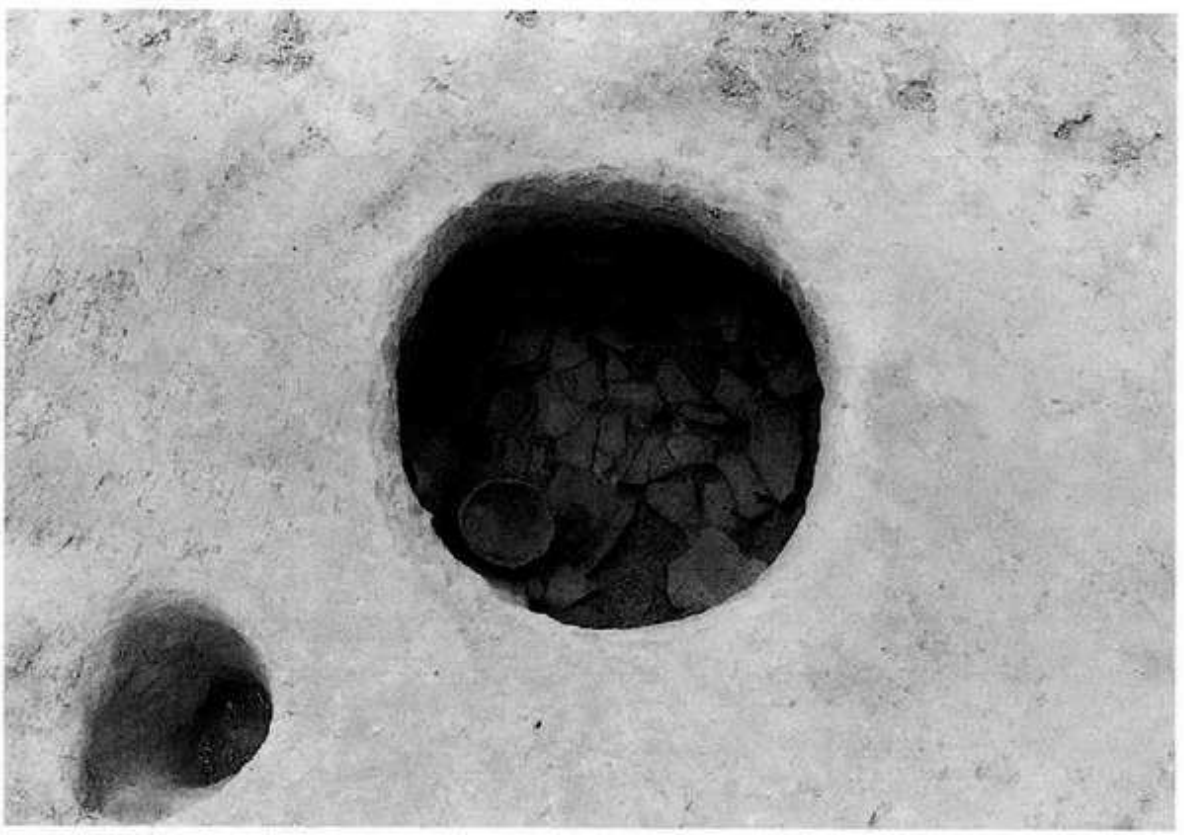
1）7号竪穴住居跡周溝（南から）



2）7号～10号竪穴住居跡近景（南から）

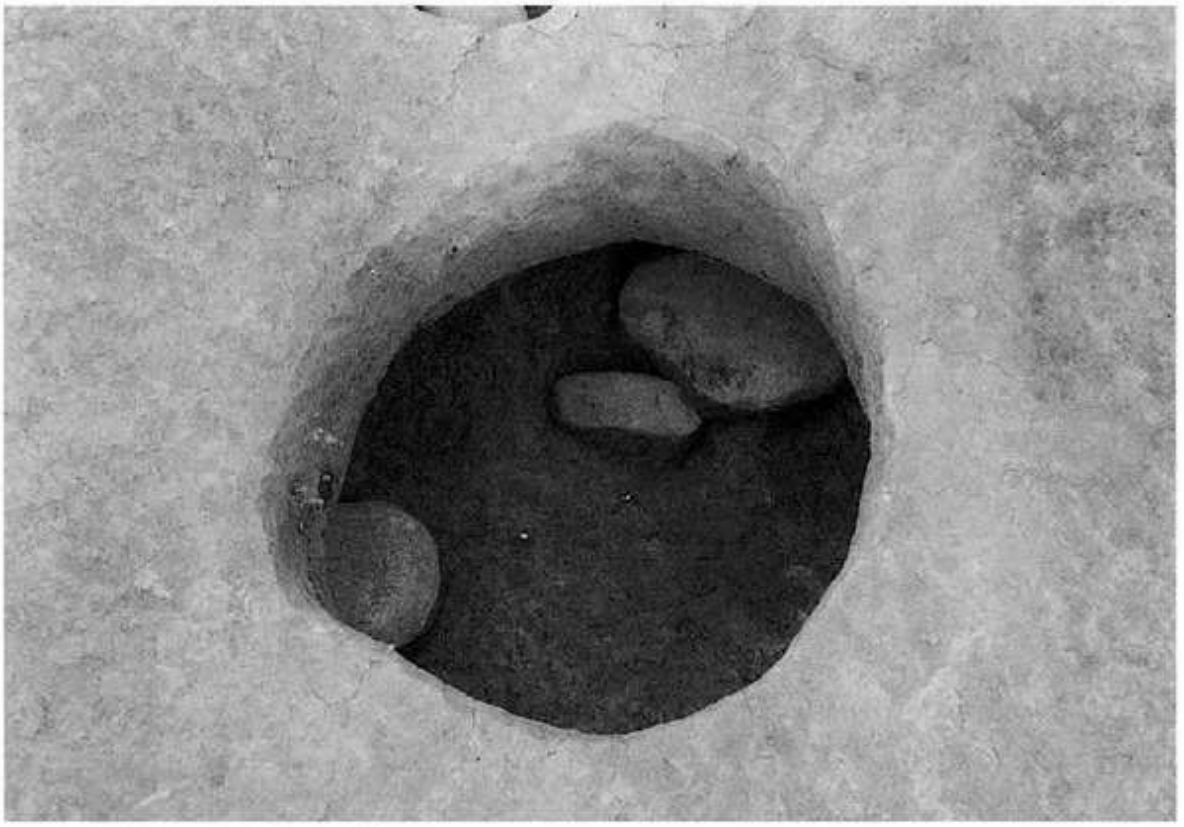


1）1号貯蔵穴



2）2号貯蔵穴

1）3号貯蔵穴（土器取り上げ前）



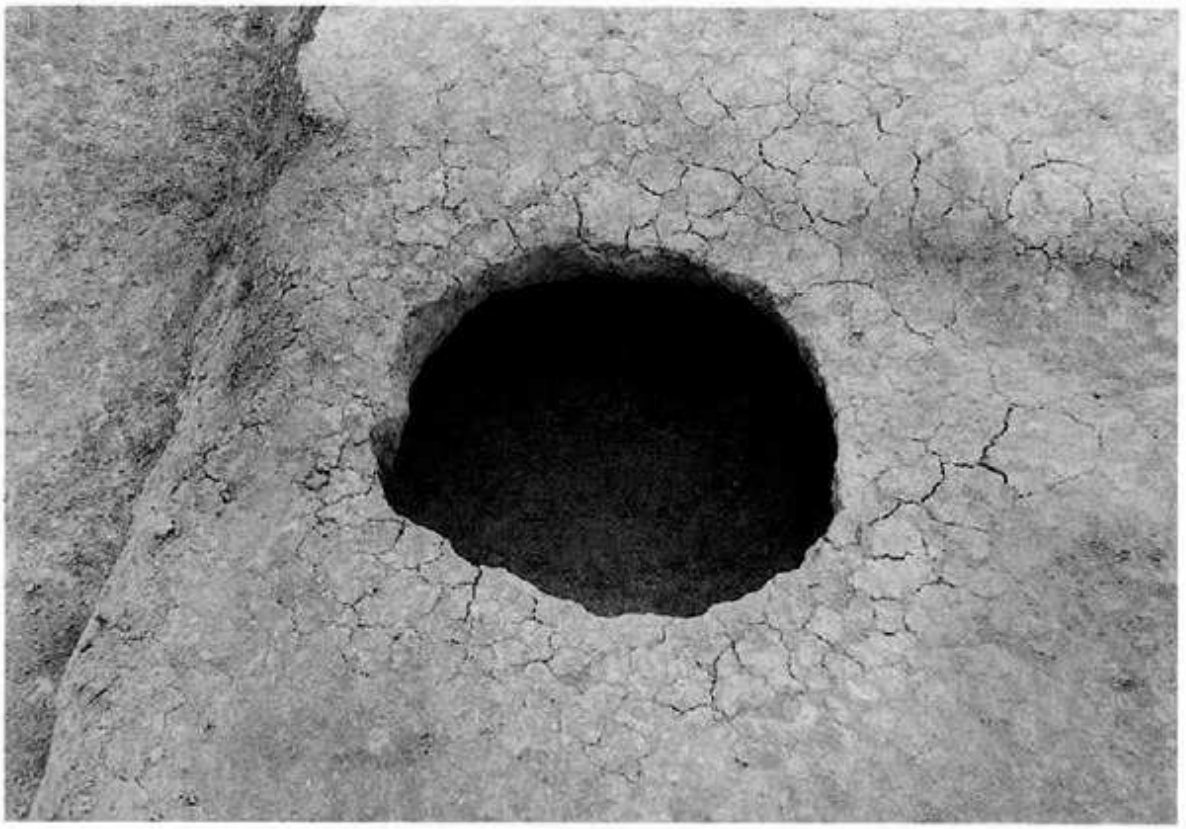
2）3号貯蔵穴（土器取り上げ後）

1）4号貯蔵穴

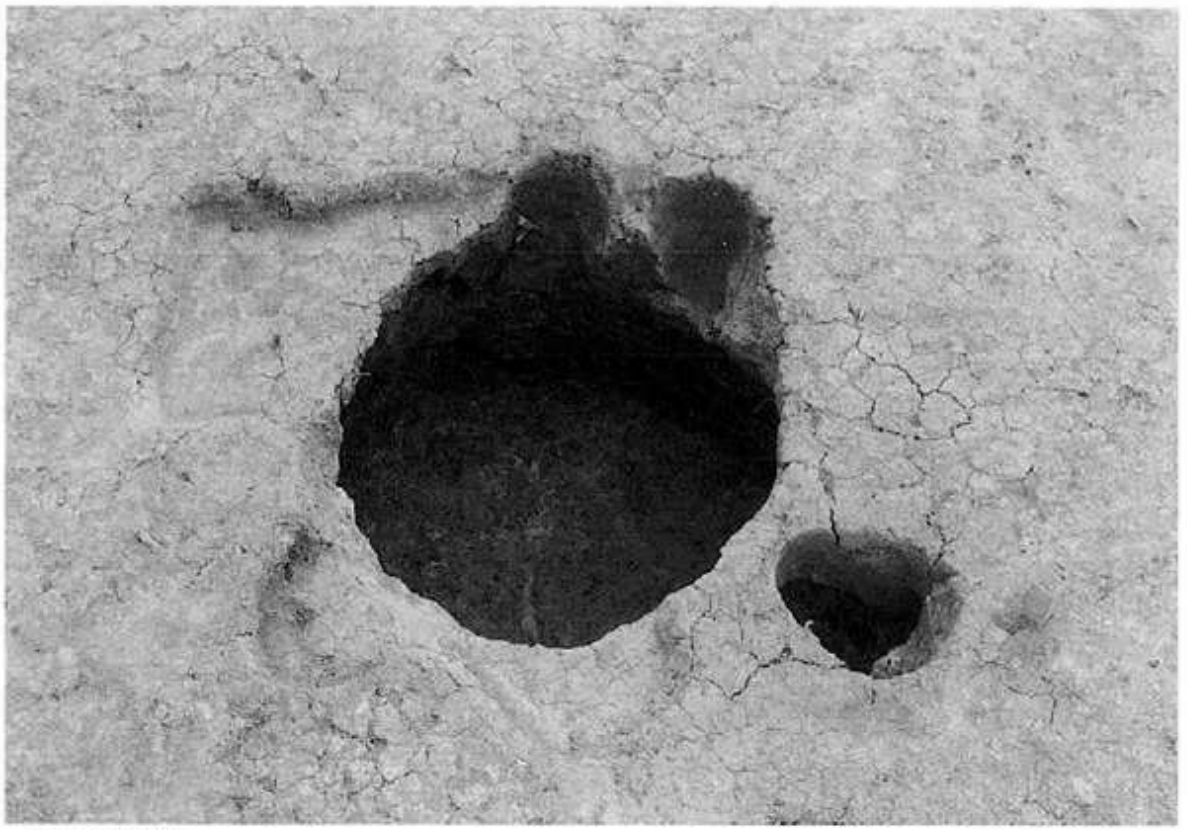
2）6号貯蔵穴

1）5号貯蔵穴（土器取り上げ前）

2）5号貯蔵穴（土器取り上げ後）



1）10号貯蔵穴



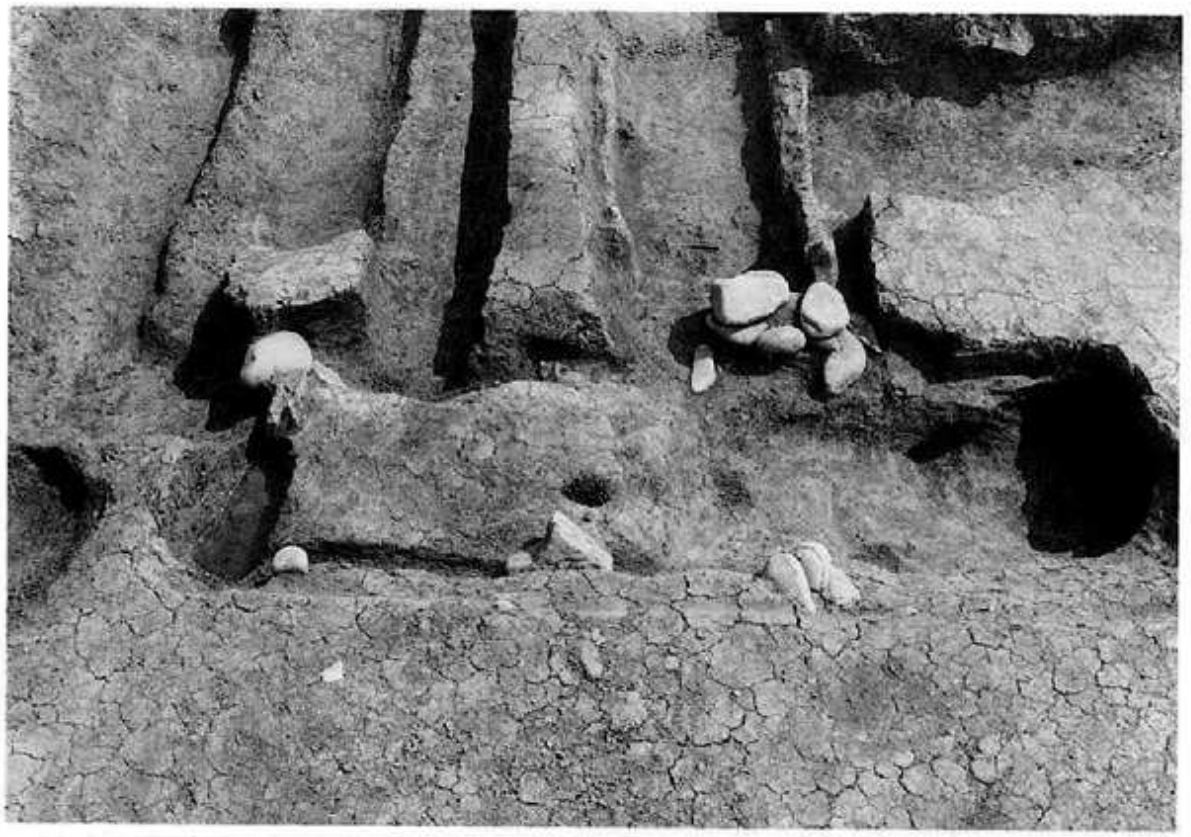
2）12号貯蔵穴

1）1号墳遠景（南東から）

2）1号墳（北西から）

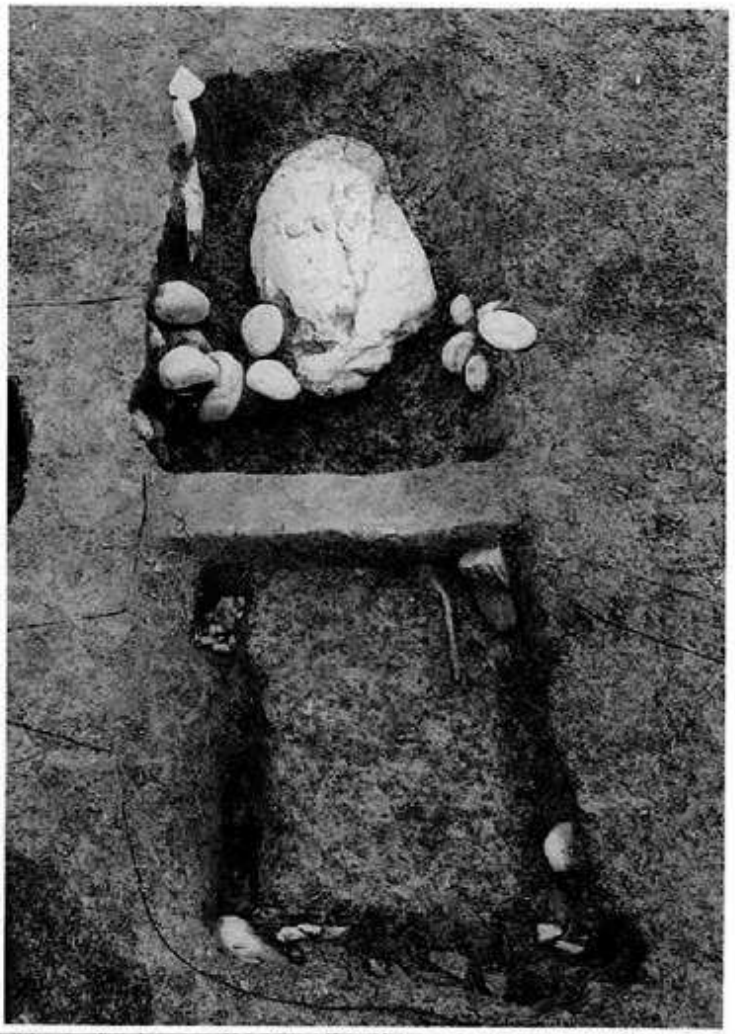
1）1号竪穴墓（西から）

2）1号竪穴墓（東から）



1）1号石棺墓（北から、完掘前）

2）1号石棺墓（北から、完掘後）

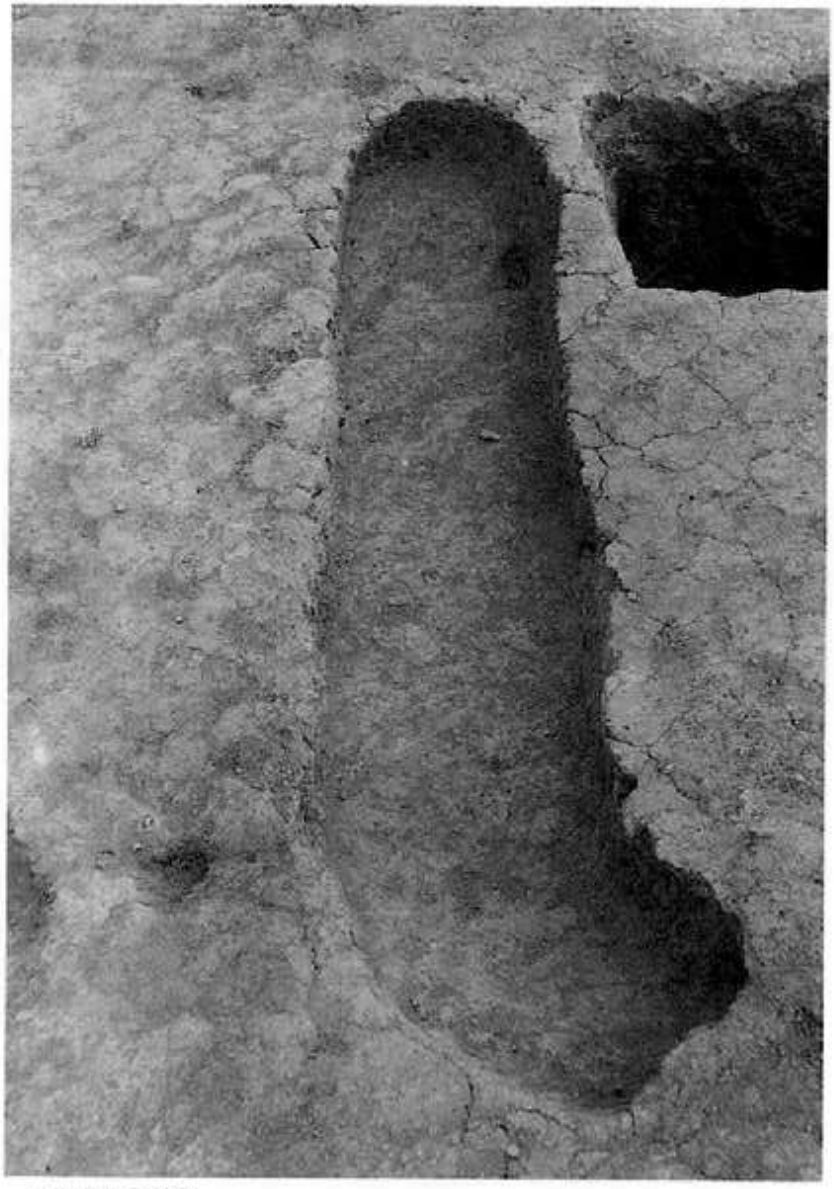


1）1号石棺墓（東から）

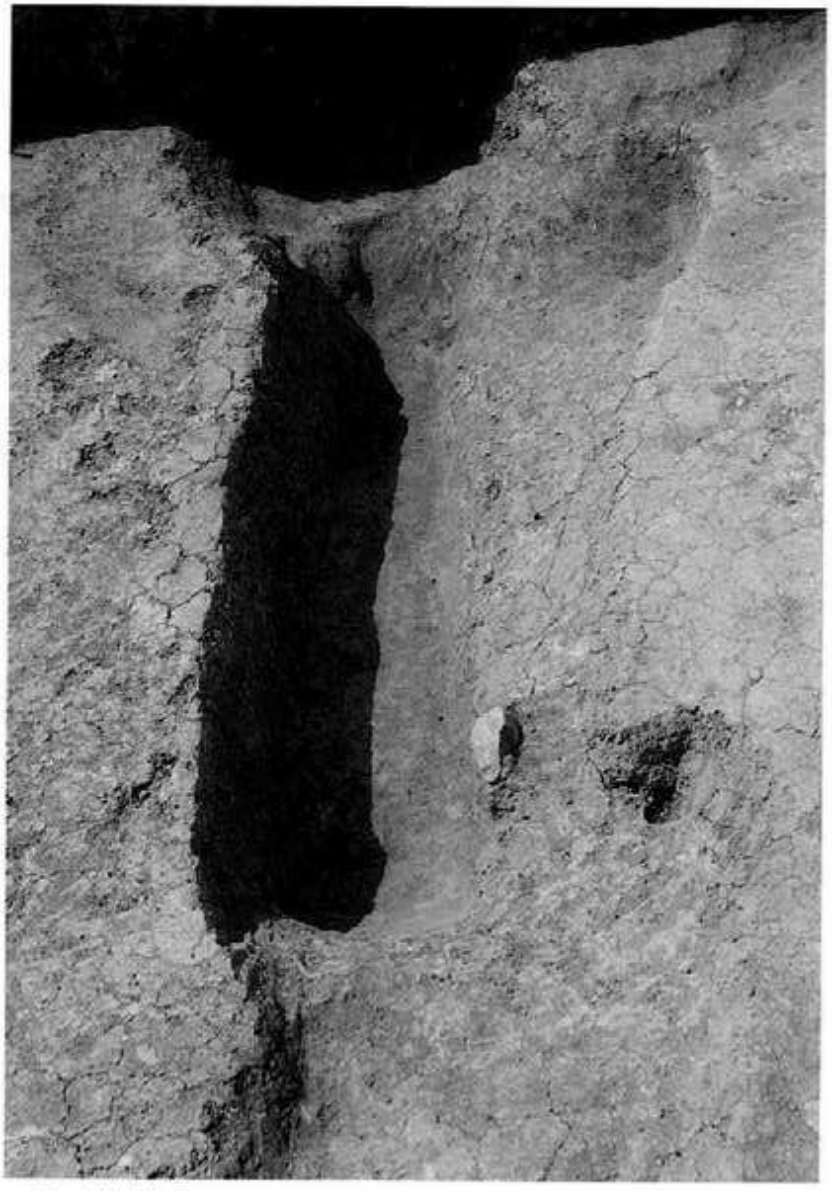
2）1号石棺墓鉄器出土状況

1）1号石蓋土壙墓（西から、石蓋除去前）

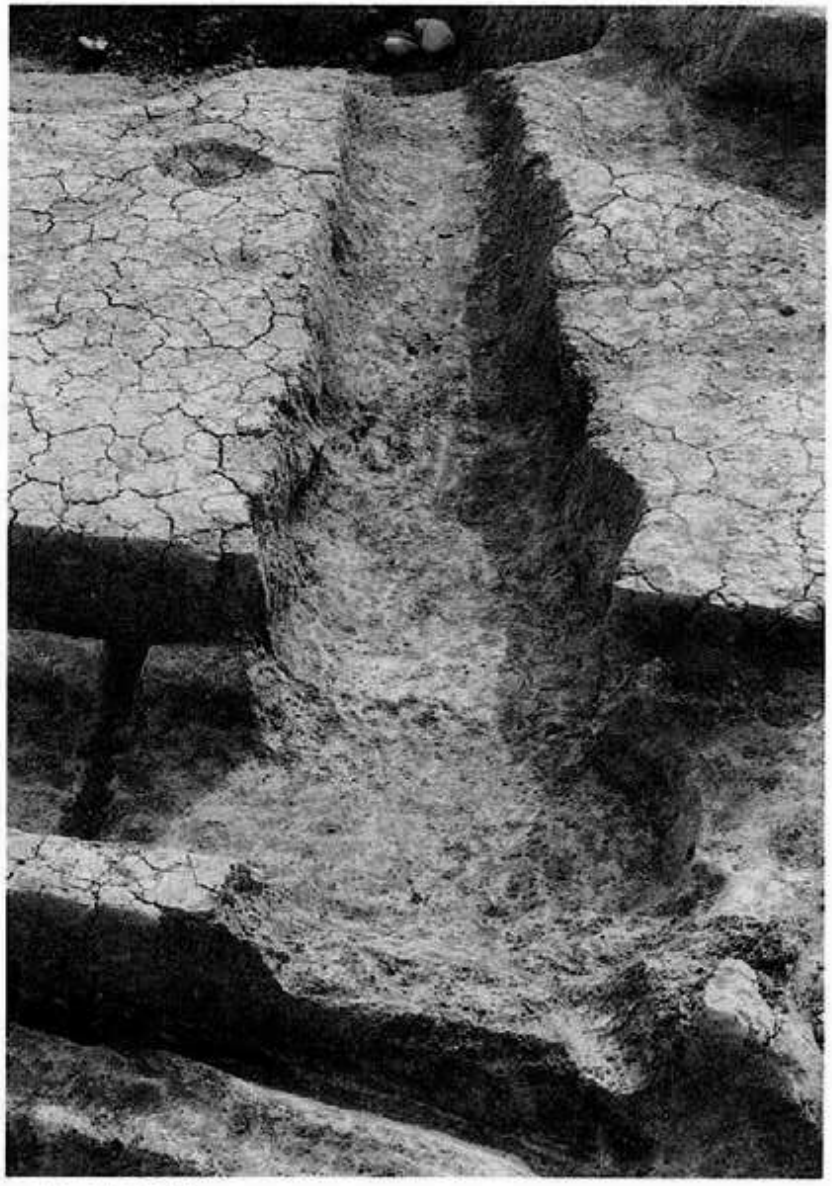
2）1号石蓋土壙墓（西から、石蓋除去後）



1）2号土壙墓



2）3号土壙墓



1）4号土壙墓

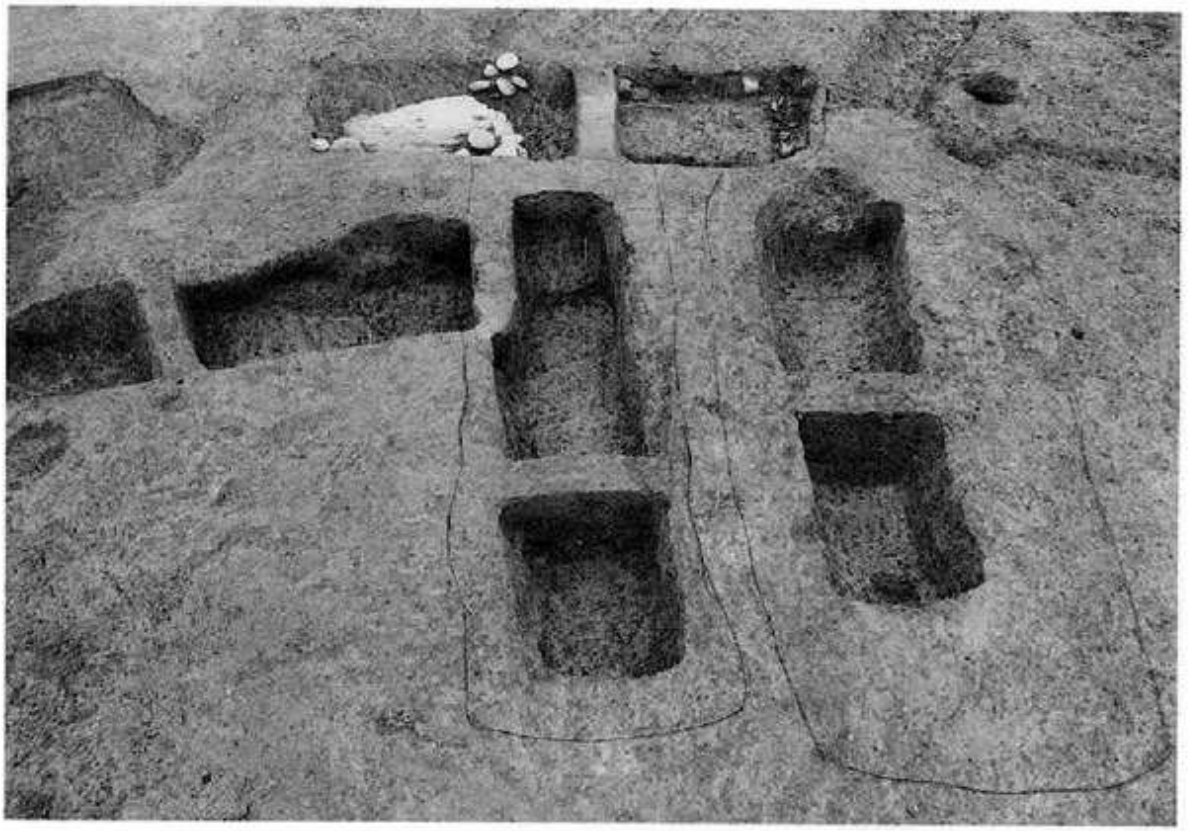
2）5号土壙墓

1）6号土壙墓

2）7号土壙墓

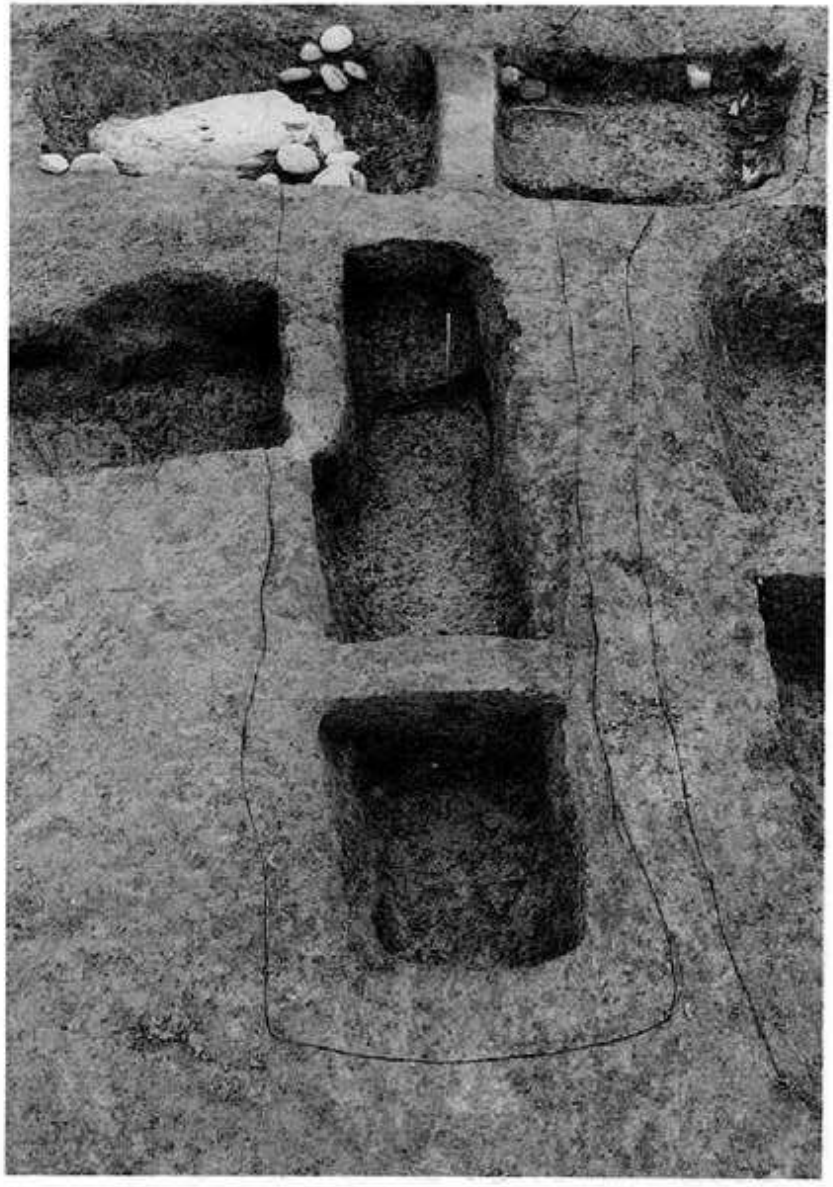
1）8号～9号土壙墓遠景（南から、完掘後）

2）8号～9号土壙墓（南から、完掘後）



1）8号～9号土壙墓（南から、完掘前）

2）8号～9号土壙墓（北から、完掘後）

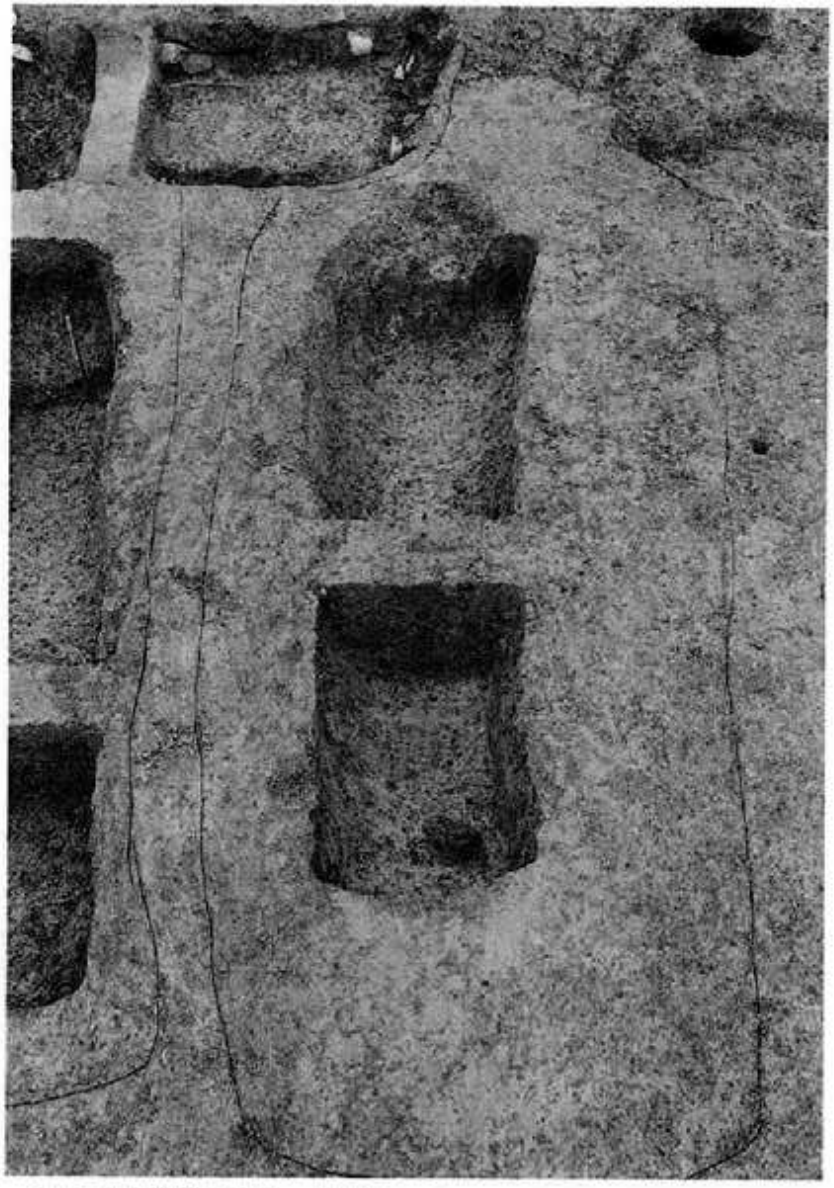


1）8号土壙墓（南から、完掘前）

2）8号土壙墓（北から、完掘後）

1）8号土壙墓鉄器出土状況（南から）

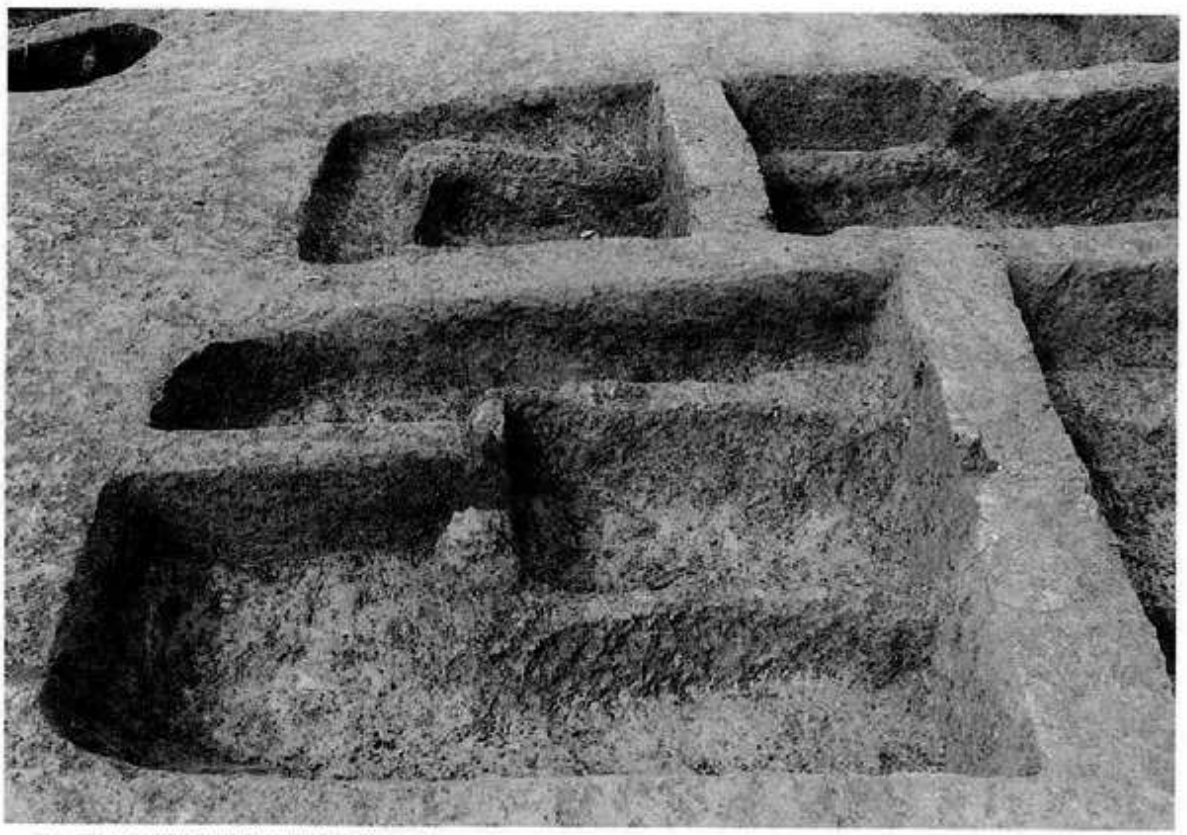
2）8号土壙墓鉄器出土状況



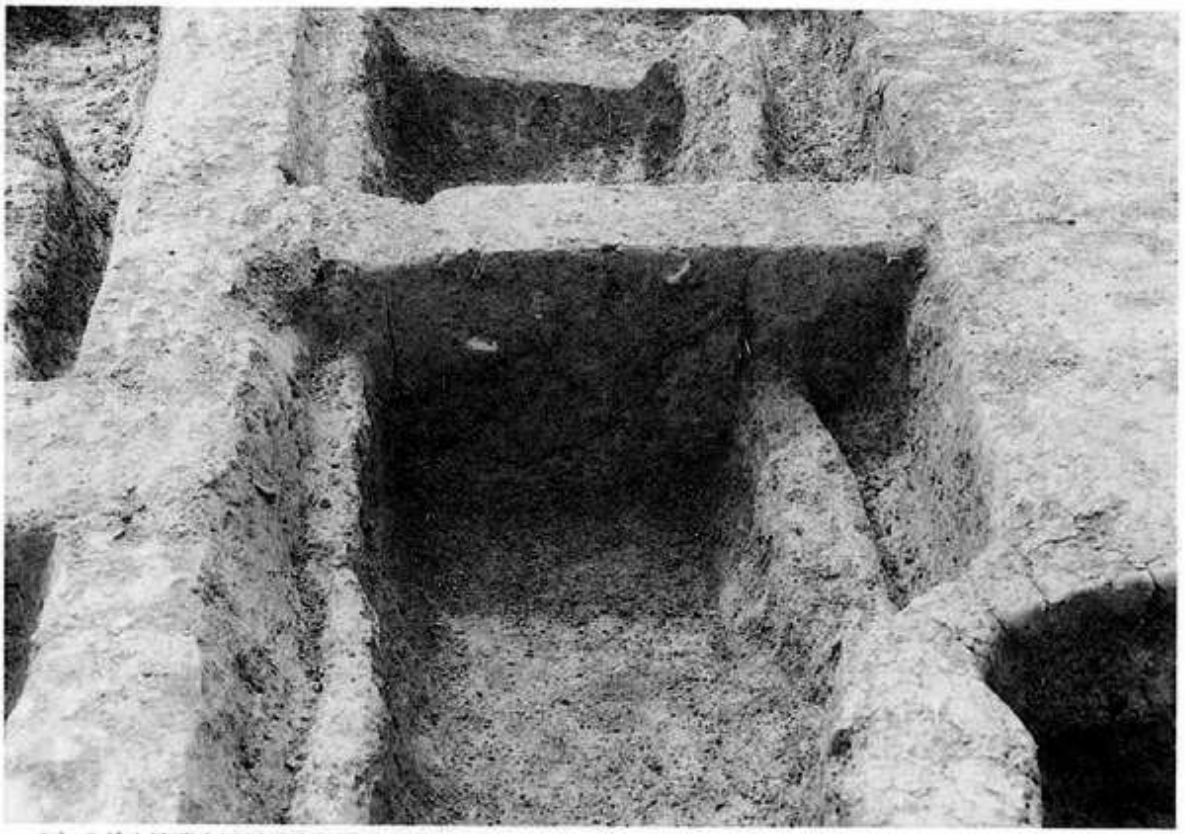
1）9号土壙墓（南から、完掘前）

2）9号土壙墓（北から、完掘後）

1）9号土壙墓南側粘土帯検出状況（北西から）



2）9号土壙墓北側粘土帯検出状況（東から）

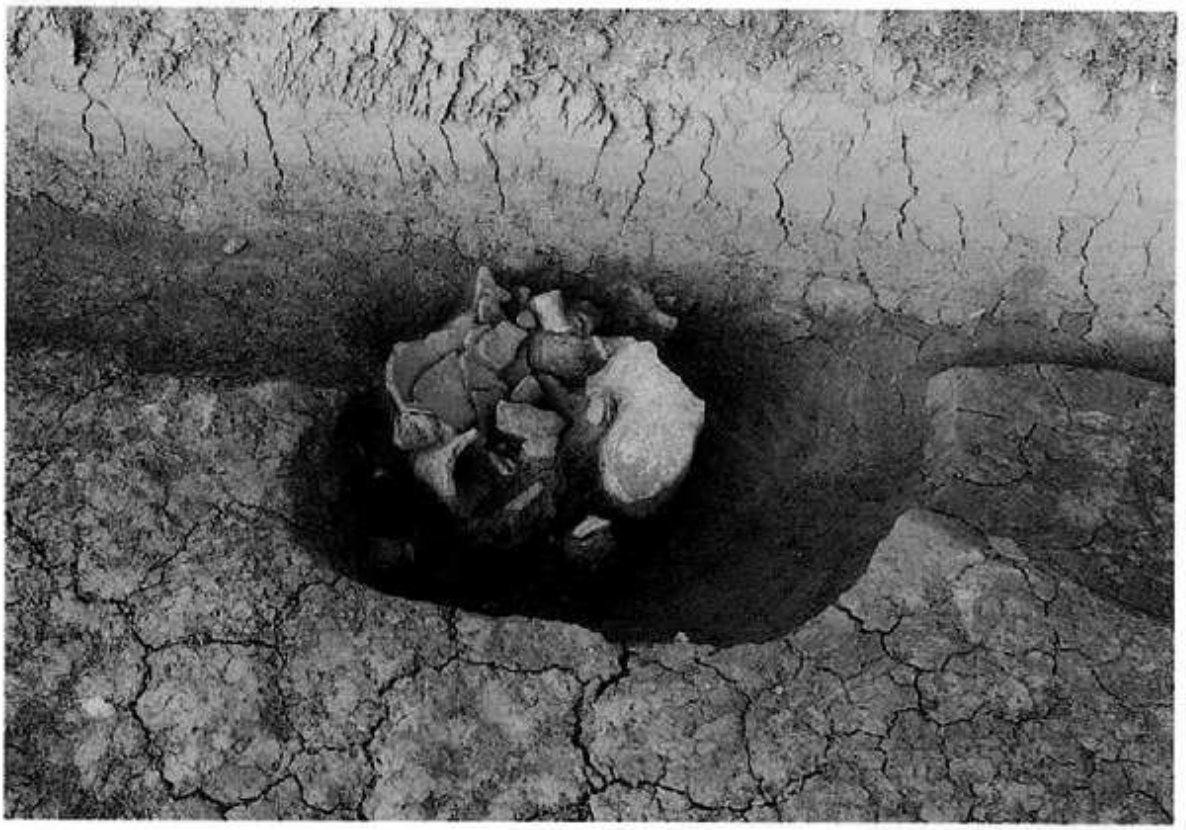


1）8号土壙墓土層断面検出状況（南から）

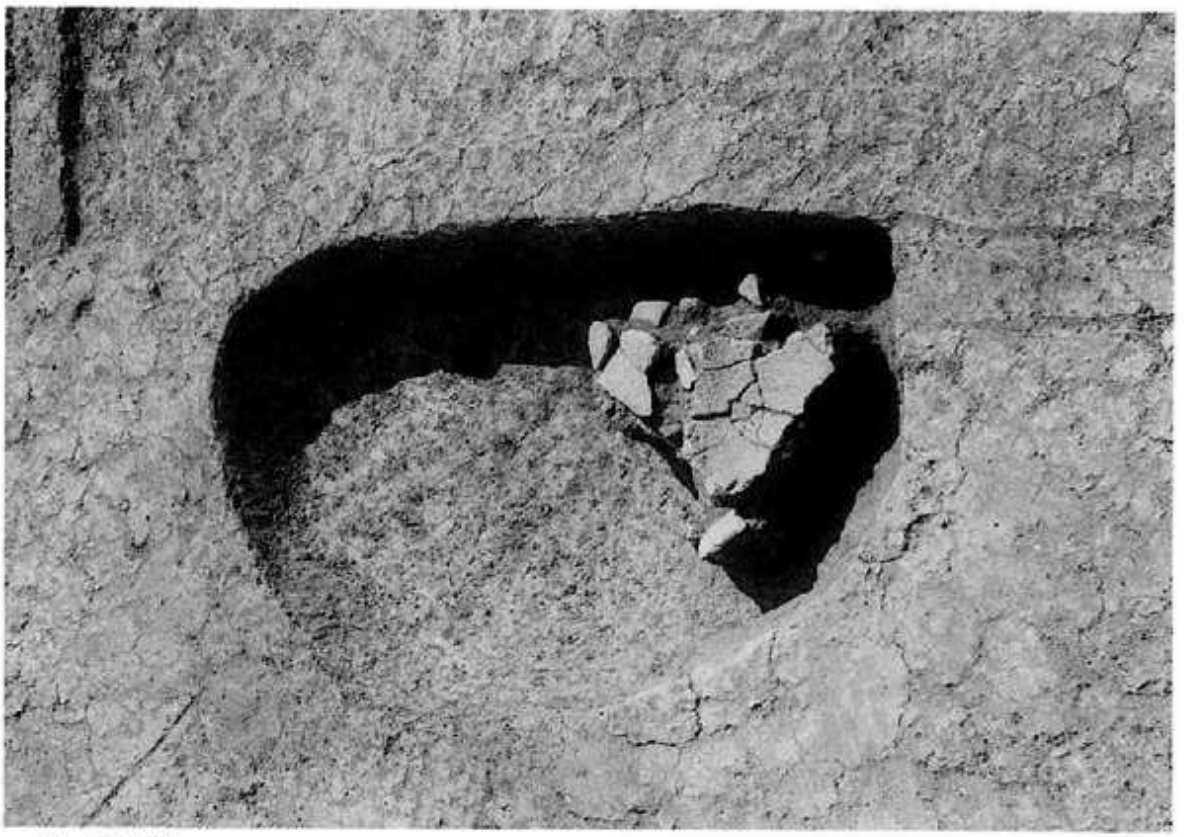
2）9号土壙墓土層断面検出状況（南から）

1）2号土壙

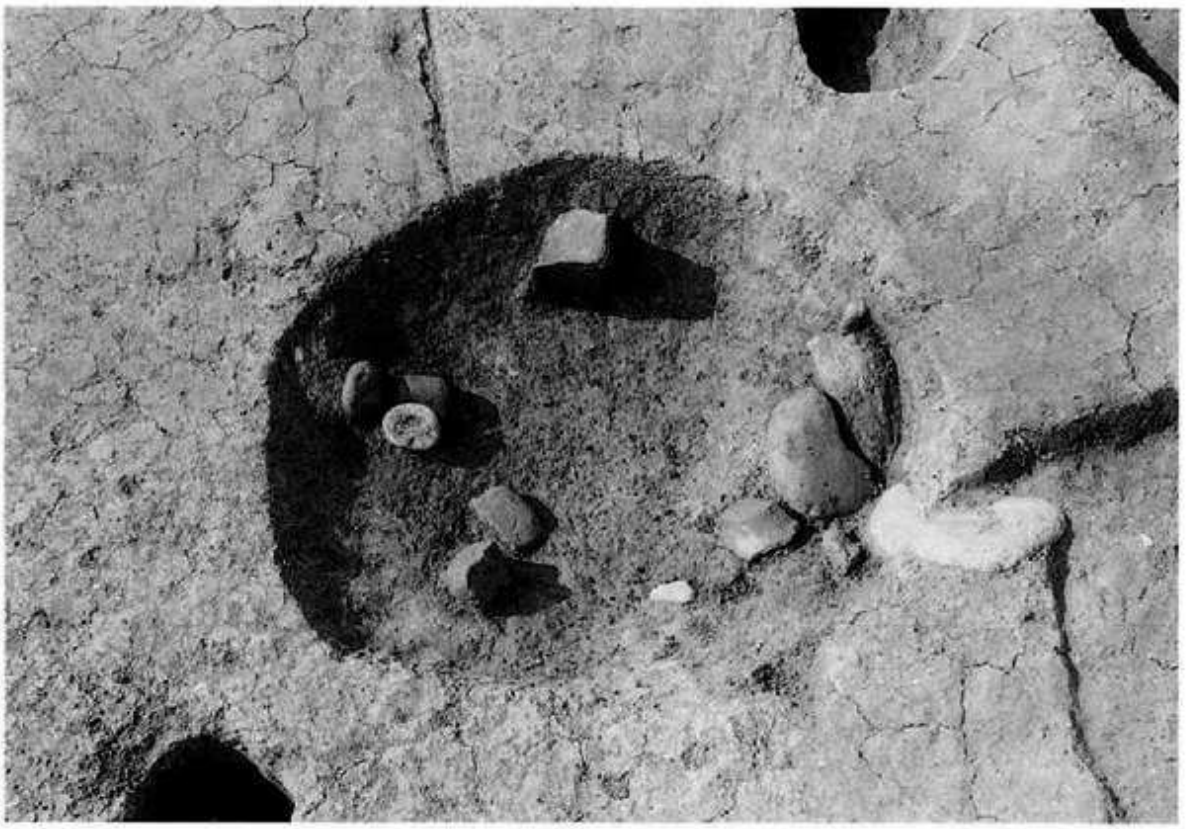
2）5号土壙



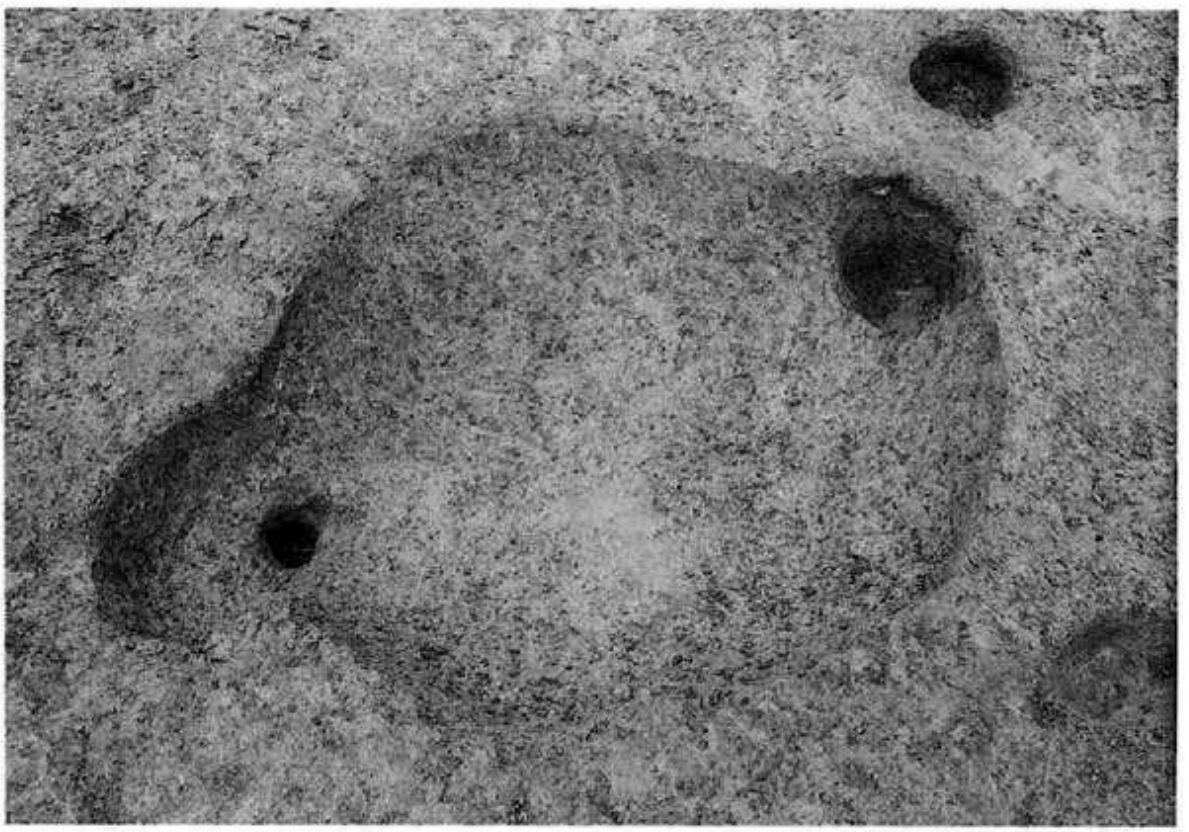
1）3号土坑



2）4号土坑

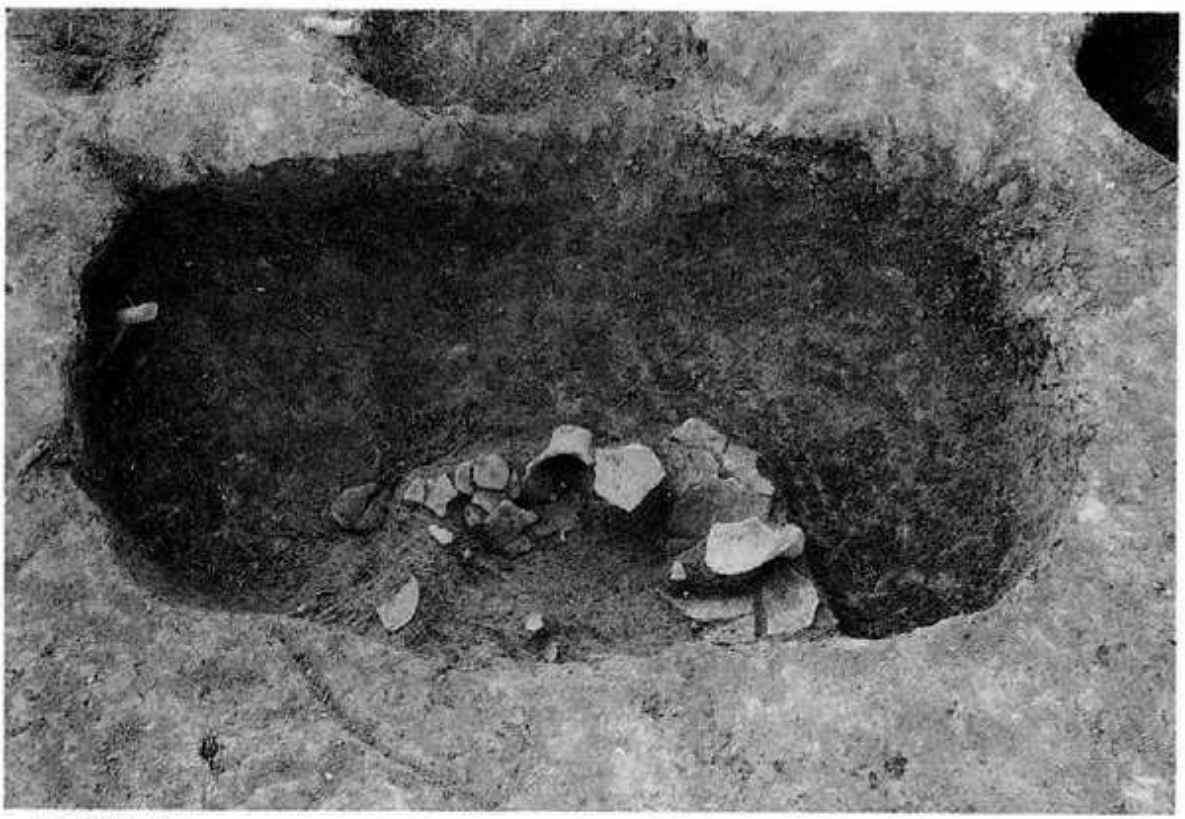


1）12号土坑

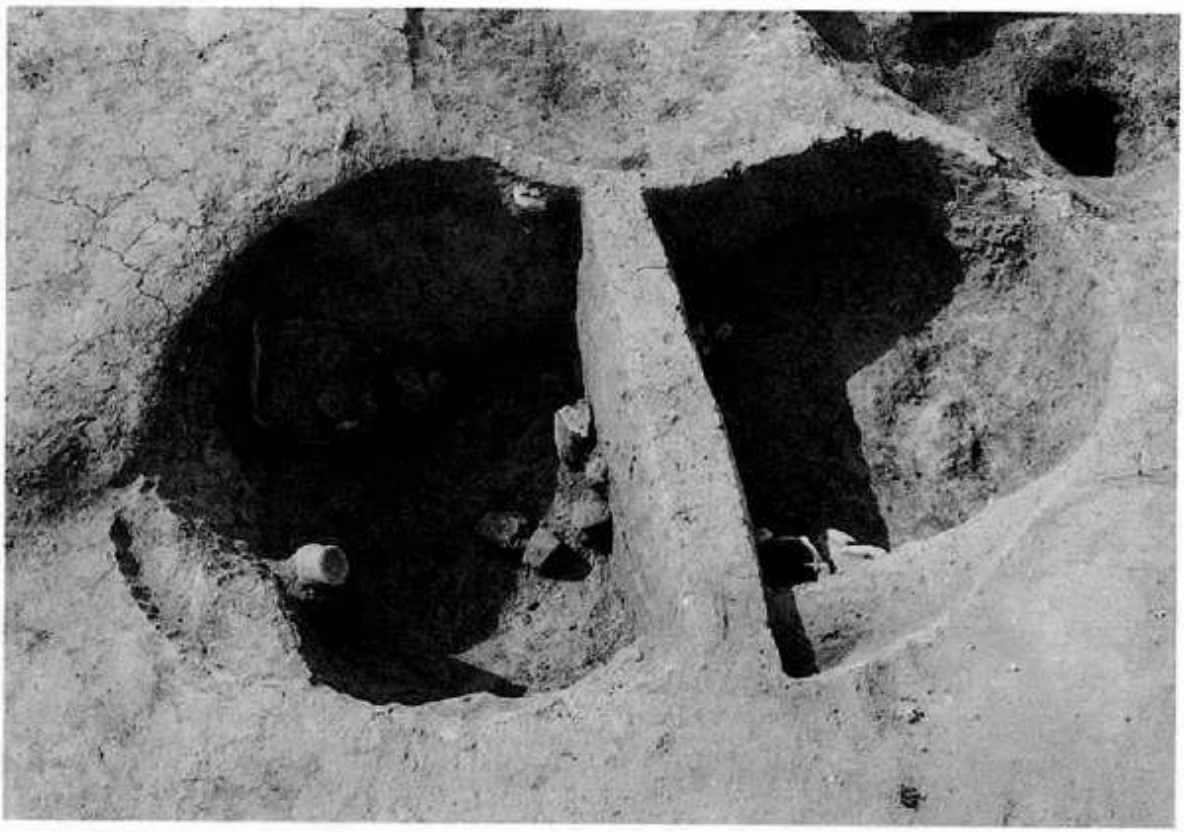


2）26号土坑

1）16号土坑

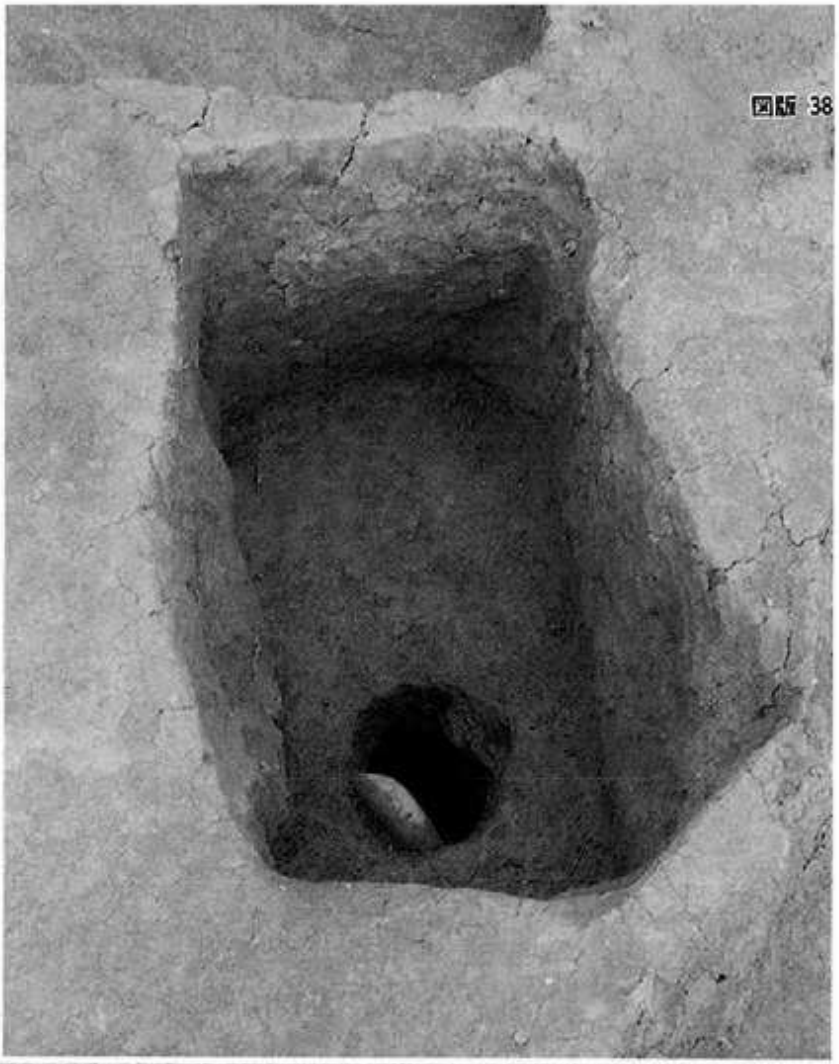


2）28号土坑

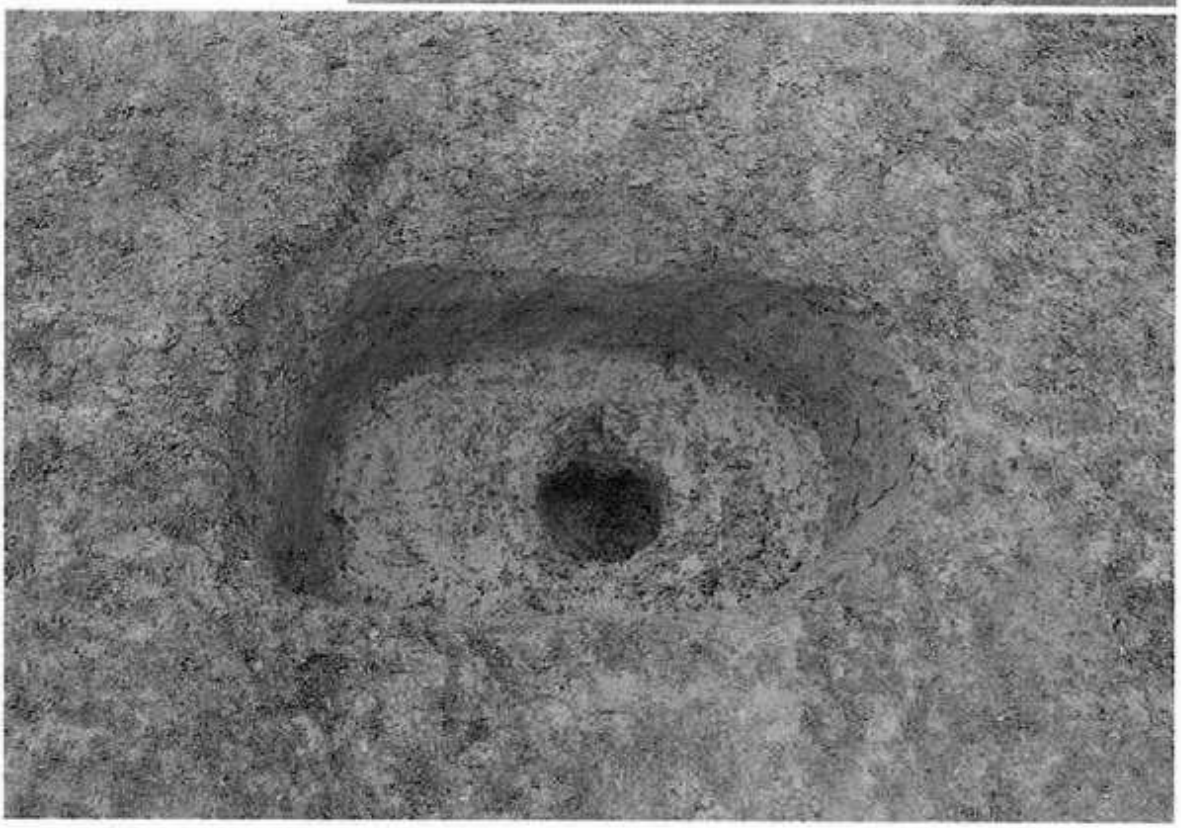


1）29号土坑

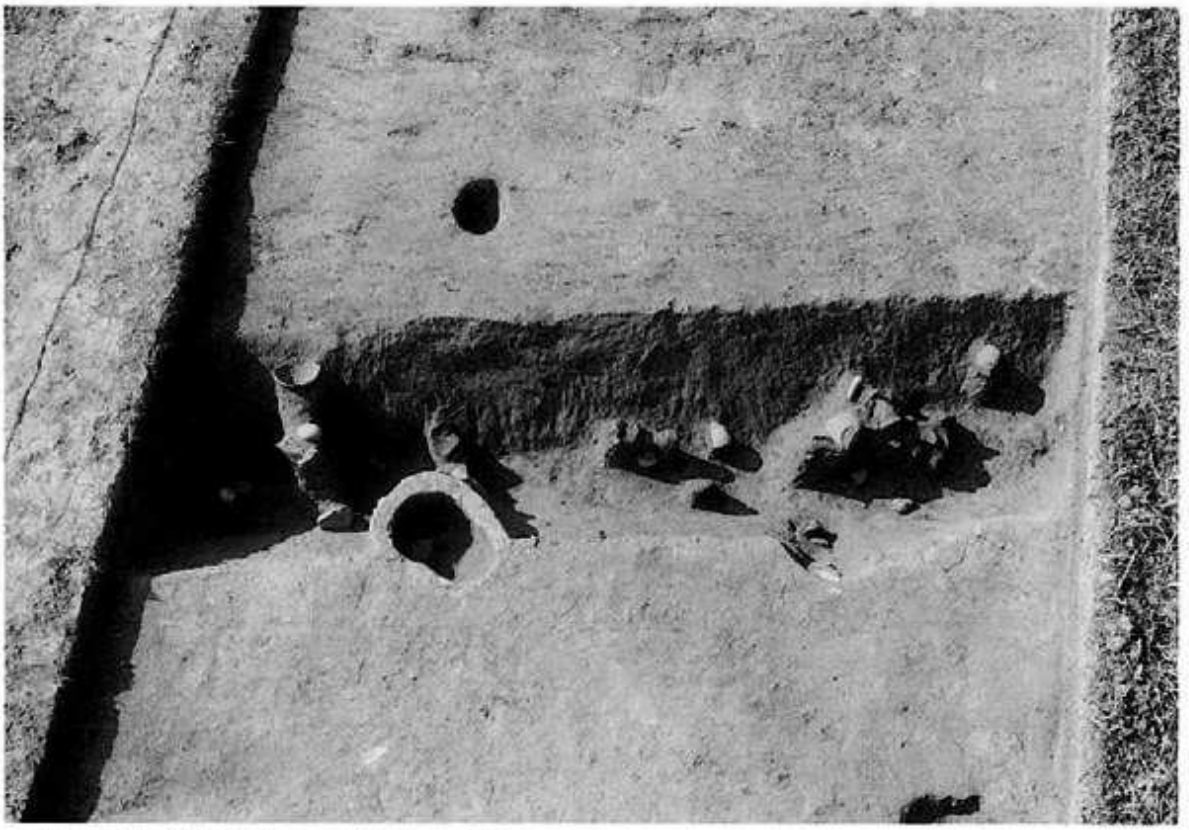
2）21号～25号土坑群



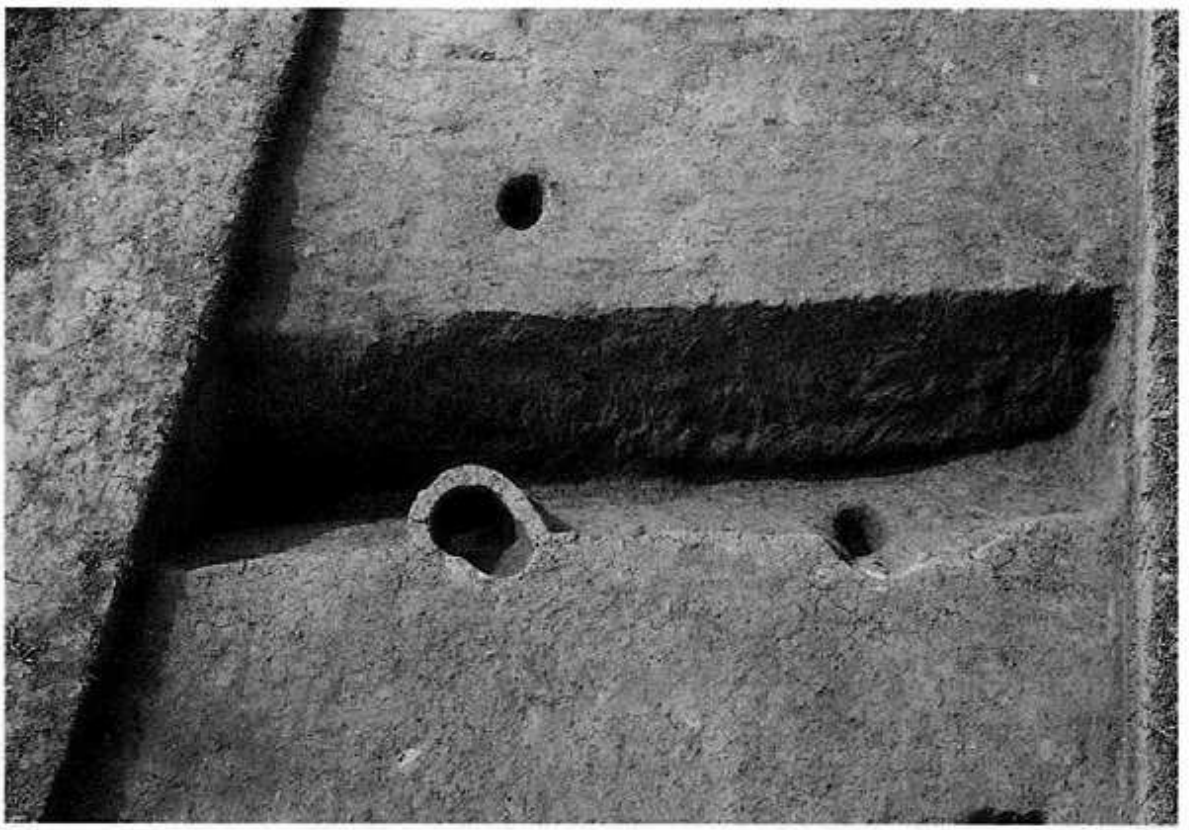
1）4号おとし穴状遺構



2）3号おとし穴状遺構

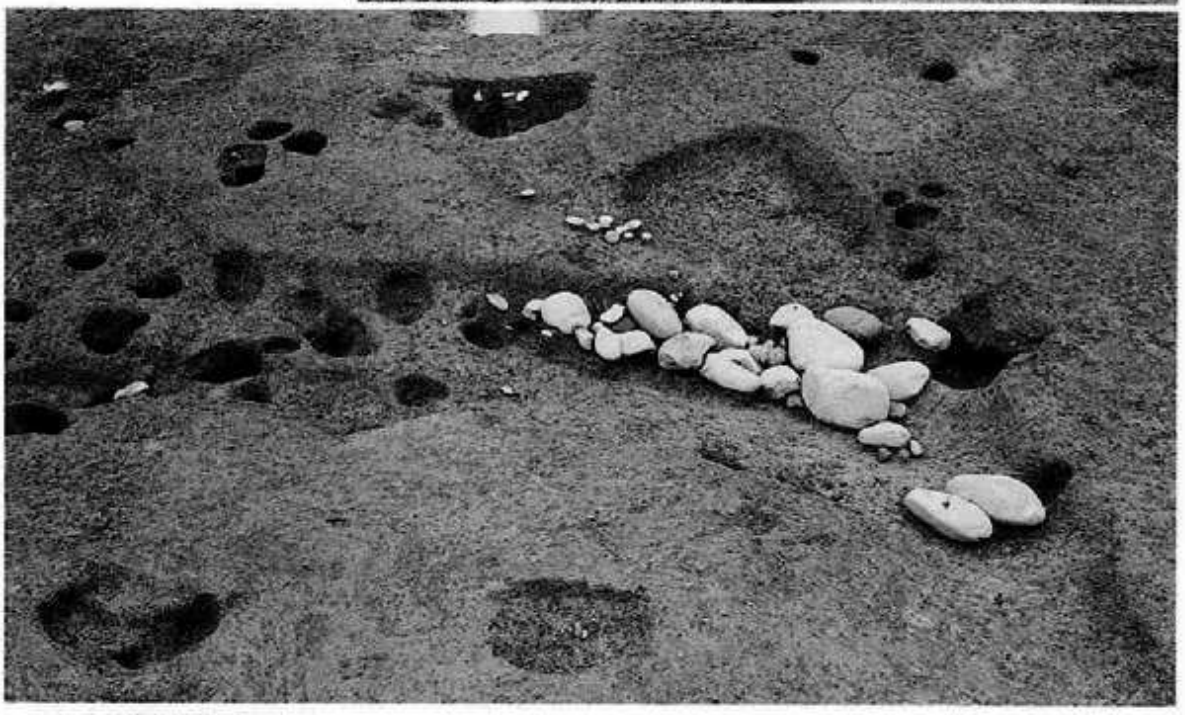


1）2号溝状遺構（西から、土器取り上げ前）

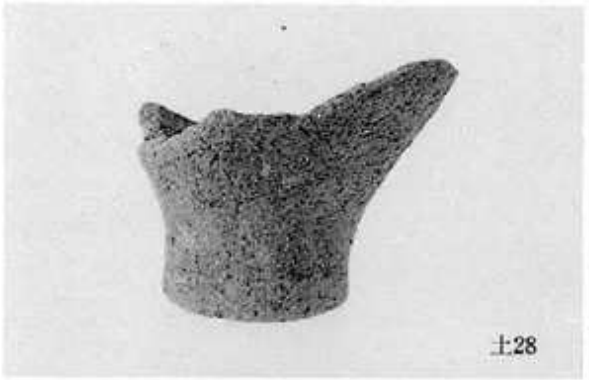


2）2号溝状遺構（西から、土器取り上げ後）

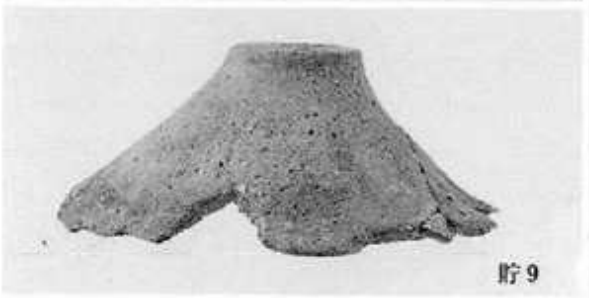
1）4号溝状遺構（西から）



2）6号溝状遺構（西から）


土28

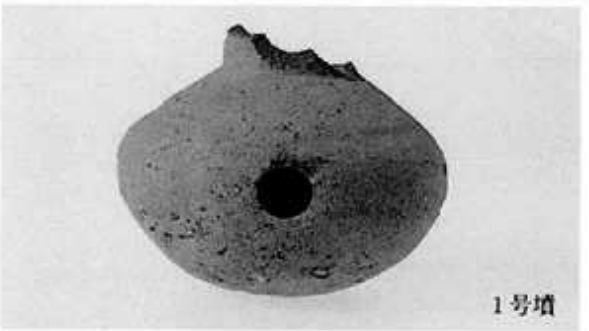
お1


貯9

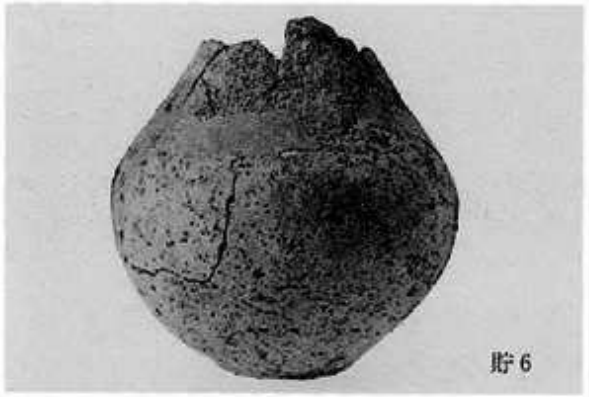
お1

土30

お1


1号墳

凡例：土＝土壙
貯＝貯蔵穴
お＝おとし穴状遺構
住＝竪穴住居跡
M＝溝状遺跡
P＝ピット


貯6

土13

貯9

貯14

土8

貯19

P153

貯14

貯14

土2

神手遺跡出土土器②

M 4

土13

土 3

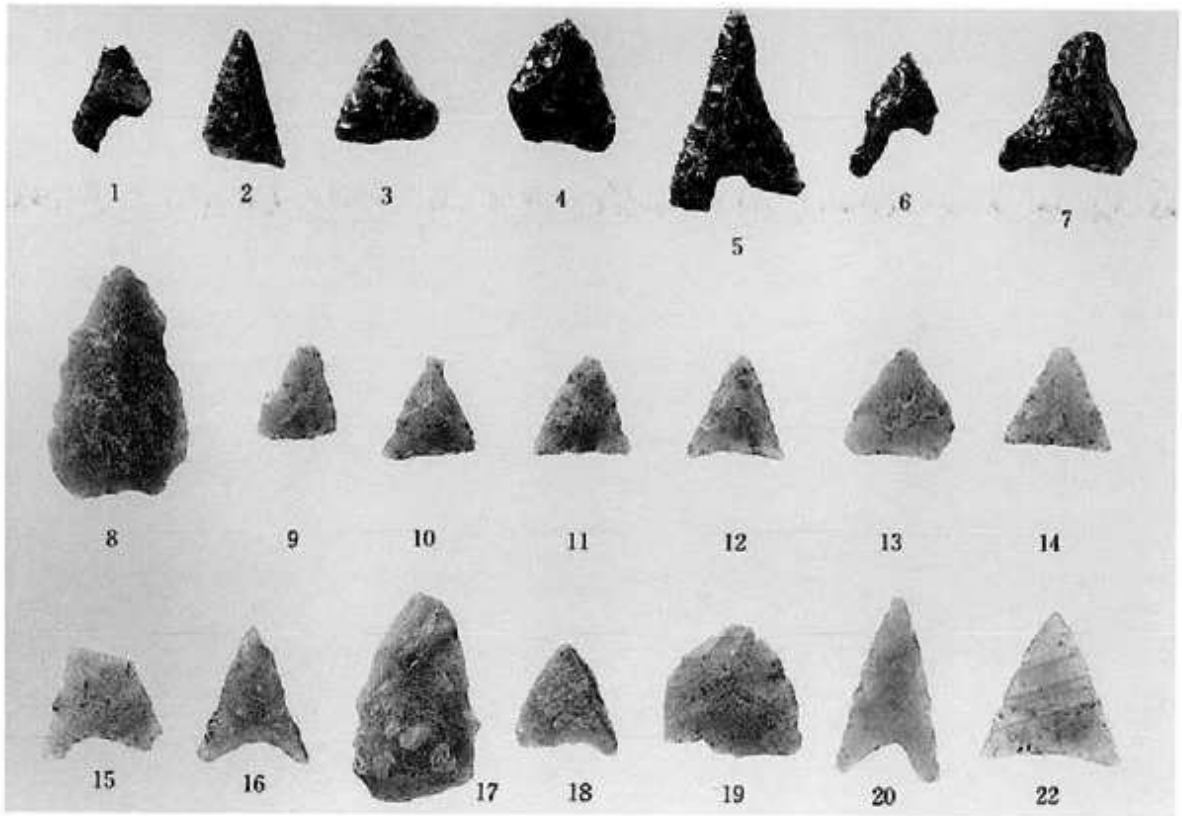
お 2

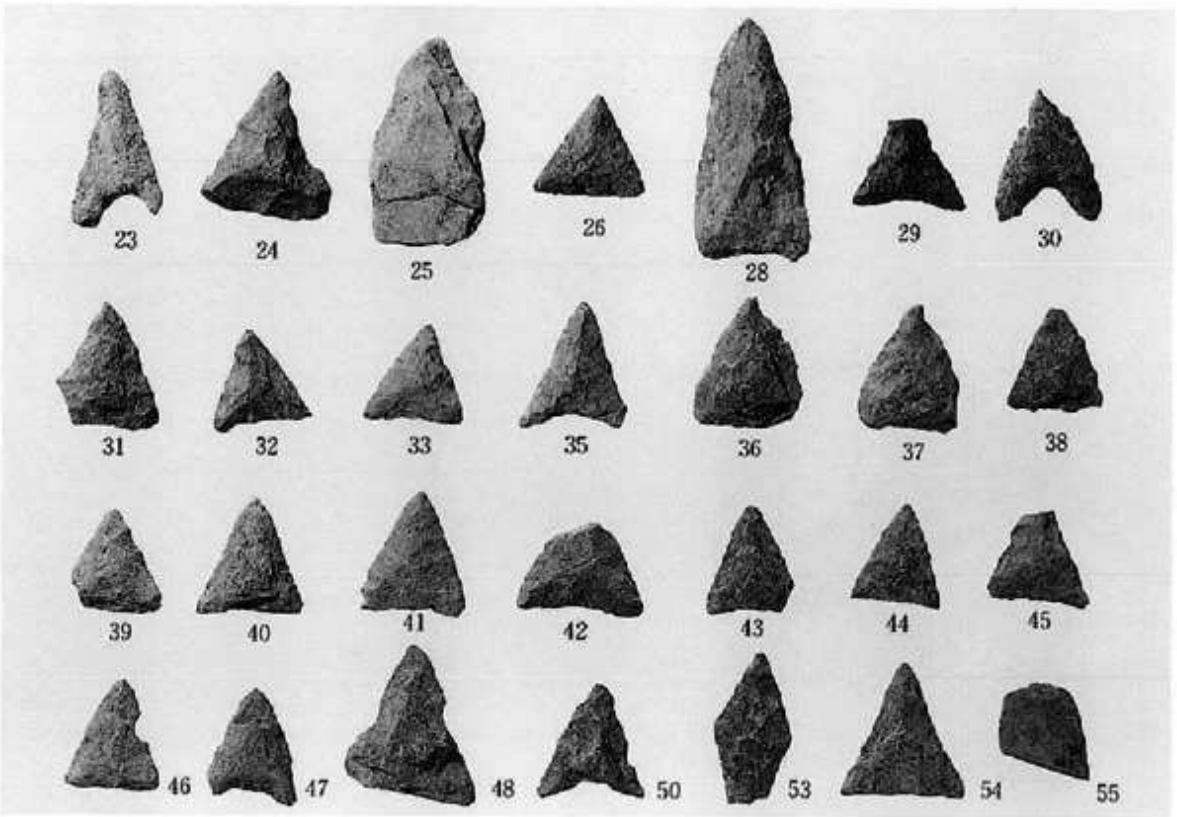
住 4

貯 8

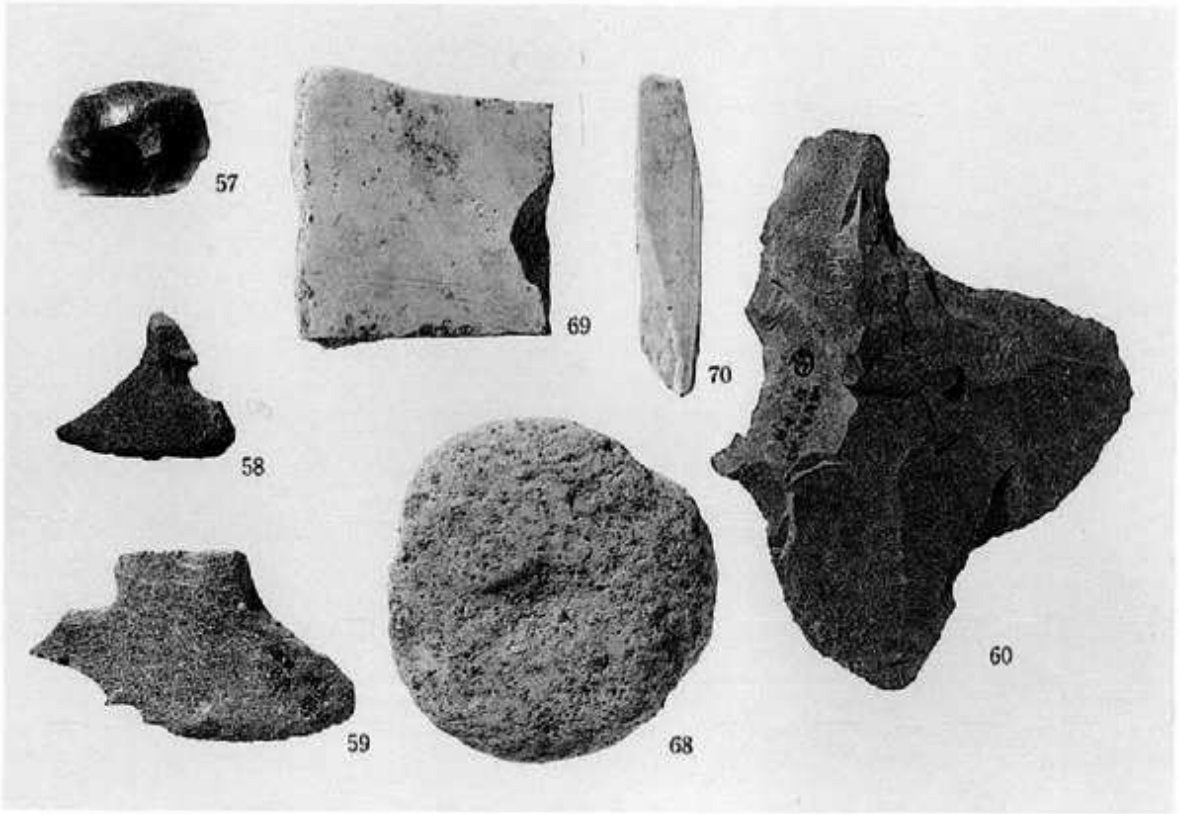
貯10

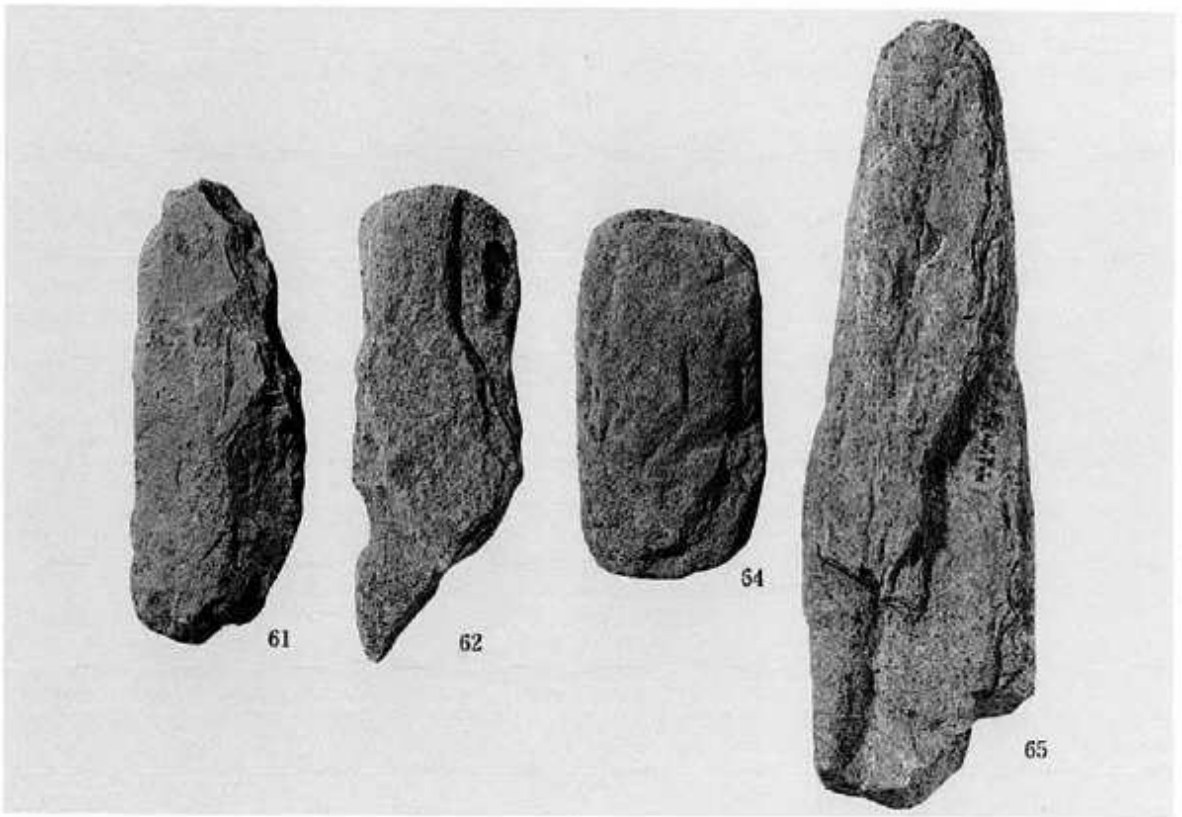
土22


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
22

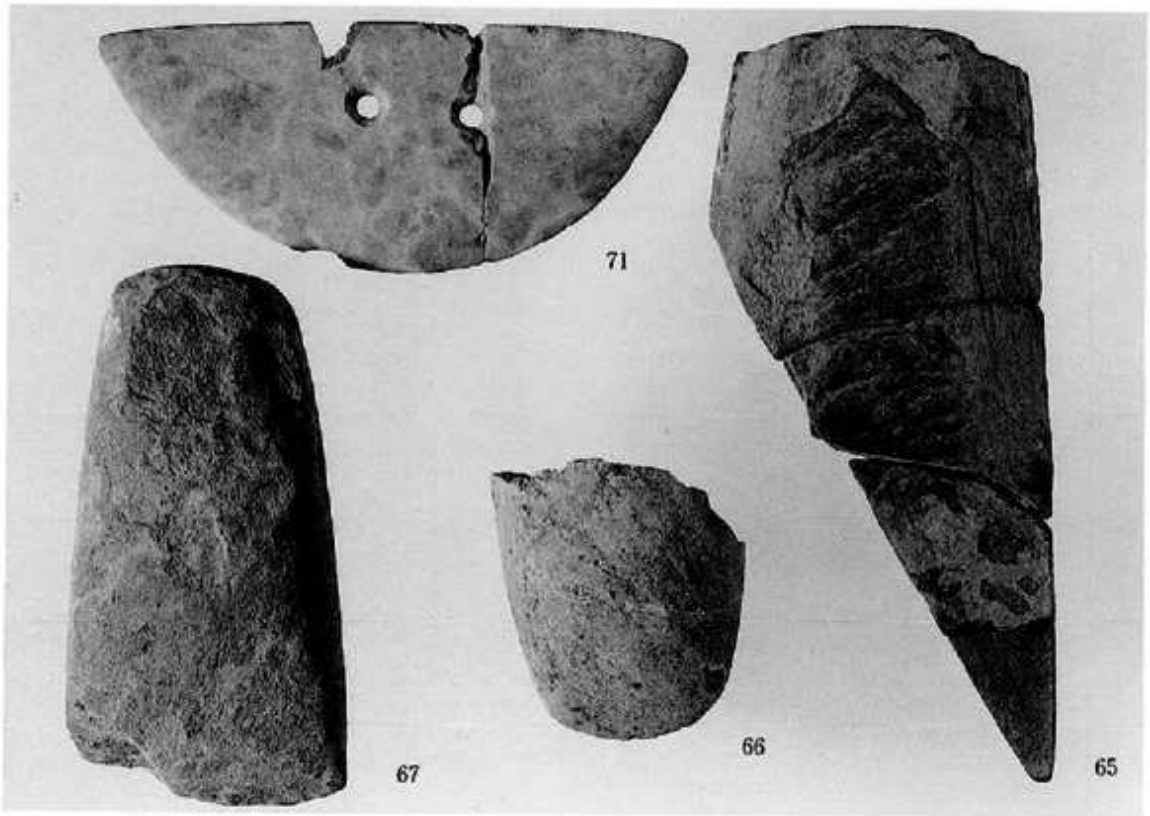

23
24
25
26
28
29
30
31
32
33
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
50
53
54
55

神手遺跡出土石器①

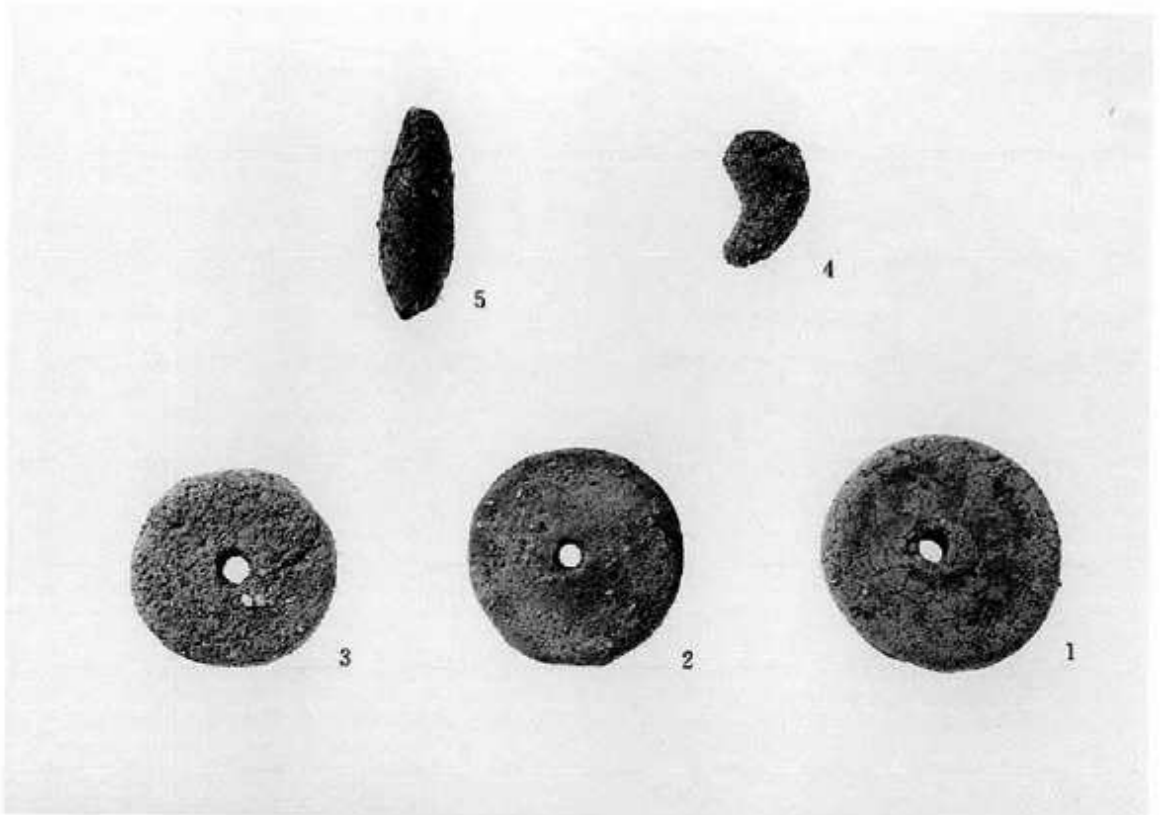




神手遺跡出土石器②



1） 神手遺跡出土石器③



2） 神手遺跡出土土製品

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告
—6—

平成4年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 隆文堂印刷株式会社
北九州市門司区畑田町1番1号

福岡県行政資料	
分類番号 JII	所属コード 2133051
登録年度 3	登録番号 10

一般国道10号線 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第６集

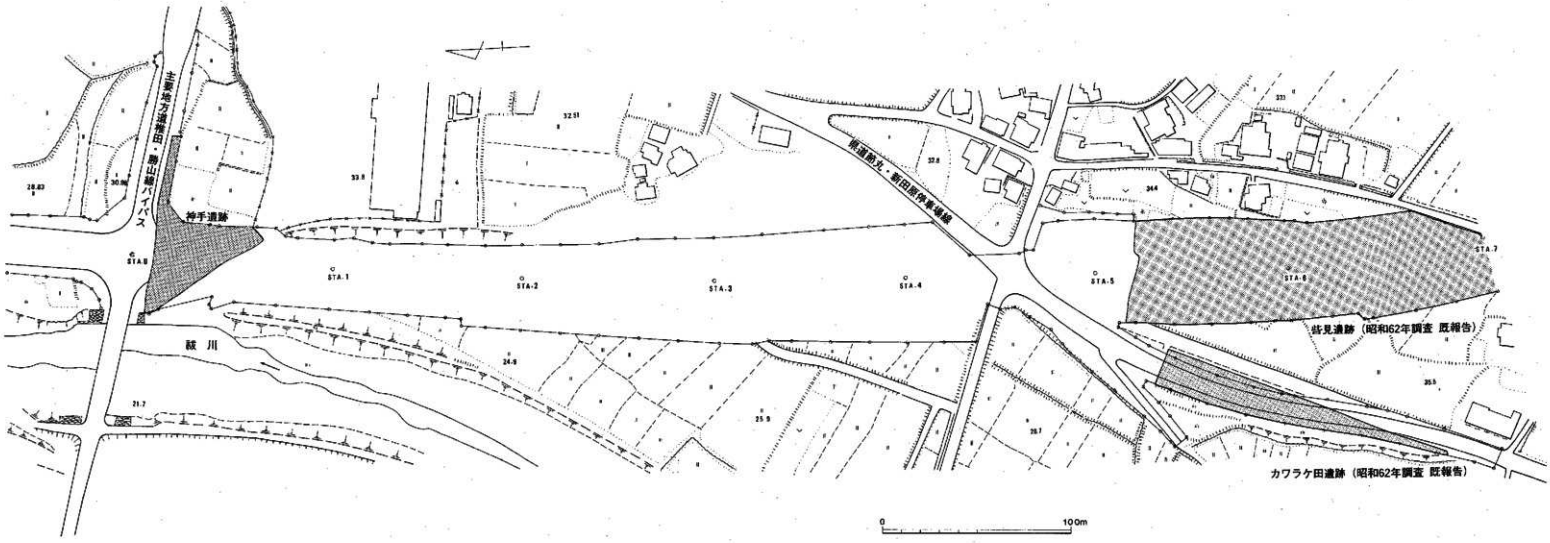
神　手　遺　跡

福岡県京都郡豊津町所在遺跡の調査

付　図

付図１　神手遺跡発掘区地形図（1/2,000）

付図２　神手遺跡遺構配置図（1/200）



付 図 1　神手遺跡発掘区地形図（1/2000）

付図2　遺構配置図（1/200）